

線が円形に廻り、墳丘下では、周溝を示唆するように等高線が括れている。

墳丘築造方法は、台地肩部に存在した地ぶくれ状の高まりを利用して、五領・和泉期住居跡上面に堆積した黒色土（旧表土）上から盛土を行なっている。墳丘中心下の第17号住居跡上には、厚さ7cm、広さ1mにわたって焼土が検出され、第20号住居跡上には、壺（第63図15）が据え置かれ、墳丘築造時の儀礼の一端が認められた。黒色土上に暗茶褐色土、濃茶褐色土、ロームブロック多量に混入の茶褐色土、茶褐色土、濃茶褐色粘質土が、ほぼ水平に盛り上げられている。

周溝は外径27.6m、内径21.5mを測り、南側から南西側にかけて一部根切り溝に搅乱されているが、ほぼ整円形に廻る。北西部の緩斜面部では、6mの幅をあけて切れているが、周溝端部の掘り方はしっかりとおり、当初より構築されなかつたものと思われる。

周溝の幅は1.3~3.9m、深さは0.5~1.8mを測る。東側から南側にかけて広く深く掘り込まれ、緩斜面部に移行するにつれて、細く浅い周溝となっている。外側の壁は、垂直に近く斜く立ち上がり、内側の立ち上がりは西側一部を除いて比較的緩い。周溝底面は平底で凹凸も無いが、底面のレベルは、傾斜に沿って北側へ低くなっている。

墳丘盛土を完全に除去する調査にもかかわらず、主体部はその痕跡すら検出されなかつた。特別に棺を被う施設を構じない木棺直葬であった可能性が強く、近世の社建築時や芋穴構築時に破壊されたものと思われる。

遺物は、墳丘盛土中より剣・刀子が、周溝底より鎌が出土しているが、いずれも原位置を保つものは無い。管玉は、墳頂部の排土を箇にかけた時点で出土している。西側周溝底より小型壺2点、周溝外の土壤より壺・高杯が検出されている。

出土遺物（第61図、図版42・43）

剣（1・2）

身と柄頭の一部を欠損する1は、全長56cm前後を測るものと推定される小形品である。現存する身の長さ44cm、厚さ0.6cm、茎は9.6cmを測る。茎と身の境をなす間は、両関形を呈し、茎に目釘孔は観られない。錆は錆がすすみ明瞭でない。

身の1/2程度を欠損する2は、1よりやや幅広の剣である。現存する身の長さ29.6cm、厚さ0.4cm、茎は11.6cmを測る。明瞭な両関形を呈し、茎の中央には径0.4cmの目釘孔が残る。

刀子（3）

錆がすすみ状態は悪いが、切先と身の一部が残る。残存する身の長さは22cm、幅2cmの細身のものである。

鎌（4）

残存長8.4cm、幅2.8cmを測る。身の1/2以上を欠損するため刃部の形態は不明である。

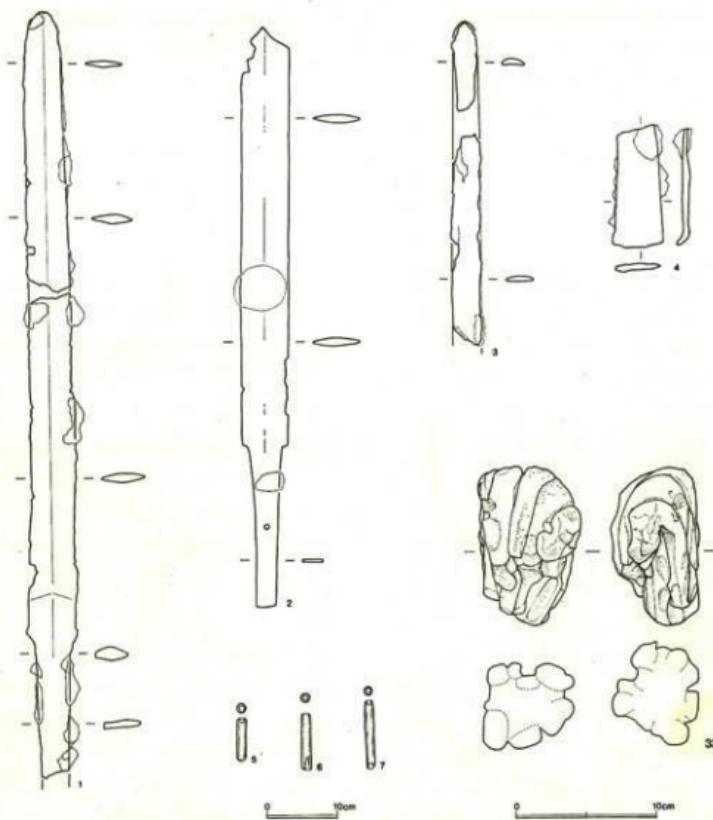
管玉（5~7）

(5)残存長1.5cm、径0.35cm、孔径0.1cmを測る。上下端を欠き、一方はV字形に欠けている。

(6)残存長2cm、径0.35、孔径0.1cmを測る。一方の端部を欠き割れ口はV字形に欠けている。

(7)残存長2.4cm、径0.3cm、孔径0.1cmを測る。上下端を欠き、いずれも斜めの割れ口である。

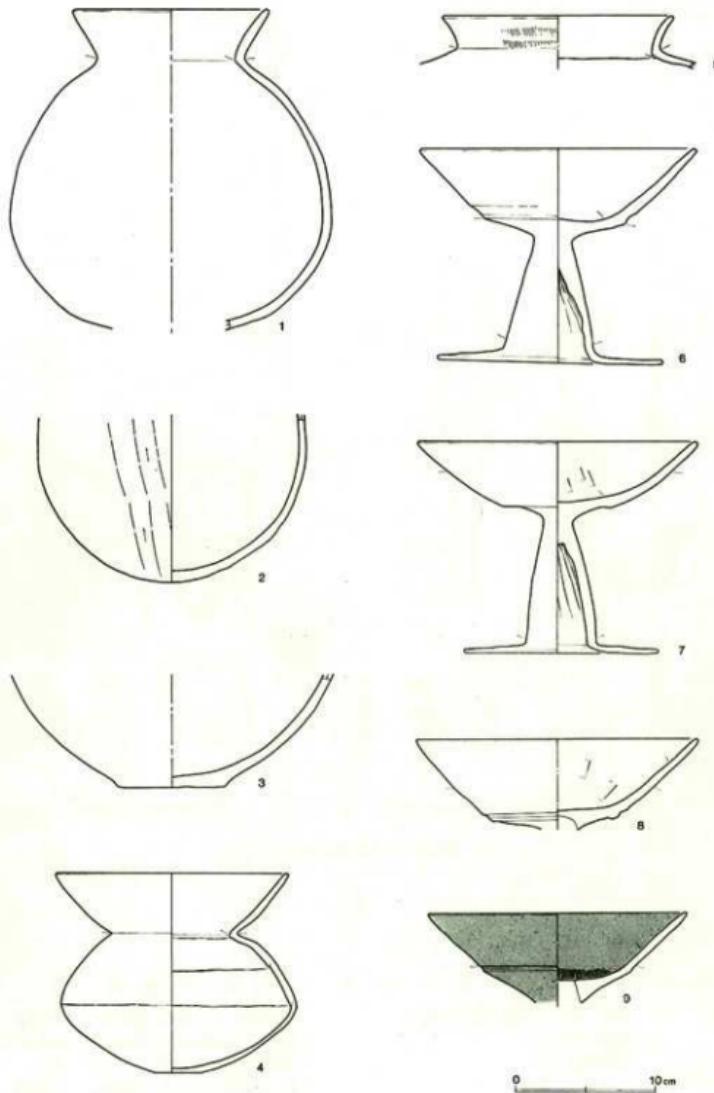
(5)~(7)の3点とも滑石製。V字形の割れ口は、使用時の擦れによると思われる。



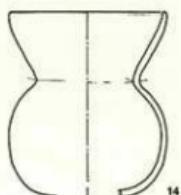
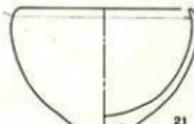
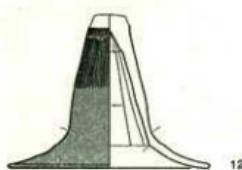
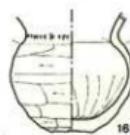
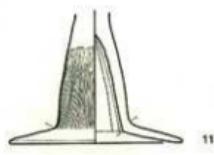
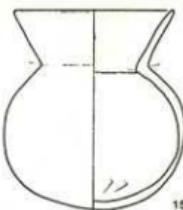
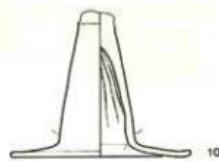
第61図 第1号墳出土遺物(1)

第1号墳出土遺物（第61～64図、図版42・43）

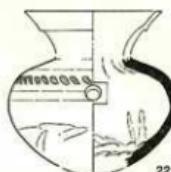
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 13.8 胴径 23.3 現存高23.0	胴部下脹れを呈す。	口縁部横ナデ。胴部外面窪削りの後ナデと思われる。内面上半木口状工具によるナデ、下半ナデ。橙褐色。A～E +細砂粒。胴部外面上半に黒斑。焼成良好。	口縁部90%、胴部70%現存。 1区周。



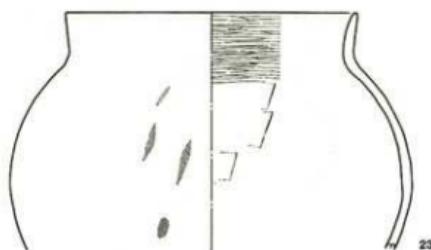
第62図 第1号墳出土遺物(2)



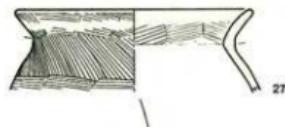
0 10cm



第63図 第1号墳出土遺物(3)



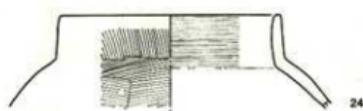
23



27



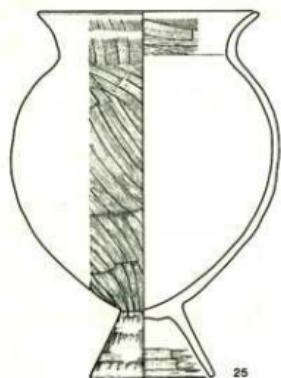
28



24



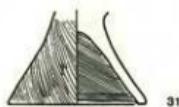
29



25



30

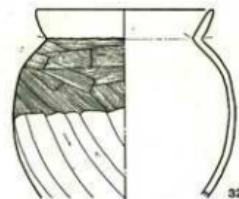


31



26

0 10 cm



32

第64図 第1号墳出土遺物(4)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	2	胴径 19.5 現存高12.0	丸底を呈すと思われる。	胴部外面箋削りの後ナデ。内面ナデ。 橙褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	胴部下半70%現存。 3区周。
壺	3	底径 7.9 現存高 8.1		胴部外面箋削りの後ナデ、内面ナデ。底部箋削り。 淡褐色(暗褐色)。A～E+細砂粒。焼成良好。	胴部下半40%、底部100%現存。
小型壺	4	口径 16.7 胴径 17.1 底径 3.3 器高 14.4	口縁部内彎しながら開く。胴部中央の屈曲は強く、稜をなす。	口縁部横ナデ。胴部外面上半横位のナデ、下半木口状工具によるナデ。底部木口状工具によるナデ。淡褐色。A～E+細砂粒。胴部外面に黒斑。作りは丁寧。焼成良好。	口縁部70%、胴部・底部100%現存。 G T。
壺	5	口径 (16.5) 現存高 3.8		口縁部刷毛目の後横ナデ。胴部内外面ナデ。 褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10%現存。 B T。
高杯	6	口径 19.7 底径 16.2 器高 15.6	高杯底部の段を指で摘み横ナデし形を整えている。	高杯口縁部横ナデ。高杯底部内外面ナデ。柱状部外面ナデ。内面下端の絞目を横位にナデ消す。据部横ナデ。 赤褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	完存。 G T。
高杯	7	口径 20.2 底径 14.0 器高 15.2		高杯口縁部上半横ナデ、下半木口状工具によるナデ。高杯底部外面木口状工具によるナデ。内面ナデ。柱状部外面木口状工具によるナデか、内面指ナデの後絞り、下端はナデ。据部横ナデ。 褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。杯口縁部に黒斑。	完存。 G T。
高杯	8	口径 20.2 現存高 6.0	高杯底部の段を木口状工具によって形を整えている。	口縁部外面上半横ナデ、下半ナデ、内面上半横ナデ、下半木口状工具によるナデ。高杯底部外面木口状工具によるナデ、内面ナデ。 黄褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	杯部90%現存。
高杯	9	口径 (18.8) 現存高 6.4		高杯口縁部横ナデ。高杯底部外面木口状工具によるナデか。内面箋磨き。	口縁部10%、高杯底部100%現存。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	10	底径 13.0 現存高 10.4		淡褐色(赤彩)。A~E+細砂粒。胎土密。焼成良好。	
高杯	11	底径 12.4 現存高 9.3		柱状部外面ナデ、内面指ナデの後紋り、下端のみナデ消す。据部横ナデ。 橙褐色。モンモリロナイト+雲母類+緑泥石+普通輝石+石英+斜長石。焼成良好。	柱状部 100%、据部 30% 現存。 胎土分析試料。
高杯	12	底径 14.5 現存高 10.9		柱状部外面刷毛目の後上位をナデ。内面窓削り。据部横ナデ。 淡褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	柱状部 100%、据部 50% 現存。 D.T.
高杯	13	現存高 9.6	柱状部と据部の境目に横ナデにより小さい段をもつ。	柱状部外面ナデ、内面指ナデ。 橙褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	柱状部 80% 現存。 1 区周。
小型壺	14	口径 (11.0) 胴径 (11.4) 現存高 13.2	口縁部内窓しながら開き、端部近くで小さく立ち上がる。	口縁部横ナデ。胴部外面丁寧なナデ、内面ナデ。 橙褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部 30%、 胴部 40% 現存。 2 区。
小型壺	15	口径 11.3 胴径 13.0 器高 14.3	丸底を呈す。	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、内面上・中位ナデ、下位木口状工具によるナデ。 赤褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部・胴部 90% 現存。
壺	16	胴径 8.9 底径 3.0 現存高 8.5	頸部を断面三角形の工具で刺突しているが、間隔は不均等で乱れている。	口縁部から胴部上端横ナデ。胴部外面窓削り、内面上半ナデ、下半粗いナデ。底部窓削り。 赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。作り難。胴部外面に黒斑。	口縁部 10%、 胴部 80%、 底部 90% 現存。
壺	17	口径 8.4 胴径 7.6 器高 14.2	丸底を呈す。胴部中央に約 4 cm の孔を意図的にあけている。焼成後内側から穿孔している。	口縁部横ナデ。胴部外面上・中位ナデ。下位窓削りの後ナデ、内面ナデ。 淡褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部・胴部 80% 現存。 2 区。
壺	18	胴径 8.0 現存高 5.0	丸底を呈す。	胴部外面上位ナデ、中位・下位窓削り、内面ナデ。 橙褐色。A~F+細砂粒。焼成	胴部 50% 現存。南 pit。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	19	胴径 7.4 現存高 4.2	丸底を呈す。	良好。 胴部外面上半横位のナデ、下半ナデ、内面ナデ。 橙褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	胴部・底部 100%現存。
小型壺	20	口径(10.8) 現存高 4.7		口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、内面木口状工具によるナデ。 橙褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10% 現存。 2区周。
鉢	21	口径(12.2) 底径 4.2 現存高 8.4		口縁部横ナデ。体部外面窓削りの後ナデと思われる。内面ナデ。 底部窓削り。 褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部40%、 体部50%、 底部70%現存。
甌	22	胴径(12.1) 現存高 7.7	櫛状工具による刺突文が巡る。	口クロ左回転成形。刺突文の下は部分的に回転削りを行う。胴下半部は、削りの後指ナデ、内面頸部に絞り目、胴下半部は、青海波当て目の後、右下から左上へ放射状の指ナデ。 灰~黄灰色、器内中央は灰色、外側は灰白色のサンドイッチ状をなす。0.3mm以下石英、長石、黒色粒含む。焼成堅緻(肩に降灰)。	胴部のみ30% 現存。 須恵器。
甌	23	口径(21.2) 胴径(29.1) 現存高17.0		口縁部外面横ナデ、内面窓磨き。 胴部外面刷毛目の後丁寧な磨き。 内面木口状工具によるナデ。 橙褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部・胴部 20%現存。
甌	24	口径(15.8) 現存高 7.7	口縁部は、内傾気味に立ち上がると思われる。	口縁部外面上端横ナデ、以下刷毛目、内面刷毛目。胴部外面刷毛目、内面ナデ。 橙褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10% 現存。 2区周。
台付甌	25	口径 15.8 底径 8.7 胴径 19.4 器高 26.4		口縁部目の細かい刷毛目の後弱い横ナデか、胴部外面目の細かい刷毛目、内面ナデ。脚台部外目の細かい刷毛目の後部分的に横位のナデ、内面下半目の細かい刷毛目の後ナデ。 黄褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部40%、 胴部90%、 脚台部70% 現存。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
S字甕	26	口径(16.4) 現存高 3.3	口縁端部内側に弱い凹線様の段をもつ。	口縁部横ナデ。胴部外面窓削りの後刷毛目。刷毛目が粗く下の窓削りが見える。内面ナデ。頸部内面は刷毛目の後ナデ消している。 灰褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10%現存。 1区周。
甕	27	口径(16.8) 現存高 5.9		口縁部刷毛目の後横ナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ。 赤褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10%現存。 2区周。
甕	28	口径(16.0) 現存高 4.9		口縁部刷毛目の後横ナデ。胴部外面刷毛目、内面窓削り。 橙褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10%現存。 1区周。
台付甕	29	底径(9.4) 現存高 8.3		脚台部外面粗い刷毛目、内面上端ナデ、脚台部外面端部周辺と内面中・下位横ナデ。 赤褐色。A～E+粗砂粒。焼成良好。	脚台部40%現存。 2区周。
台付甕	30	底径(10.9) 現存高 8.0		脚台部外面粗い刷毛目、内面木口状工具によるナデ。接合部内面指ナデ。脚端部周辺弱い横ナデ。 淡褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	脚台部70%現存。 2区周。
台付甕	31	底径 10.0 現存高 6.7		脚台部外面窓磨き、内面刷毛目。 橙褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	脚台部 100%現存。 B T。
小型甕	32	口径 12.8		口縁部横ナデ。胴部外面刷毛目の後下半を窓削り、内面ナデ。 褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部80%、胴部40%現存。 墳丘。
粘土紐塊	33	11.2×7.3 ×6.4 440g	径約1.5～2.0cmの粘土紐を数本束にして2～3つに折りたたみ、焼きあげたもの。表面だけで明確に5本の粘土紐が確認できる。また表面のところどころに、竹管状の棒压痕が残る。	暗茶褐色を呈し、石英、斜長石、モンモリナイトを含む。	胎土分析試料。

第2号墳（第66図）

調査区南部の台地内奥平坦部に存在する古墳群中の1基であり、第4号墳の北側に存在する。M-25グリッドを中心に位置している。

第4号墳より1m低い平坦部に存在し、標高56.2~55.6mの等高線が墳丘上及び周溝上に弧を描き、墳丘を示唆しているが、見かけの墳丘は径が大きく高さの低い、所謂座ぶとん状を呈している。北東方向に一部耕作地があり、東側墳麓には大きな擾乱穴が認められた。墳丘上は、西側を林道によつて一部削られているが、比較的保存状態は良く、大きな擾乱は見られない。

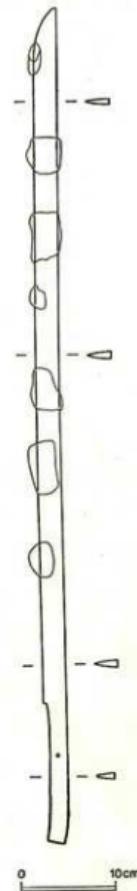
墳丘の盛土状態は、土層断面観察によると旧表土上に、ロームを含む茶褐色土を薄く盛り上げた程度の低いものと推定される。周溝は、北東部の外側壁がやや直線的であるが、全体的にはほぼ整円形を呈している。外径18.6m、内径13.5mを測り、東側の掘り込みが僅かに浅い程度である。周溝の幅は2.5~2.8m、深さ80cmを測り、内側立ち上がりは緩やかに、外側は垂直に近く立ち上がり、掘り方のしっかりした周溝である。覆土は、盛土が流出し堆積したものと思われる黒色土・ロームを含む黒褐色土が確認された。周溝内の遺物としては、西側の周溝底より、須恵器片が出土しているが、余りにも小片のため器種・器形は推定不可能であり、時期決定の資料には成り得ない。

墳丘中央部の表土下より、直刀を副葬したローム櫛と思われる主体部の一部が検出されたが、残念にも擾乱が激しく規模・形態は不明である。

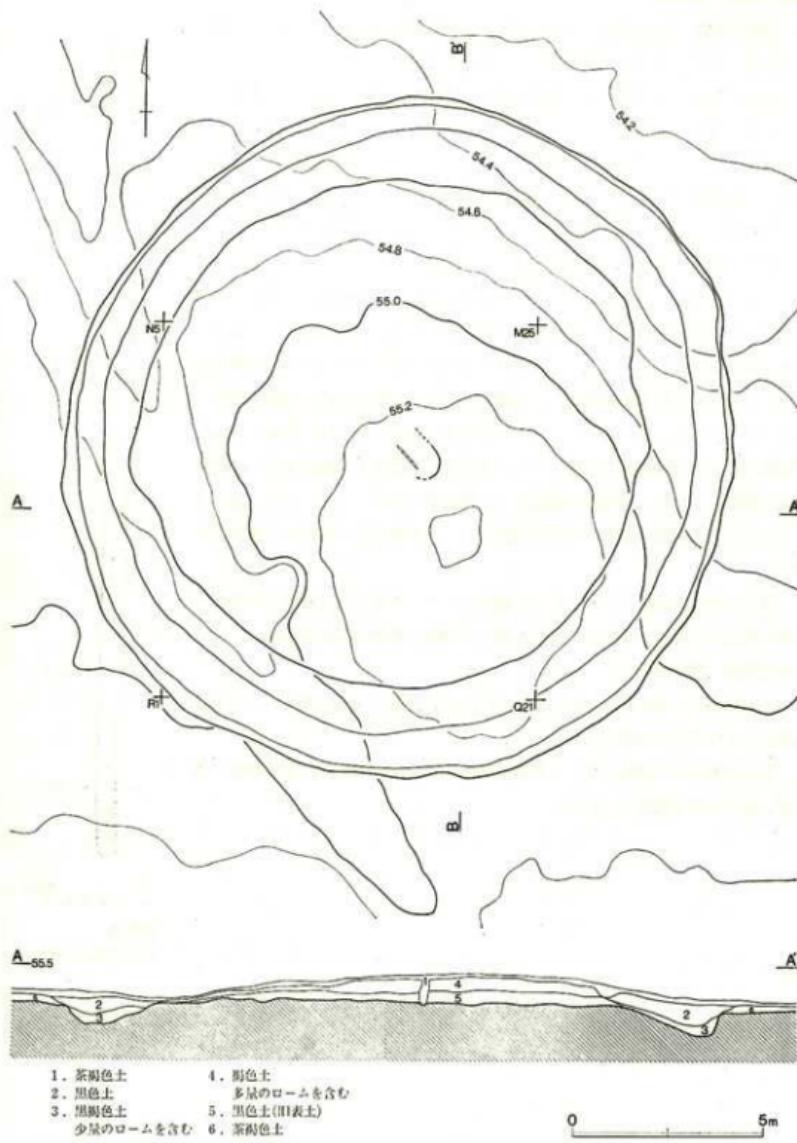
出土遺物（第65図）

刀身長73.6・幅2.6cm、茎長14.8・幅1.8cm、全長88.4cmを測り、1孔の目釘穴をもつ平造りの直刀である。

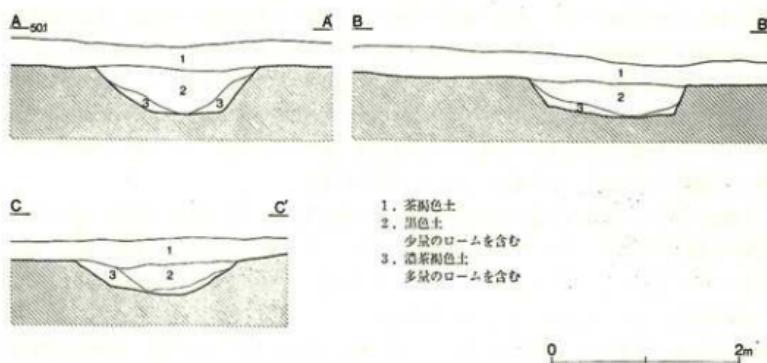
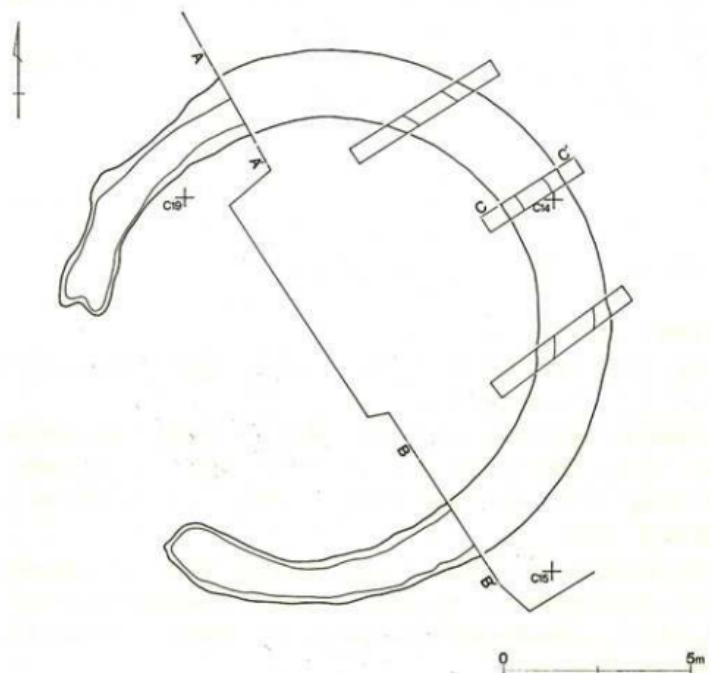
背は平背造りで直線を成し、背幅0.6cm、闊は片闊である。茎は断面三角形、茎尻がやや湾曲している。



第65図
第2号墳出土遺物



第66図 第2号墳



第67図 第3号墳

第3号墳（第67図、図版15）

肩部に築造された第9号墳の南15mに位置し、C-9グリッドを中心に存在している。標高49～50m間の平坦面に、第11号住居跡を切って築造されている。

第9号墳同様に、柔畠として利用されていたために、墳丘は平らに削平され、調査開始時には、墳丘らしきわずかな高まりも無く、土層状態からも把握不可能であった。

東側半分が調査区外であるが、周溝を確認することができた。外径14.5m、内径11.2m、南西部に幅6.1mのブリッジが存在している。周溝の幅は、1.0～1.6mと差が認められるが、良く整った円形を呈している。覆土には、ローム混入の堅くしまった黒色土、濃茶褐色土が堆積していた。周溝底はやや凹凸が観られるものの平底で、底面レベルは傾斜とは逆に北側が10cm程度低くなっている。

調査区内では、主体部は検出されず、遺物の出土も皆無であった。

第4号墳（第68・69図、図版14・15）

調査区で、唯一の横穴式石室が確認された第5号墳の北側に、周溝を接するように存在して検出された。グリッドでは、Q-20・21に位置している。

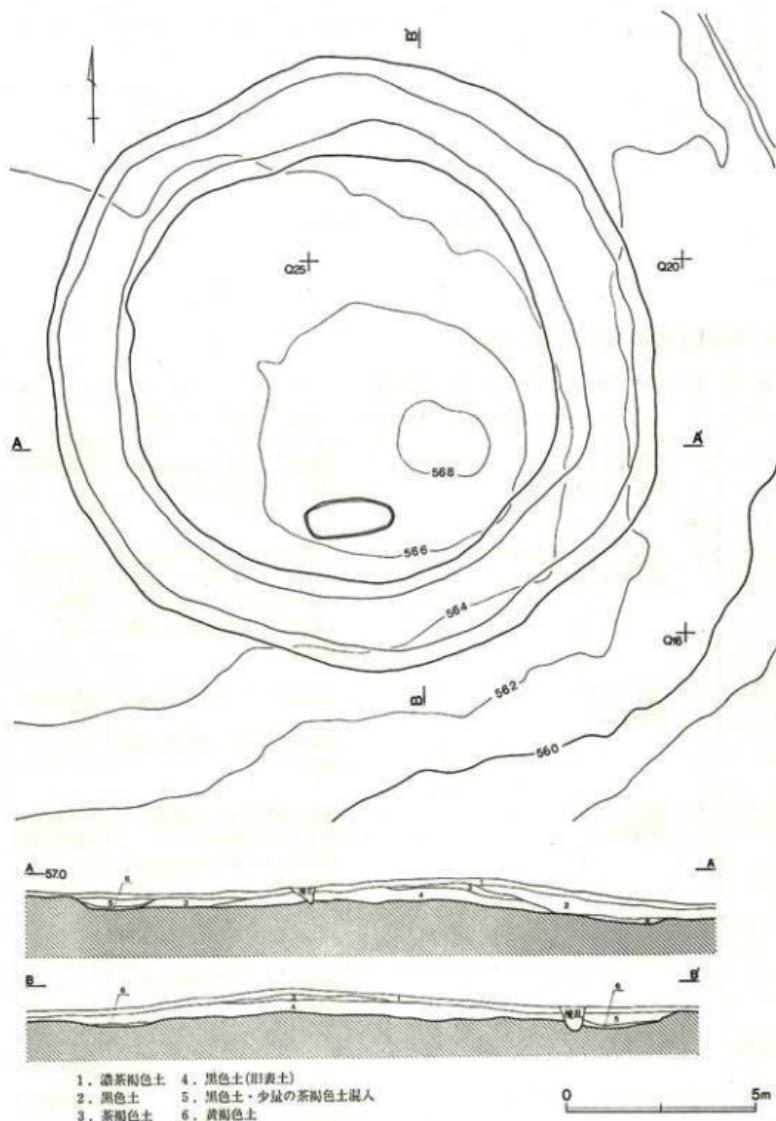
台地縁辺部より250m程奥まった周辺の地形は、標高55～56m、調査区内で最も高所に相当し、第4・5号墳は、西側から弧状に張り出すテラス状の平坦部に築かれている。北及び西側は、等高線の間隔も広く緩やかであるが、東側は、標高55mの等高線を境に、小支谷が多数入り組み、複雑な地形を描いている。

墳丘上から周溝上にかけて、標高56.2～56.8mの等高線が緩い弧を描いて走り、墳丘を暗示しているが、見かけの墳丘は低小で、雜木に被われていると見過ぎる程度の規模と高まりを呈している。墳丘上には、径30cm程の比較的太い松が數本存在するが、規模が小さいためもあってか、大規模な攢乱は見受けられない。

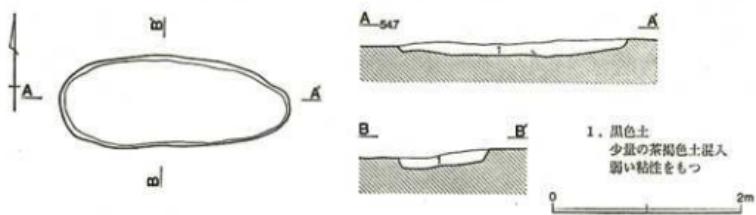
周溝は、東半部の内側立ち上がりがやや直線的であるが、全体的には不整円形を呈している。外径15.9m、内径11.8mを測り、南及び東側では掘り込みが浅く、断面で僅かに確認できる程度である。状態の良い調査区外に接する西側の周溝は、幅2.2m、深さ30cmを測り、壁は緩く立ち上がるが、しっかりした掘り方である。覆土は少量の茶褐色土混入の黒色土、多量のローム混入の黄褐色土である。墳丘盛土の状態は、断面観察からもあまり判然としないが、元来地ぶくれ状の旧表土にソフトローム上面に僅かに達する周溝内の旧表土を薄く盛り上げ、現在ではこの盛土が周溝上に流出し、黒褐色土、黒色土として確認されたものと思われる。

主体部と思われる土塊が、墳丘南部の周溝寄りから検出されている。規模は、長径2.48m、短径0.98mを測る長楕円形を呈し、旧表土を18cm掘り込んでいる。壁の立ち上がりは垂直に近く、掘り方もしっかりしている。覆土は、旧表土とは異なる粘性を帯びた堅い黒色土が全面に堆積していた。

周溝内や墳丘内から和泉期の甕や高杯が10数点出土しているが、付近には和泉期の住居跡などの遺構が無い事、周溝が浅く遺構を切っていない事、墳丘規模が小さく、他から盛土を運んだ可能性が少ないとされるなどから共伴するものと思われる。また、土塊内からも和泉期高杯の破片が出土しており、主体部の可能性が充分認められるものである。



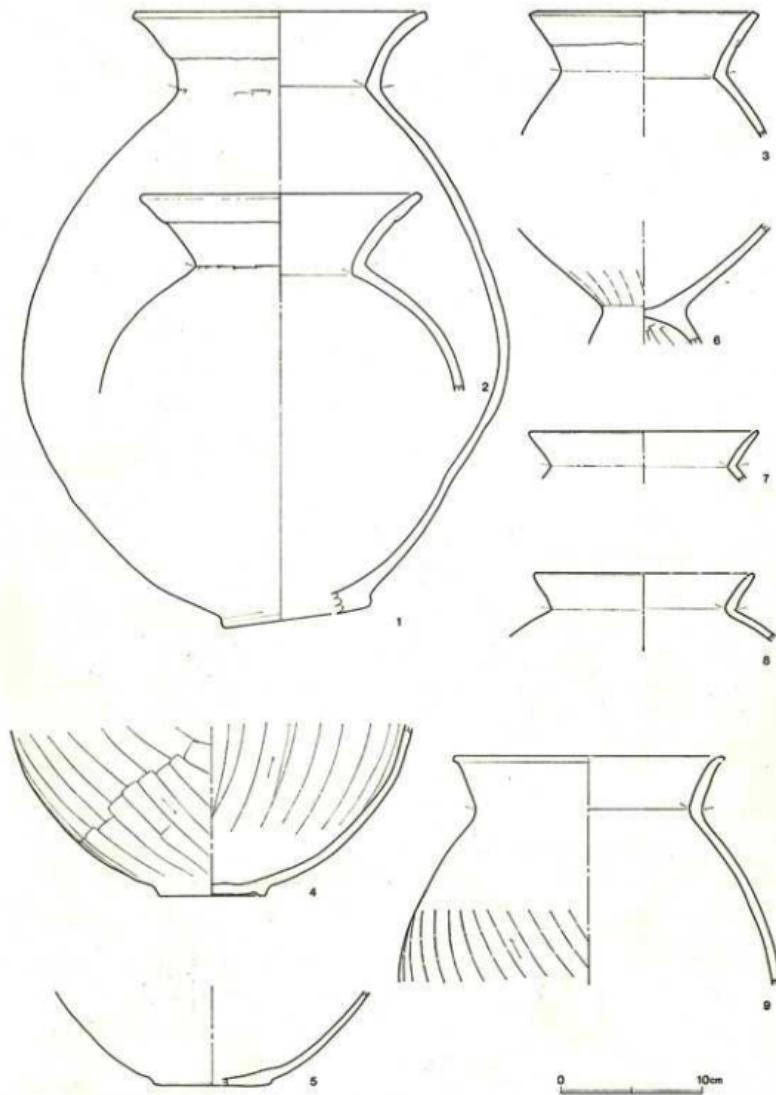
第68図 第4号墳



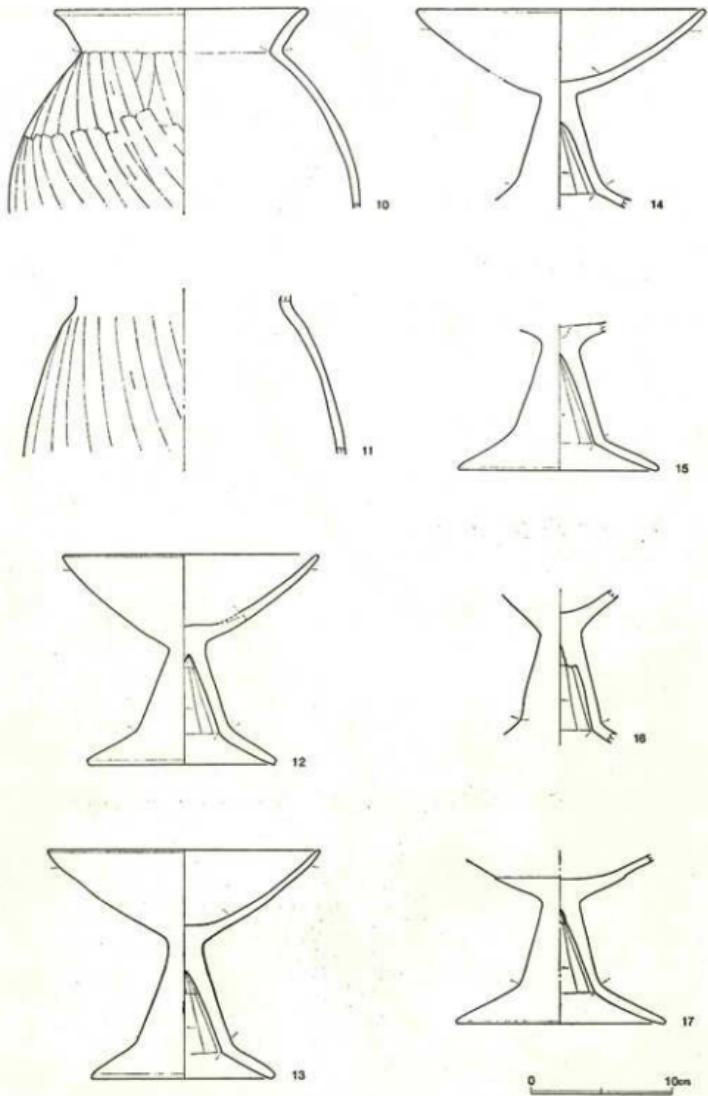
第69図 第4号墳主体部

第4号墳出土遺物（第70～72図、図版44）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 20.7 胴径 34.8 底径 (10.6) 器高 44.0	複合口縁を呈すが、表現が弱い。	口縁部・頸部横ナデ。胴部内外面ナデ。底部ナデ。 橙褐色。A～E + 細砂粒。焼成良好。胴部外面に黒斑。	口縁部90%、 胴部60%、 底部20%現存。 4区。
壺	2	口径 19.7 現存高14.1	複合口縁を呈す。	口縁部横ナデ。頸部外面刷毛目 の後横ナデ、内面横ナデ。胴部 外面丁寧なナデ、内面ナデ。 赤褐色。A～E + 細砂粒。焼成 良好。	口縁部70%、 胴部上半40%現存。 1区。
壺	3	口径 15.4 現存高 8.3		口縁部横ナデ。胴部内外面ナデ。 橙褐色。A～E + 細砂粒。焼成 良好。	口縁部90% 現存。 3区。
壺	4	底径 7.5 現存高12.1		胴部外面箇削り、内面箇削りの 後下位ナデ。底部指ナデ。 橙褐色。A～E + 細砂粒。焼成 良好。	胴下半から 底部50%現存。
壺	5	底径 (8.4) 現存高 6.7		胴部外面箇削りの後ナデ、内面 ナデ。 赤褐色。A～E + 細砂粒。焼成 良好。	底部40%現存。 C・D・2 区。
台付壺	6	現存高 8.5		胴部外箇面削りの後ナデ、内面 ナデ。脚部外面ナデ、内面木 口状工具によるナデ。 赤褐色。A～E + 細砂粒。焼成 良好。	胴部下半20%現存。 2区墳丘。



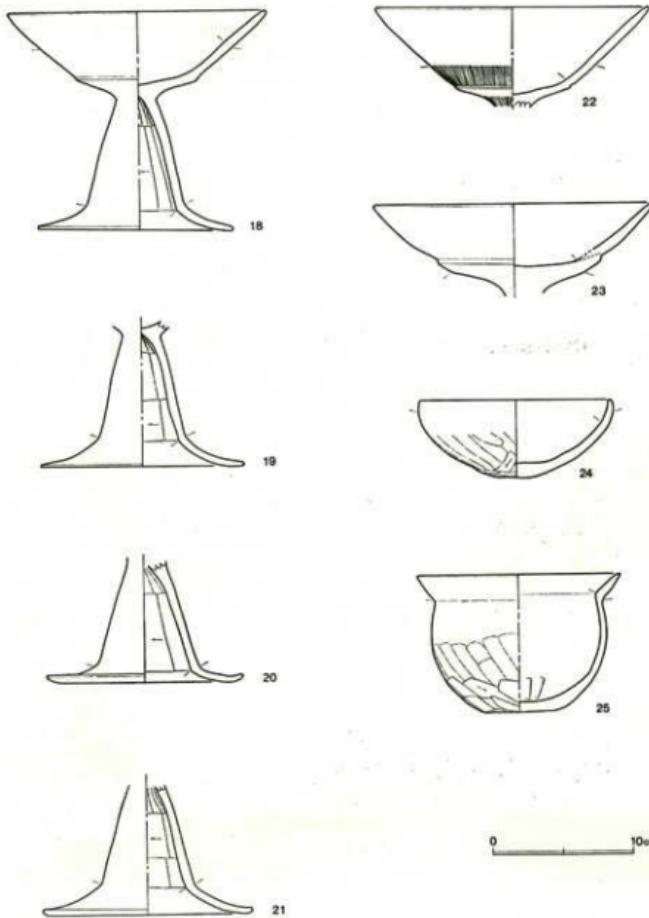
第70圖 第4號墳出土遺物(1)



第71図 第4号墳出土遺物(2)

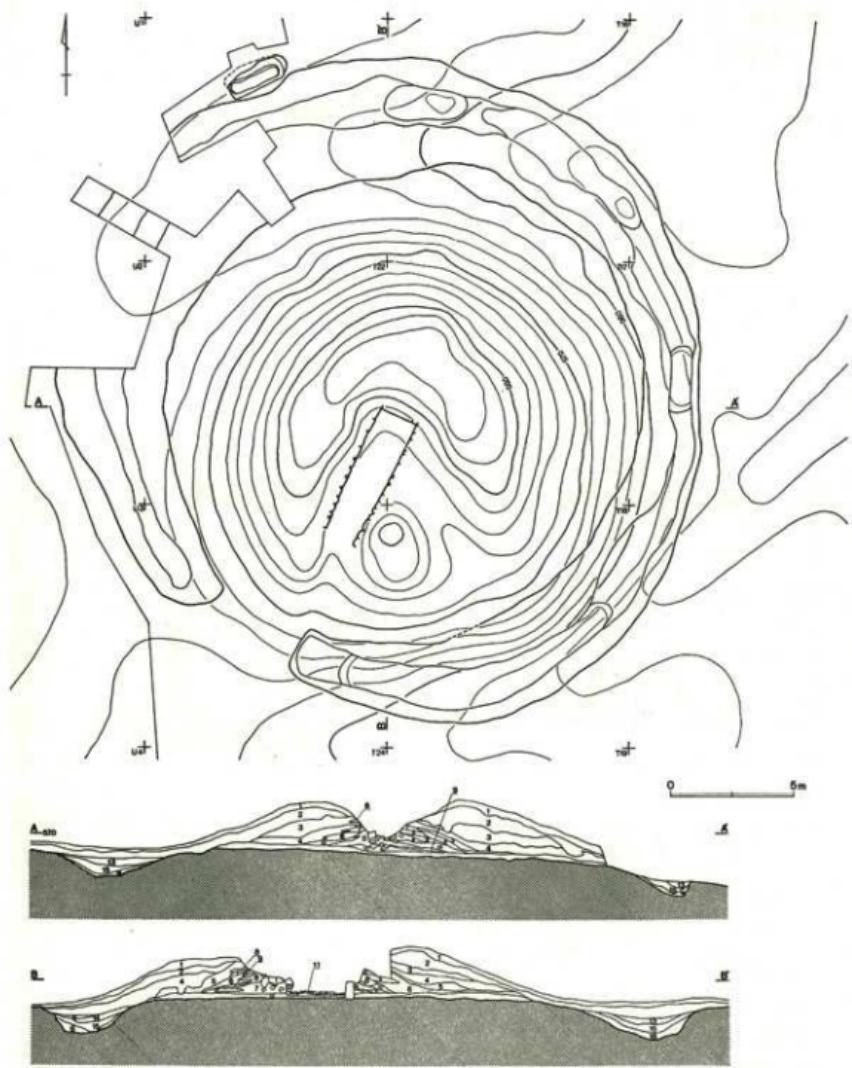
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	7	口径 16.1 現存高 3.6		口縁部横ナデ。 茶褐色。A～E + 細砂粒。焼成良好。	口縁部20% 現存。 C1。
甕	8	口径 15.6 現存高 4.8		口縁部横ナデ。胴部内外ナデ。 黄褐色。A～E + 細砂粒。焼成良好。	口縁部80% 現存。 C1。
甕	9	口径 19.0 現存高16.3		口縁部横ナデ。胴部外面蓖削りの後ナデ、内面ナデ。 橙褐色。A～E + 細砂粒。焼成良好。	口縁部80%、 胴部上半40% 現存。 3区・C区。
甕	10	口径 17.8 胴径 25.2 現存高14.2		口縁部横ナデ。胴部外面蓖削りの後ナデ、内面ナデ。 淡褐色。A～E + 細砂粒。焼成良好。	口縁部60%、 胴部上半70% 現存。 埴丘・2区。
甕	11	現存高11.4		胴部外面蓖削りの後ナデ、内面ナデ。 淡褐色。A～E + 細砂粒。焼成良好。	胴部上半40% 現存。 3区埴丘。
高坏	12	口径(18.2) 底径 13.4 器高 15.0			坏部60%、 脚部100% 現存。
高坏	13	口径(19.5) 底径 13.0 器高 16.3		高坏口縁部外面は上端を横ナデ、以下は縱方向の条線のつくれナデ、内面横ナデ。柱状部外面刷毛目の後ナデ、内面蓖削り。据部横ナデ。 橙褐色。A～F + 細砂粒。焼成良好。	坏部60%、 柱状部 100%、 裾部80% 現存。 2区埴丘。
高坏	14	口径(20.4) 現存高14.1			坏部70%、 柱状部 100% 現存。 3区。
高坏	15	底径 14.2		柱状部外面ナデ、内面蓖削り。 据部横ナデ。 橙褐色。A～E + 細砂粒。焼成良好。	柱状部90%、 裾部80% 現存。 3区。
高坏	16	現存高10.9		高坏底部内外面ナデ。柱状部外面ナデ。内面蓖削り。据部横ナデ。 橙褐色。A～F + 細砂粒。焼成良好。	高坏底部50%、 柱状部 90% 現存。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	17	底部(14.9) 現存高12.0		柱状部外面ナデ、内面窓削り。 裾部横ナデ。 橙褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	高坏底部40%、脚部80%、裾部20%現存。 FT。
高坏	18	口径 18.4 底径(14.0) 器高 15.8		高坏口縁部内外面横ナデ。高坏底部内外面ナデ。柱状部外面ナデ、内面上位指ナデの後絞り、中位・下位窓削り。裾部横ナデ。赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。口縁部外面に黒斑。	坏部80%、 柱状部90%、 裾部40%現存。 4区。
高坏	19	底径(14.7)		柱状部外面ナデ、内面上位指ナデの後絞り、中位・下位窓削り。裾部横ナデ。 橙褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	柱状部 100%、 裾部20%現存。 4区。
高坏	20	底径 14.2 現存高 8.8		柱状部外面ナデ、内面窓削り。 裾部横ナデ。 赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	柱状部90%、 裾部20%現存。
高坏	21	底径(15.1) 現存高 9.2		柱状部外面ナデ、内面窓削り。 裾部横ナデ。 赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	柱状部40%、 裾部20%現存。 C区。
高坏	22	口径 19.5 現存高 7.1		高坏口縁部外面の細かい刷毛目の後横ナデ。内面横ナデ。高坏底部外面の細かい刷毛目の後ナデ、内面ナデ。 赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	高坏口縁部 70%、底部 40%現存。 4区。
高坏	23	口径 20.0 現存高 6.6		高坏口縁部内外面、底部上端横ナデ。 橙褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	高坏口縁部 70%、高坏 底部40%現存。
坏	24	口径 13.6 底径 2.0 器高 5.5	口縁部は、僅かに内彎する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面窓削りの後ナデ、内面ナデ。底部窓削り。 赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部・体 部70%、底 部100%現 存。 3区。
鉢	25	口径 14.5 底径 5.0		口縁部横ナデ。体部外面窓削りの後上位・中位ナデ、内面上位。	口縁部70%、 体部60%、



第72図 第4号墳出土遺物(3)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		器高 9.8		中位ナデ、下位木口状工具によるナデ。 茶褐色。A~F + 細砂粒。焼成良好。	底部100%現存。



- | | | |
|-----------|--------------|-----------|
| 1. 茶褐色土 | 6. 黄褐色土 | 13. 淡茶褐色土 |
| 2. 黄褐色土 | 多量の黒褐色土混入 | 少量の砂紋を含む |
| 3. 茶褐色土 | 7. 黑褐色粘土 | 14. 黄褐色土 |
| ロームブロック混入 | 8. 黄白色粘土 | 15. 黑色土 |
| 4. 黑褐色土 | 9. 黑褐色土 | 16. 黄褐色土 |
| 微量のローム混入 | 10. 淡茶褐色土 | |
| 5. 黄褐色土 | 11. 淡灰岩パラス | |
| 少量の黒褐色土混入 | 12. 黑色土(旧表土) | |

第73図 第5号墳現況図

第5号墳（第73～78図、図版16～20）

調査区南端の台地内奥平坦部に第4号墳と近接し、南北に並列して存在している。T-17・18・22・23グリッドを中心に位置している。

第5号墳は、東京大学考古学研究室が、昭和26年に調査を実施した『月ノ輪第1号墳』（東京大学考古学研究室1964）に相当する古墳である。

周辺の地形は、住居跡群の存在する地点から徐々に高まり、緩傾斜面を形成し、第4号墳の北東側で調査区内の最高地点となり、東側では多数の小支谷が入り急激に下る複雑な地形を描いている。第5号墳は、西側から延びる狭いテラス状の平坦面に存在している。

調査前の墳丘は直径22m、高さ3mで、付近の古墳中では大形のものであった。墳丘には門・檻などの雜木が生い繁り、昭和26年調査時のトレントと思われる落ち込みが、東側墳籠や石室上から墳丘北側にかけて認められた。

墳丘のセンターは標高56.6～58.4mが石室上を除き円形に廻り、北側墳籠では周溝を明示するよう等高線が乱れている。

石室は天井部、左右両側壁及び奥壁とも上面が失なわれ、左側壁4段、右側壁3段、奥壁2段が残る。棺床面は礫の分布状態から、僅かに攪乱された程度で、良好に残存していた。石室主軸方向はN-29°-Eである。各根石での石室規模は全長5.54m、玄室長3.96m、玄室奥壁幅1.62m、同中央最大幅1.64m、玄門部幅1.5m、羨道長1.58m、羨道幅1.3m、羨道入口幅1.24mの規模をもつ。前庭部には特別の施設は存在していない。

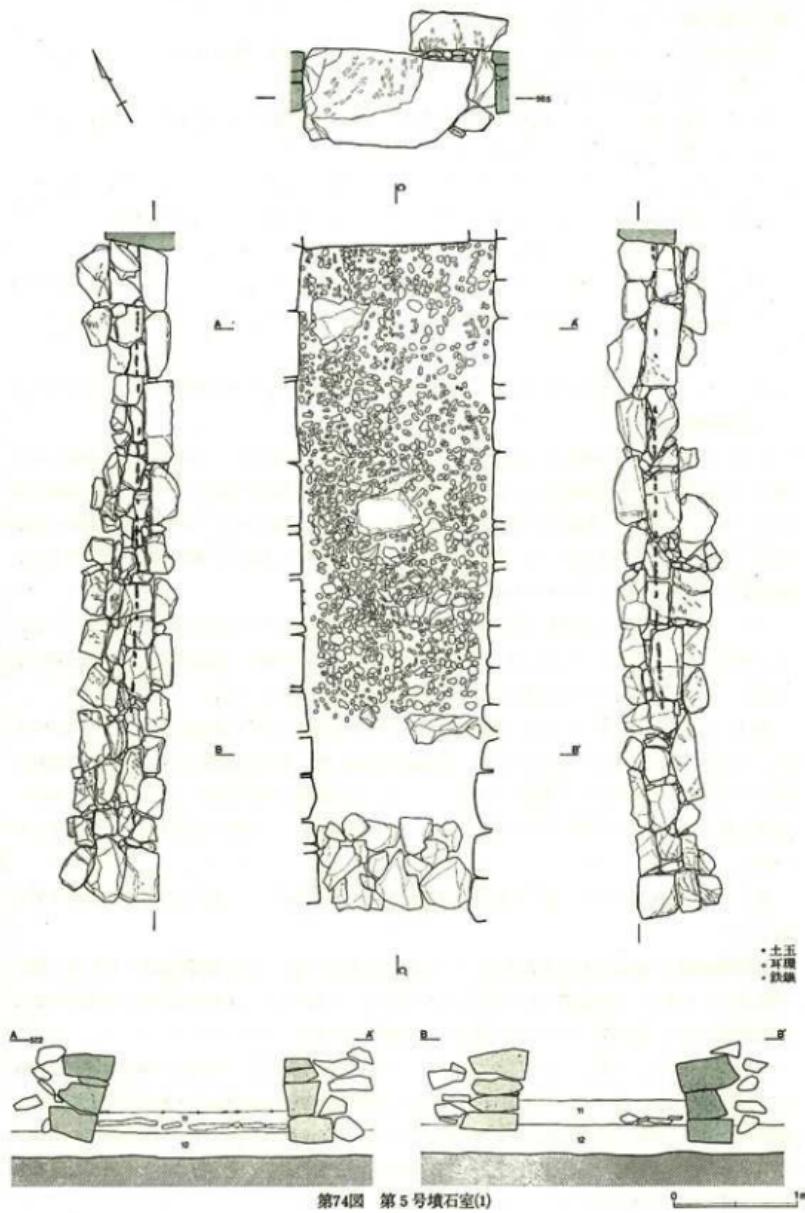
玄室は玄門側が僅かに押む長方形である。石室はすべて凝灰岩の切石を石材として利用している。奥壁は2段しか残っていないが、根石に特に大形の切石を使用し、床面下にその2分の1まで埋め込まれている。右側壁との接点には2段の切石が面を揃えて積まれている。

側壁も上面が失なわれているが、側壁基底部に相当する根石には、大形の切石が丁寧に並べられ、その上に切石が積み上げられている。切石間の隙間には、切石を安定させるため細かな切石が埋め込まれ、2段目中位まで床面下に埋まっていた。また側壁はやや内傾している。玄門入口は、側壁を僅かにせり出して積み上げ玄門としている。玄門部下には、山形の切石が置かれ框石としている。

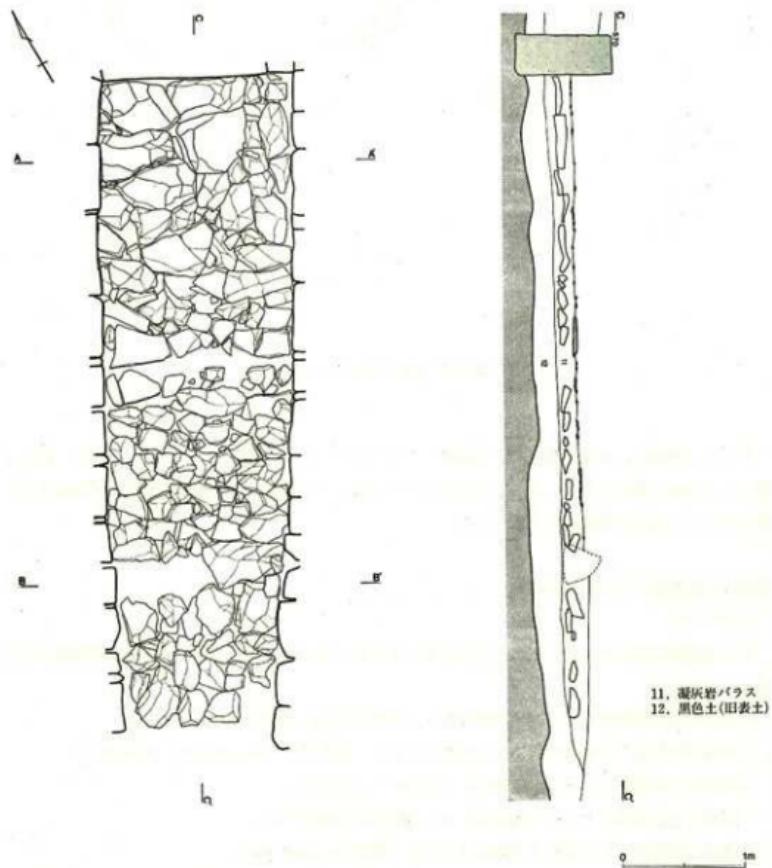
棺床面は、凝灰岩パラスに薄めの切石を敷き並べ、その上面に切石が覆われる程度に小礫が敷かれていた。

羨道部も側壁と同様な積み方が施されているが、羨道部に特に大きな切石を使用している。羨道床面は、棺床面より5cm程高い水平床で、何も敷かれていないかった。羨門部下には、不定形な切石が封鎖石として、特に据えつけられた様子もなく雜然と積まれていた。

石室構築状況は、まず旧表土を溝状に掘り込み石室の根石を固定し、棺床面に凝灰岩パラスを敷き詰め敷きしめる。次に特に外側の区画は無いが、不定形の切石及び黄褐色・灰白色粘土で根石の後込めをする。順次石組み・後込めを行ったものと思われる。墳丘の盛土は、石室天井部の土層が不明のため判然としないが、石室完成後に行われたものと思われる。全体的にかなり粗雑な積み方で、一時に大量の盛土を行っている。



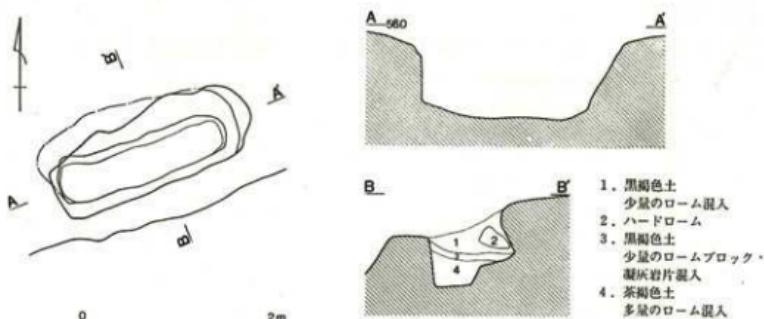
第74図 第5号墳石室(1)



第75図 第5号墳石室(2)

周溝は外径27m、内径18.7mを測る。外周は凹凸が目立ち整った形ではないが、内周はほぼ整円形に廻る。石室前庭部前面では3mの幅で切れている。周溝の幅は2.3~4.8m、深さ0.6~1.2mと差があり、北側から西側にかけて幅広く深い周溝となっている。周溝底面の掘り方は粗く、特に東半部の周溝底に凹凸が激しく認められる。

北側の周溝外側の壁に接して、第5号墳に伴う埋葬施設の可能性が強い土壤が検出されている。主軸方向をN-69°-Eとする長辺2.2m・短辺0.72m・深さ0.8m、北壁の一部が崩落しオーバーハングとなっているが、長方形の整った土壤である。遺物の出土は無いが、覆土中に褐灰岩片の混入が認められた。



第76図 第5号墳周溝外土壤

石室内の遺物は、前回の調査で大半が取り上げられているが、鐵鏃 7本、弓金具 2個、耳環 2個、大玉 4個が検出されている。また後述するが、墳丘の平坦面から原位置の埴輪列が検出され、周溝内からも多数の埴輪が出土している。

石室内出土遺物（第77図、図版49）

鉄鏃(1)～(9)

- (1) 短頭無範被脇抉丸造長三角形式である。残存長9.9cm、鏃身長4.2cmを測る。脇抉先端および基部下端を欠く。
- (2) 短頭闊範被関有両丸造長三角形式である。残存長6.3cm、鏃身長2.7cmを測る。
- (3) 短頭（無範被？）関有両丸造長三角形式である。残存長10.8cm、鏃身長2.7cmを測る。
- (4) 関無両丸造柳葉式である。残存長4.1cmを測り、鋒先を欠く。
- (5) 脇抉片丸造柳葉式である。残存長4.4cm、鏃身部3.6cmを測る。
- (6) 長頭（棘範被？）関無片丸造柳葉式である。残存長5.3cmを測る。
- (7) 短頭闊範被重抉平造長三角形式である。残存長7.2cm、鏃身長3.3cmを測る。茎部に紐の痕跡が3ヶ所認められる。
- (8)・(9)いずれも長頭鏃の頭部である。(8)は残存長7.4cm、(9)は5.1cmを測る。

弓金具 (10・11)

断面が不整円形を呈する棒状鉄製品である。(10)は長さ2.7cm、径0.5cm(11)は長さ3.3cm、径0.5cmを測る。

いずれも棒の両端近くで括れ、先端部分は球状をなす。括れ部には五弁の花弁を作り出し、両端の球と合わせ花形上に仕上げている。

耳環 (12・13) いずれも長径2.4cm、短径2.3cmを測る環状で、間隔は0.3～0.4cmである。断面は径0.4cmを測る円形でかなり細い。銅製。

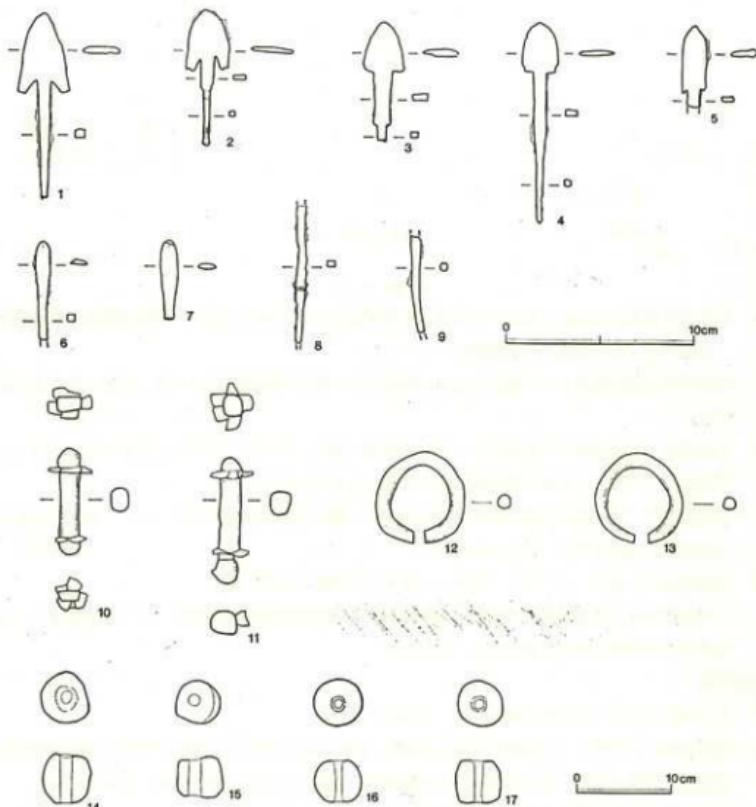
土玉 (14~17)

④径 1.3cm、幅 1.2cm、孔径 0.3cm を測る。磨滅が少み $\frac{1}{4}$ を欠損している。胎土に砂粒、赤色粒子、白色微粒子を含む。淡黄褐色を呈し焼成は甘い。

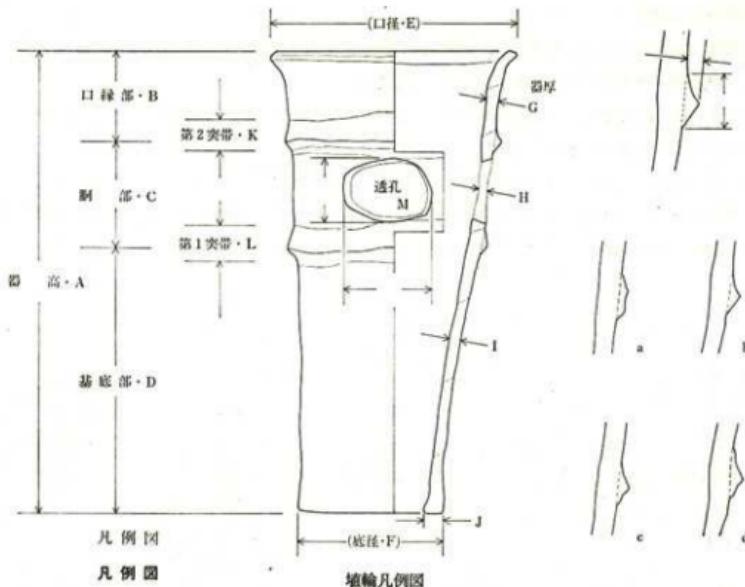
⑤径 1.2cm、幅 1.0cm、孔径 0.3cm を測る。周囲の剥落が激しい。胎土に砂粒、赤色粒子を含む。淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。

⑥径 1.3cm、幅 1.1cm、孔径 0.2cm を測る。完形品で暗褐色を呈する。砂粒少なく焼成は良好。

⑦径 1.2cm、幅 1.1cm、孔径 0.2cm を測る。周囲の剥落がすすむ。胎土に砂粒、赤色粒子、白色微粒子を含む。淡茶褐色を呈し、焼成は不良。



第77図 第5号墳石室出土遺物



埴輪凡例図

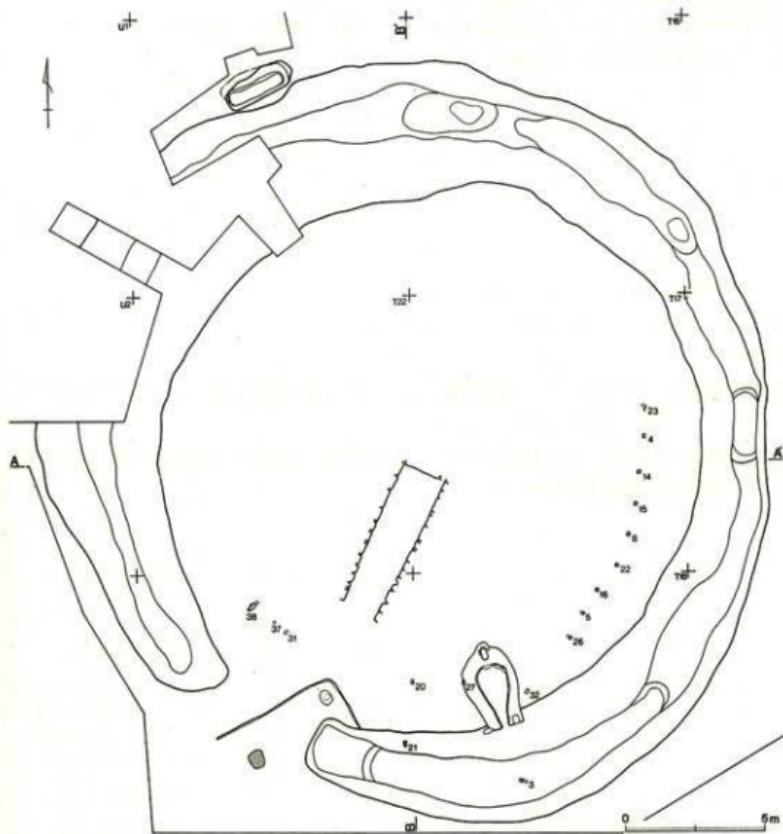
埴輪凡例

- 屋田遺跡出土の埴輪は、普通円筒埴輪と形象埴輪に区分される。更に、形象埴輪は、人物埴輪・動物埴輪・家形埴輪・器財埴輪に区分される。
- 円筒埴輪と形象埴輪とは、図示方法及び観察項目の記述方法が異なるため、別個に扱うこととする。
- 円筒埴輪・形象埴輪とも原則として手書き実測に務め、できるだけ復元、実測図示した。但し、円筒埴輪の一部に、必要性から拓図を併用したものがある。
- 胎土観察は、含有される混入物の度合いの多少・混入鉱物の種類に着目した。一部に混入鉱物の理化学的分析を実施したものもある。
- 焼成観察は、焼きしまり具合（硬軟）の程度を比較的に判断した。
- 色調観察には、『新版標準土色帳』（農林省農林水産技術会議事務局監修 1970）を使用し、器表面外の平均的部位の色調を照らし合わせた。

円筒埴輪

- 円筒埴輪各部位の名称及び観察点は、凡例図に示した。
- 観察基準は、①外形寸法（器高・器径・器厚、単位はcm）、②胎土・焼成・色調、③突帯の特徴、④透孔の位置と特徴、⑤外面調整、⑥内面調整、⑦成形その他の製作技法上の諸点である。
- 器高は遺存する各段高（A～D）を記す。
- 器径は遺存する口径（E）・底径（F）を記す。

- 5 器高は、計測点（G～J）を各段の中位とし、各段の器厚を示す。
 - 6 突帯は、形状のタイプ・寸法（突帯高／突帯幅）・横ナデ調整の方向を示す。
 - a 断面M字形を呈する低突帯
 - b 断面三角形を呈する低突帯
 - c 断面三角形を呈し、横ナデが雑で端部片側に段が認められるもの
 - d 断面三角形を呈し、横ナデが雑で端部両側に段が認められるもの
 - 7 透孔は、位置・寸法（縦径×横径）・穿孔方法・穿孔の方向を示す。
 - 8 外面調整はハケメの方向及び単位（本数／幅）を示す。木口状工具の幅が不明なものは2cm幅でのハケメ本数を示す。
 - 9 内面調整は、調整方法及びその方向を示す。ハケメは同上の方法で示す。
 - 10 備考には、成形・その他の製作技法の特記事項を記入した。
- 形象埴輪
- 1 形象埴輪は、人物埴輪（男）・動物埴輪（馬）・家形埴輪・器財埴輪（大刀・韁・矛）に区分された。記載もこの順序に従うこととする。
 - 2 形象埴輪の部位名称は、日本陶磁全集3『土偶・埴輪』、日本原始美術大系『土偶・埴輪』及び『塚廻り古墳群』を参考にした。

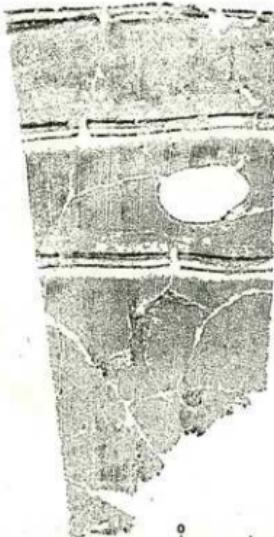
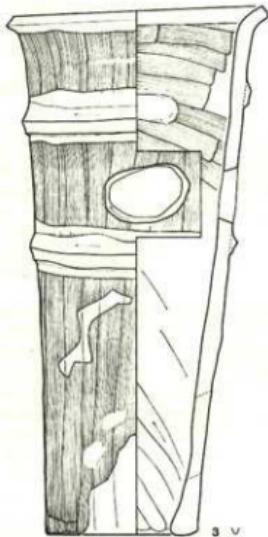
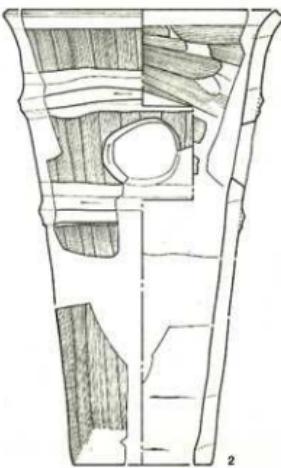
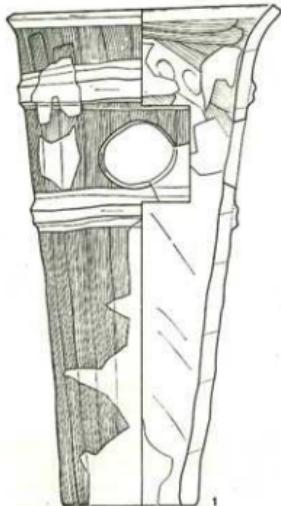


第78図 第5号墳埴輪出土状況図

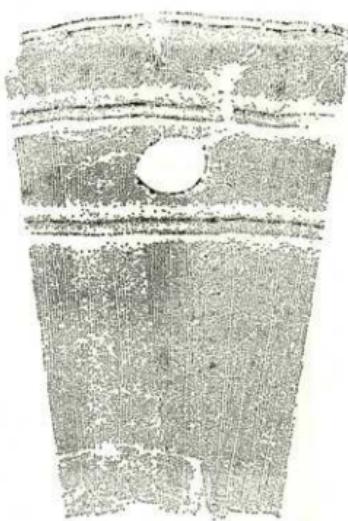
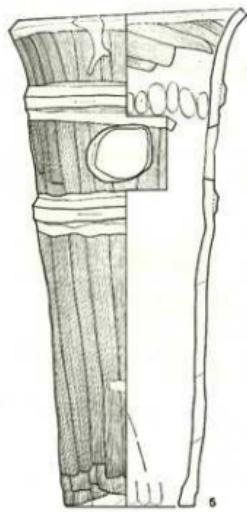
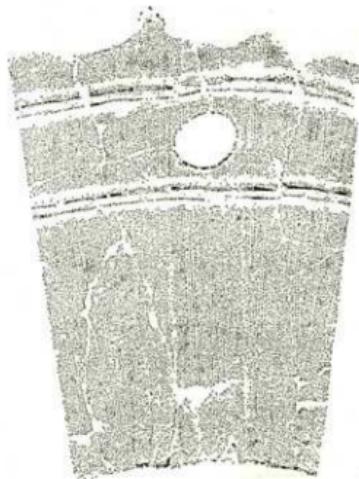
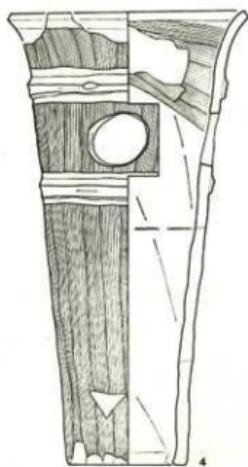
第5号墳々丘上には、葺石は存在していなかったが、墳丘裾部に幅約1mの平坦面が検出され、その平坦面には埴輪列が存在していた。全部で15ヶ所の地点が確認できたが、No.32は原位置よりや下方へ移動した形跡が認められるが、その他の14地点の埴輪は、出土状態からほぼ原位置を保つものと認められる。No.38が人物埴輪である以外、他はすべて普通円筒埴輪であった。円筒埴輪は平坦面のほぼ中央部に透孔を外側にむけ立てられ、%程度が上部を欠損し、外側に倒れ気味であったが、No.14のように直立状態を保っているものも認められた。直立状態のものは、基底部中位まで約10cm程度確認面下に埋め込まれていた。埴輪間の距離は、1~1.2mとはば一定しており、全体本数は40~50本と推定される。

第5号墳出土埴輪（第79～87図、図版45～47）

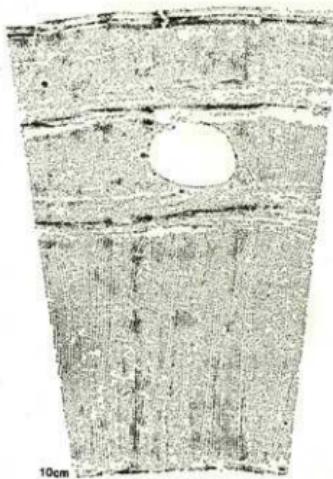
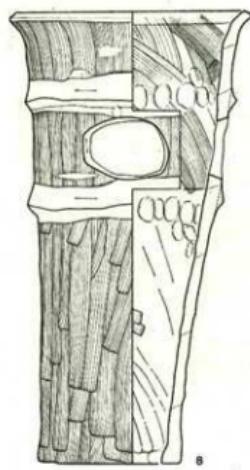
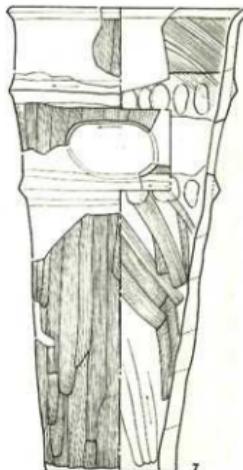
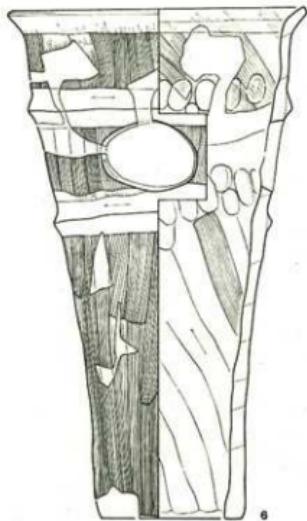
図版番号	器高	器径	器厚	胎土	焼成色調	突帯	透孔	外面調整	内面調整	備考
79図1	A36.0 B 6.4 C 8.4 D21.0	E20.1 F 9.6 I 1.0 J 1.0	G 1.0 H 0.8 I 1.0 J 1.0	少量 石英 パミス 長石	良好堅致 明赤褐色 aタイプ 右回り刀子穿 孔後指ナデ 右回り布模ナ デ	K 0.4/2.2 0.5/2.3	洞部に円孔 底部への縫 左から右 8本/1.1cm 10本/1.5cm	口縁部から基 部底面右傾斜 ナデ 口縁部 左から右 8本/1.1cm 10本/1.5cm	洞部中位から 基底部右傾斜 ナデ 口縁部 左から右 8本/1.1cm 10本/1.5cm	突帯内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 幅4cm 残存率60%
79図2	A — B 7.1 C 8.3 D —	E20.5 — H 1.2 I 1.2 J 1.3	G 1.0 多量 石英 パミス 長石	普通	明赤褐色	K 0.3/2.1 0.4/2.1	洞部に円孔 底部への縫 左から右 右回り布模ナ デ	口縁部から基 部底面右傾斜 ナデ 口縁部 左から右 右回り布模ナ デ	洞部中位から 基底部ナデ 口縁部右傾斜 ナデ後右傾斜 13本/2cm	基部粘土板の 幅1cm 基底部圧痕 復元実測 残存率40%
79図3	A38.3 B 6.6 C10.9 D20.8	E19.1 F11.0 I 1.2 J 2.0	G 1.0 やや多量 石英 パミス 長石	普通	明赤褐色	K 0.4/2.1 0.5/2.1	洞部に円孔 底部への縫 左から右 右回り布模ナ デ	口縁部から基 部底面右傾斜 ナデ 洞部中位 から口縁部右 傾斜ナデ	洞部中位から 基底部右傾斜 ナデ 洞部中位 から口縁部右 傾斜ナデ	基部粘土板の 幅6.5cm 基底部に太い 鈑圧痕 口縁部内面の 一部、基底部 から口縁部へ一 部、横ハケ の縫ハケもあ る後指ナデ口縁 部横ハケ後横 ナデ
80図4	A32.7 B 5.7 C 7.0 D20.0	E17.4 F 8.5 I 0.9 J 1.0	G 0.7 多量 石英 パミス 長石	やや不良	黄灰色 一部橙色	K 0.4/1.8 0.3/1.7	洞部に円孔 右回り刀子穿 孔後指ナデ 右回り布模ナ デ	口縁部から基 部底面右傾斜 ナデ 洞部中 位から口縁部 右傾斜ハケ 14本/2cm	洞部中位から 基底部右傾斜 ナデ 洞部中 位から口縁部 右傾斜ハケ 9本/1.2cm 12本/1.6cm	基底部に不明 瞭であるが鈑 圧痕 半周に板おさ え、内面には対応する指 頭圧痕無し 4cm 残存率60%
80図5	A35.8 B 6.2 C 7.8 D21.8	E17.4 F 9.3 I 0.8 J 1.1	G 0.8 多量 石英 パミス 長石	良好堅致 一部橙色	黄灰色 一部橙色	K 0.4/2.6 0.3/1.9	洞部に円孔 右回り刀子穿 孔後指ナデ 右回り布模ナ デ	口縁部から基 部底面右傾斜 ナデ 洞部中 位から口縁部 右傾斜ハケ 14本/2cm 一部基底部ま で施されてい ない	洞部・基底部 平滑すぎて不 明瞭であるが 基部粘土板の 幅4.5cmを左 回りに接合 口縁部横ハケ 11本/1.6cm	突帯内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 幅3.5 ~5.2cm 鈑質 残存率50%
81図6	A35.3 B 7.4 C 7.3 D19.6	E21.9 F10.2 I 0.8 J 1.3	G 0.7 多量 石英 酸化鉄粒 パミス	やや不良	明赤褐色 bタイプ	K 0.5/2.3 0.3/1.5	洞部に円孔 右回り刀子穿 孔後指ナデ	基底部中位ま での縫ハケ ナデ後右傾斜 ナデ	基底部右傾斜 ナデ 口縁部方 み	突帯内面指頭 圧痕 基部粘土板の 幅5cm



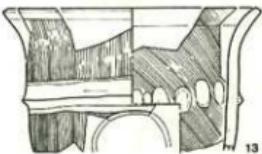
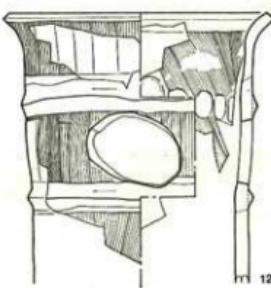
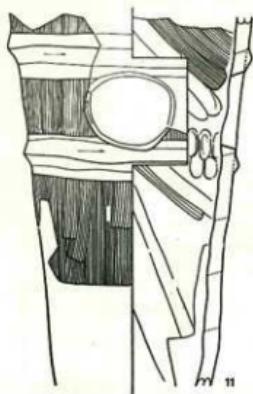
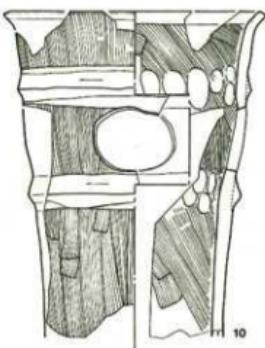
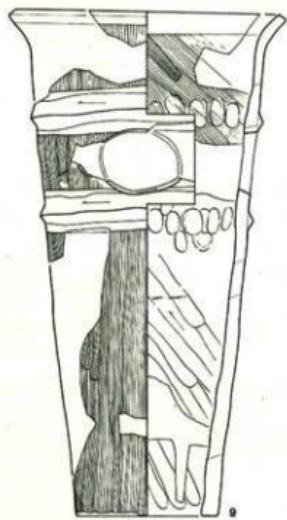
第79圖 第5號墳出土圓筒埴輪(1)



第80圖 第5號墳出土圓筒埴輪(2)



第81図 第5号墳出土円筒埴輪(3)

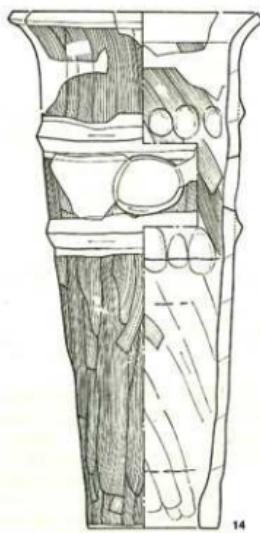


0 10cm

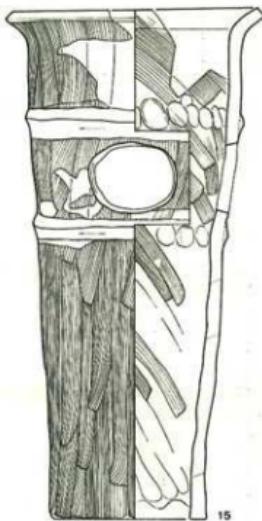
第82図 第5号墳出土円筒埴輪(4)

図版番号	標高	断面	器厚	胎土	焼成	色調	突帯	透孔	外面調整	内面調整	備考
							右回り布横ナ	下端突帯にか かる	向。左から右 7本／1cm 12本／1.7cm 基底部までの 縫合はケ、口 縫部から基底 部へ 16本／2cm	12本／1.8cm 胸部ナデ平滑 で方向不明瞭 10本／2cm	粘土縫幅2～ 5cm 残存率70%
81図7	A — E — G 0.7少量 B 6.1F 9.4H 0.6バミス C — I 1.0石英 D20.5 J 1.2	良好堅硬	褐灰色 一部に い黄褐色	K L	bタイプ bタイプ	胸部に円孔 左回り刀子穿 孔2.6孔後指ナ デ	胸部に円孔 左回り刀子穿 孔2.6孔後指ナ デ	口縫部から基 底への縫ハ ケ。左から右 5本／1cm 9本／1.3cm	基底部右傾斜 ナデ後右傾斜 ハケ 5本／0.8cm 8本／1.1cm 口縫部右傾斜 ハケ後横ナデ 8本／1.3cm	突帯内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 縫幅3cm 粘土縫幅2.8 ～4.2cm 須恵質 残存率60%	
81図8	A32.8E17.7G 0.9多量 B 6.3F10.4H 0.7バミス C 7.5 I 0.8石英 D19.0 J 1.4	やや不良	灰黄褐色 一部に い黄褐色	K L	bタイプ bタイプ	胸部に円孔 左回り刀子穿 孔2.7孔後指ナ デ	胸部に円孔 左回り刀子穿 孔2.7孔後指ナ デ	口縫部から基 底への縫ハ ケ。左傾斜ハ右傾斜ハ ケ。左から右 6本／0.9cm	基底部右傾斜 ナデ後右傾斜 ハケ5 本／0.9cm 6本／2cm 右傾斜ハケ14 本／2cm 口縫部右傾斜ハ ケ後横ナデ	突帯内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 縫幅4cm 粘土縫幅3.4～5.5cm 須恵質 縫部右傾斜ハ ケ後横ナデ 残存率100%	
81図9	A36.2E — G 0.6多量 B 7.8F10.2H 0.9バミス C 7.1 I 1.0石英 D21.3 J 1.2長石	やや不良	にじむ黄 橙色一部 灰黄褐色	K L	bタイプ bタイプ	胸部に円孔 左回り刀子穿 孔1.7孔後指ナ デ	胸部に円孔 左回り刀子穿 孔2.6孔後指ナ デ	口縫部から基 底への縫ハ ケ。左から右 14本／2cm	基底部右傾斜 ナデ後横ナデ ハケ後横ナデ 13本／2cm 8本／1cm	突帯内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 縫幅4.2cm 粘土縫幅2.6～3cm 須恵質 残存率50%	
82図10	A — E19.0G 0.8多量 B 5.5F — H 0.8バミス C 7.6 I 0.8軟化鉄粒 D — J —	普通	明赤褐色	K L	bタイプ bタイプ	胸部に円孔 右回り刀子穿 孔2.6孔後指ナ デ	胸部に円孔 右回り刀子穿 孔2.6孔後指ナ デ	口縫部から基 底への縫ハ ケ。左から右 14本／2cm	基底部右傾斜 ナデ後横ナデ 13本／2cm 14本／2cm 後横ナデ 7本／1.2cm	突帯内面指頭 圧痕 復元実測 残存率35%	
82図11	A — E — G — 多量 B — F — H 1.0石英 C 7.9 J 1.1長石 D — J — バミス	やや不良	明赤褐色	K L	bタイプ bタイプ	胸部に円孔 右回り刀子穿 孔1.7孔後指ナ デ	胸部に円孔 右回り刀子穿 孔2.0孔後指ナ デ	口縫部から基 底への縫ハ ケ。左から右 14本／2cm	基底部右傾斜 ナデ後横ナデ 12本／1.6cm	突帯内面指頭 圧痕 粘土縫幅3 ～4cm 残存率30%	

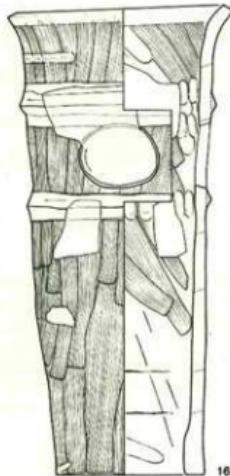
図版番号	器高	器径	器厚	胎土	焼成	色調	突帯	透孔	外面調整	内面調整	備考
81図12	A — E 19.6 G 0.6 B 6.2 F — H 0.8 C 7.2 I — 石英 D — J —	多量 バミス	普通	明赤褐色	K b タイプ 0.3/1.8 L b タイプ 0.3/1.6 右回り布模ナ デ	胴部に円孔 5.6×6.8 右回り刀子穿 ケ 左から右 突帯にかかる	底部から口縁 方向 6本/1 cm 底部への縦ハ ケ 左から右 右回り布模ナ上・下端とも 突帯にかかる	口縁部から基 底部右傾斜 ハケ 12本/2 cm 11本/2 cm	基底部右傾斜 ハケ 12本/2 cm	突帯内面指頭 底真縫著 残存率30%	
82図13	A — E 18.8 G 0.8 B 6.7 F — H — 石英 C — I — バミス D — J —	少量 石英 バミス	良好堅致 軟	に赤い模 色	K b タイプ 0.3/0.9 L — 右回り布模ナ デ	胴部に円孔 — 右回り刀子穿 ケ 左から右 突帯にかかる	胴部から口縁 部への縦ハ ケ 左から右 右回り布模ナ上・下端とも 突帯にかかる	口縁部から胴 部右傾斜ハケ 12本/2 cm 14本/2 cm	口縁部から胴 部右傾斜ハケ 12本/2 cm	残存率20% 底真縫著 後横ナデ	
82図14	A 37.3 E 18.5 G 0.7 B 7.4 F 9.4 H 0.9 C 8.2 I 0.8 石英 D 21.7 J 1.3 長石	多量 バミス 石英 長石	良好堅致 軟	褐色	K C タイプ 0.4/2.0 L C タイプ 0.5/2.5 右回り布模ナ デ	胴部に円孔 5.1×4.3 右回り刀子穿 ケ 左から右 突帯にかかる	口縁部から基 底部右傾斜 部への縦ハ ケ 右傾斜ハケ 6本/1.1cm 14本/2 cm 基底部中位か ら口縁部への 突帯ハケ 右から左 12本/1.7cm	基底部右傾斜 ハケ 右傾斜ハケ 6本/1.1cm 14本/2 cm 基底部中位か ら口縁部への 突帯ハケ 右傾斜ハケ 8本/1.4cm 12本/1.7cm	基底部右傾斜 ハケ 右傾斜ハケ 6本/1.1cm 14本/2 cm 基底部中位か ら口縁部への 突帯ハケ 右傾斜ハケ 8本/1.4cm 12本/1.7cm	変帯内面目 伴5指頭底真 基部粘土板の 幅4.3cm 粘土紐の幅3 ~3.5cm 残存率80%	
82図15	A 36.9 E 18.7 G 0.9 B 8.4 F 11.0 H 0.9 C 8.0 I 1.0 バミス D 20.5 J 1.2	少量 石英 バミス 長石	良好堅致 軟	褐色	K C タイプ 0.3/2.0 L C タイプ 0.3/1.9 右回り布模ナ デ	胴部に円孔 5.2×6.4 右回り刀子穿 ケ 左から右 突帯にかかる	口縁部から基 底部右傾斜 部への縦ハ ケ 右傾斜ハケ 5本/1 cm 13本/2 cm 基底部中位か ら口縁部への 突帯ハケ 右から左 4本/0.8cm 11本/1.7cm	基底部右傾斜 ハケ 右傾斜ハケ 5本/1 cm 8本/1.2cm 8本/1.2cm 8本/1.2cm 4本/0.8cm 11本/1.7cm	基底部右傾斜 ハケ 右傾斜ハケ 5本/1 cm 8本/1.2cm 口縁部右傾斜 ハケ 4本/0.8cm ハケ後横ナデ	突帯内面指頭 底真縫著 基部粘土板の 幅3cm 粘土紐の幅4 cm 残存率80%	
83図16	A 34.4 E 16.3 G 0.9 B 7.7 F 10.6 H 0.9 C 6.7 I 1.0 バミス D 20.0 J 1.2	少量 石英 バミス 長石	良好堅致 軟	明褐色	K C タイプ 0.4/1.5 L C タイプ 0.6/1.6 右回り布模ナ デ	胴部に円孔 4.5×5.8 右回り刀子穿 ケ 右から左 突帯にかかる	基底部から口 縁部への縦ハ ケ 右から左 8本/1.1cm 9本/1.3cm	基底部右傾斜 ハケ 右傾斜ハケ 7本/1 cm 10本/1.4cm 11本/2 cm 口縁部右傾斜 ハケ後横ナデ	基底部右傾斜 ハケ 右傾斜ハケ 7本/1 cm 10本/1.4cm 11本/2 cm 口縁部右傾斜 ハケ後横ナデ	変帯内面目 伴5指頭底真 基部粘土板の 幅4.5cm 粘土紐の幅3~ 6cm 残存率60%	
83図17	A 34.4 E 18.9 G 0.7 B 7.5 F 9.6 H 1.1 C 7.4 I 0.9 バミス	少量 石英 バミス	良好堅致 軟	明褐色	K C タイプ 0.4/1.6 L C タイプ 0.6/1.6 右回り刀子穿 ケ	胴部に円孔 4.5×6.8 右回り刀子穿 ケ	基底部から口 縁部への縦ハ ケ	基底部右傾斜 ハケ ハケ	基底部右傾斜 ハケ	変帯内面目 伴5指頭底真 基部粘土板の	



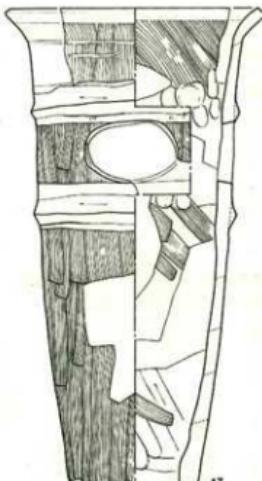
14



15



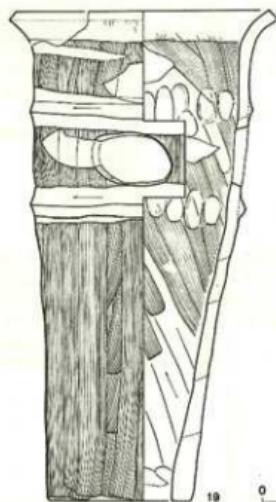
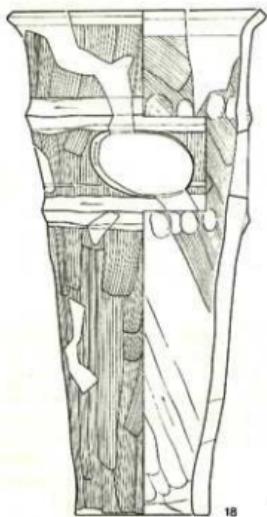
16



17

0 10cm

第83圖 第5号墳出土円筒埴輪(5)



第84圖 第5号墳出土円筒埴輪(6)

図版 番号	器高	器径	器厚	胎土	焼成	色調	突 番	透 孔	外面調整	内面調整	備考	
	D 19.5	J 1.2	融化鉄粒				0.5/2.0 右回り布横ナ デ	孔後指ナデ 右から左 8本/1cm	7本/1.2cm 洞部から口縁 部右傾斜ヘケ 7本/0.9cm 11本/1.6cm 口縁部右傾斜 ハケ後横ナデ	幅4.5cm 粘土紐 幅3.5 cm 復元実測 残存率50%		
83図18	A 35.6 B 7.6 C 7.2 D 20.8	E 18.4 F 9.5 G 1.1 H 1.0 I 1.0 J 1.0	多量 石英 ミス 融化鉄粒	普通	明赤褐色 L Cタイプ 右回り刀子穿 ケ 0.4/2.0 孔後指ナデ 右回り布横ナ デ	K Cタイプ 洞部に円孔 0.3/0.6 4.5×7.3 L Cタイプ 右回り刀子穿 ケ 0.4/2.0 孔後指ナデ 右回り布横ナ デ	洞部に円孔 0.3/0.6 4.5×7.3 右から左 8本/1cm 7本/1.4cm 12本/2.3cm	基底部から口縁 部への縦ハナデ 洞部から口縁 部右傾斜ヘケ 右から左 8本/1.1cm 7本/1.2cm 12本/2.3cm	基底部右傾斜 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 幅5cm 部右傾斜ヘケ 幅5cm 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 幅5cm	突帶内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 幅5cm 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 幅5cm 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 幅5cm		
84図19	A 34.6 B 7.1 C 6.9 D 20.6	E 19.0 F 9.9 G 0.8 H 0.8 I 0.9 J 1.3	少量 石英 ミス 融化鉄粒	良好極堅 級	褐色一部 黄灰色	K Cタイプ 洞部に円孔 0.5/1.8 3.8×5.6 L Cタイプ 左回り刀子穿 ケ 0.5/2.2 孔後指ナデ 右回り布横ナ デ 帯にかかる	K Cタイプ 洞部に円孔 0.5/1.8 3.8×5.6 L Cタイプ 左回り刀子穿 ケ 0.5/2.2 孔後指ナデ 右回り布横ナ デ 帯にかかる	基底部から口縁 部への縦ハナデ 右から左 8本/1.1cm 12本/1.8cm	基底部右傾斜 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 右から左 8本/1.1cm 10本/1.4cm	突帶内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 右から左 8本/1.1cm 10本/1.4cm	突帶内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 右から左 8本/1.1cm 10本/1.4cm	
84図20	A 34.1 B 10.1 C 7.0 D 17.0	E 20.4 F 10.4 G 1.0 H 1.0 I 1.0 J 1.4	多量 石英 ミス 長石	良好堅 硬	褐色	K Cタイプ 洞部に円孔 0.4/2.3 4.7×6.3 L Cタイプ 左回り刀子穿 ケ 0.3/1.6 孔後指ナデ 右回り布横ナ デ	K Cタイプ 洞部に円孔 0.4/2.3 4.7×6.3 L Cタイプ 左回り刀子穿 ケ 0.3/1.6 孔後指ナデ 右回り布横ナ デ	基底部から口縁 部への縦ハナデ 右から左 14本/2cm	基底部右傾斜 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 右から左 7本/0.9cm 10本/1.4cm	突帶内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 右から左 7本/0.9cm 10本/1.4cm	突帶内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ 右から左 7本/0.9cm 10本/1.4cm	
85図21	A 33.1 B 7.1 C 7.0 D 19.0	E 19.1 F 10.5 G 0.7 H 0.6 I 0.8 J 1.3	多量 石英 ミス 長石	良好極堅 級	褐色 部黄褐色	K Cタイプ 洞部に円孔 0.5/2.0 5.1×6.5 L Cタイプ 右回り刀子穿 ケ 0.4/1.3 孔後指ナデ 右回り布横ナ デ	K Cタイプ 洞部に円孔 0.5/2.0 5.1×6.5 L Cタイプ 右回り刀子穿 ケ 0.4/1.3 孔後指ナデ 右回り布横ナ デ	基底部から口縁 部への縦ハナデ 右から左 5本/0.5cm 5本/0.7cm	基部指横ナデ 基部右傾斜 右から左 4本/0.6cm 6本/0.8cm 7本/0.7cm	突帶内面布目 伴う指頭圧痕 須恵一部焼 けひずむ 底部擦痕 残存率100%	突帶内面布目 伴う指頭圧痕 須恵一部焼 けひずむ 底部擦痕 残存率100%	
85図22	A 33.6 B 6.6 C 6.2	E 16.8 F 8.8 G 0.8 H 0.9 I 0.8 J 1.3	少量 石英 ミス 長石	良好堅 硬	黃褐色 部褐灰色	K Cタイプ 洞部に円孔 0.5/2.1 3.8×5.6 L Cタイプ 右回り刀子穿 ケ	口縁部から基 底部への縦ハナデ	基底部右傾斜 基部粘土板の 部右傾斜ヘケ	突帶内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の	突帶内面布目 伴う指頭圧痕 基部粘土板の		

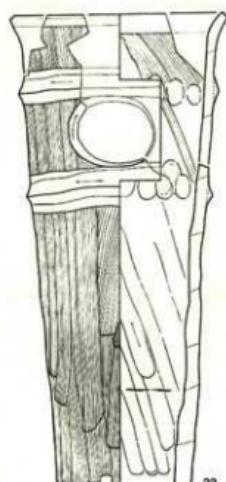
試験番号	標高	器種	層厚	胎土	焼成	色調	突 帯	透 孔	外面調整	内面調整	備考
85回23	D20.8	J	1.1	酸化鉄粒			0.5/2.1 右回り布模ナ デ	孔後指ナデ 上下端とも突 きにかかる	左から右 13本/2cm	デ後右傾斜ヘ ケ 8本/0.8cm 口縁部右傾斜 ハケ後横カゲ 9本/1cm 基部指横カゲ	幅4.5cm 粘土粗幅 2.5 ~3cm 一部須恵質 復元実測 残存率70%
B 5.1 F 9.3 H 1.0	多量										
C 7.9	I	0.8石英									
D20.8	J	1.1長石									
85回24	A — E — G 0.8	褐色	—	褐色	多量	K	Cタイプ	洞部に円孔	口縁部から基 部に亘る 0.4/2.2	基底部右傾斜 底部への縦ハ ナデ	突帶内面指頭 圧痕
B 7.0 F 8.4 H 1.0	パミス					L	Cタイプ	右回り刀子穿 孔	0.4/1.7 右回り布模ナ デ	洞部右傾斜ナ デ 左から右 7本/0.9cm	基部粘土板の 幅3cm 須恵質 残存率60%
C —	I 1.0石英										
D19.1	J 1.4										
86回25	A — E 20.2 G 0.7	良好	褐色	褐色	多量	K	Cタイプ	洞部に円孔	口縁部から基 部に亘る 0.4/1.7	基底部右傾斜 底部への縦ハ ナデ	突帶内面指頭 圧痕
B 5.5 F — H 0.7	石英					L	Cタイプ	右回り刀子穿 孔	0.3/1.6 右回り布模ナ デ	洞部右傾斜ナ デ 左から右 8本/1.2cm	基部粘土板の 幅4.4cm 須恵質 残存率50%
C 6.9	I 0.8パミス										
D —	J — 酸化鉄粒										
86回26	A — E — G —	良好	褐色	褐色	多量	K	—	洞部に円孔	口縁部から基 部に亘る 0.4/1.5	基底部右傾斜 縦部への縦ハ ナデ後右傾斜 伴う指頭正圧 痕	突帶内面布目 伴う指頭正圧 痕
B — F 9.5 H 1.1	パミス					L	Cタイプ	右回り刀子穿 孔	4.3×6.2 0.3/2.0 孔後指ナデ	ハケ 8本/1.2cm 右から左 11本/1.5cm	粘土粗幅 2.5 ~3.2cm 須恵質 残存率70%
C —	I 1.1石英										
D19.8	J 1.2										
86回27	A — E — G —	良好	褐色	褐色	少量	K	—	洞部に円孔	口縁部から基 部に亘る 0.5/2.1	基底部右傾斜 底部への縦ハ ナデ後右傾斜 伴う指頭正圧 痕	突帶内面布目 伴う指頭正圧 痕
B — F 10.1 H —	パミス					L	Cタイプ	右回り刀子穿 孔	1.8孔後指ナデ	ハケ 9本/1.1cm 12本/1.6cm 右から左 12本/1.7cm	基部粘土板の 幅5.2cm 粘土粗幅 2.7 cm須恵質 残存率10%
C —	I 0.9石英										
D20.3	J 1.3										



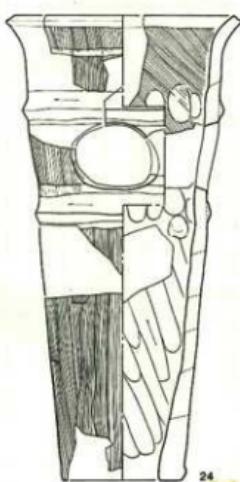
21



22



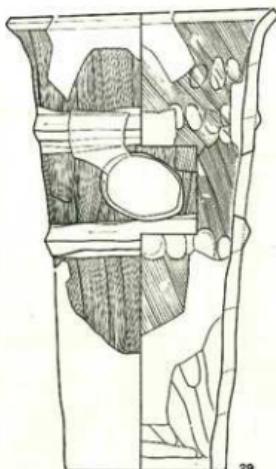
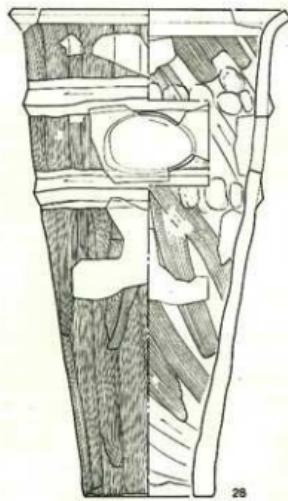
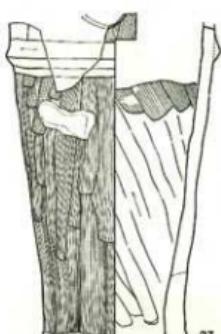
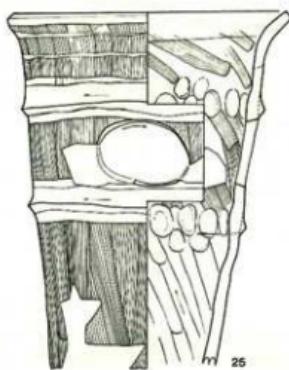
23



24

0 10cm

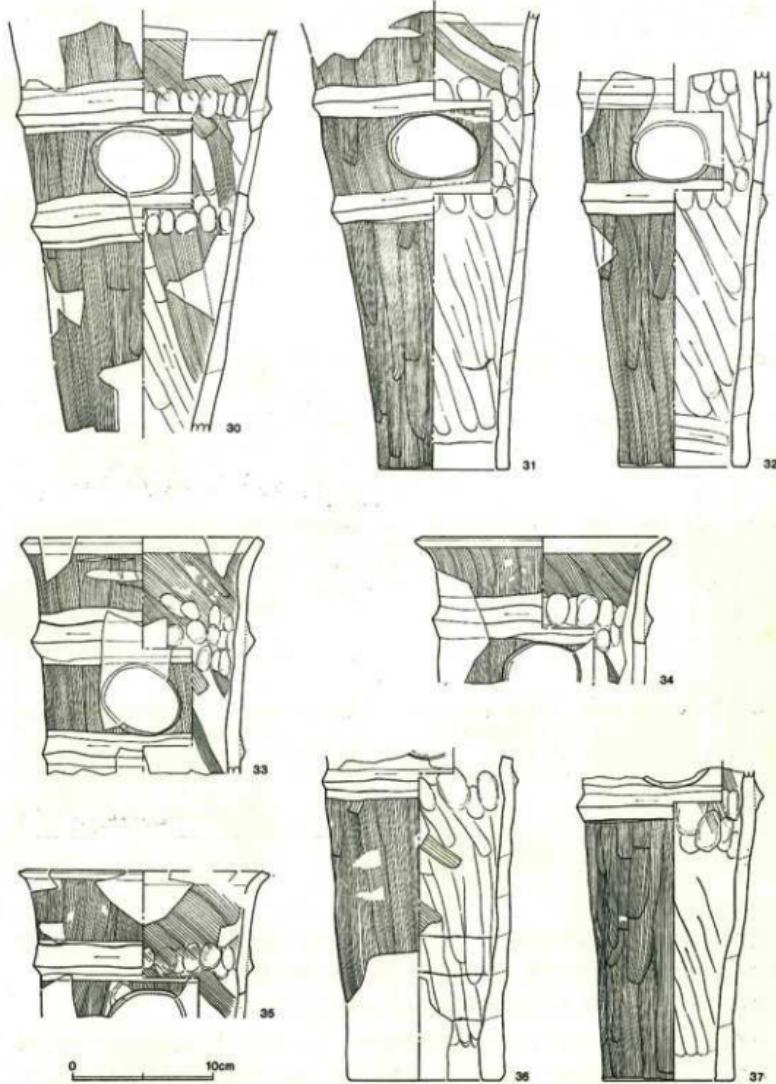
第85図 第5号墳出土円筒埴輪(7)



0 10cm

第86図 第5号墳出土円筒埴輪(s)

図版番号	器高	器径	器厚	胎土	焼成	色調	突帯	透孔	外面調整	内面調整	備考
						テ			10本／1.4cm 7本／1cm		残存率50%
86図28	A34.4 E20.2 G 0.8 多量	B 6.9 F 9.2 H 0.9 石英	C 6.4 I 1.0 バミス	D21.1 J 1.3	良好堅致	黄橙色—K 部褐灰色	dタイプ 0.4/1.7 L dタイプ 0.4/1.8 右回り布模ナ テ	胴部に円孔 底部への縫ハ ナデ後右傾斜 左から右 8本／0.7cm 10本／1.4cm	口縫部から基 底部右傾斜 底部への縫ハ ナデ後右傾斜 左から右 11本／1.7cm 10本／1.4cm 10本／1.4cm	基底部右傾斜 ナデ後右傾斜 ハケ ハケ ハケ ハケ	突帯内面指頭 底 一部須恵質 復元実測 残存率60%
										口縫部右傾斜 ナデ後右傾斜 ハケ後横ナデ	
										11本／1.6cm	
86図29	A32.7 E19.5 G 0.8 少量	B 7.7 F11.3 H 0.8 石英	C 8.0 I 0.9 バミス	D17.0 J 1.0	やや不良	黄橙色—K 部褐灰色	dタイプ 0.4/1.5 L dタイプ 0.4/2.0 右回り布模ナ テ	胴部に円孔 4.2×5.2 右回り刀子穿 ナデ かる	基底部から口 縫部への縫ハ ナデ後右傾斜 右から左 15本／2cm 15本／2cm	基底部右傾斜 ナデ後右傾斜 ハケ ハケ ハケ	突帶、口縫部 内面布目伴う 指頭底 基部粘土板の 幅4cm 粘土板の幅3 15本／2cm ～4.5cm 口縫部右傾斜 須恵質 14本／2cm 残存率60%
87図30	A — E — G 0.8 多量	B — F — H 0.7 石英	C23.3 I 0.9 バミス	D — J —	やや不良	明赤褐色	K dタイプ 0.5/1.8 L dタイプ 0.6/2.2 右回り刀子穿 ナデ	胴部に円孔 4.4×— 右回り刀子穿 ナデ	基底部から口 縫部への縫ハ ナデ後右傾斜 右から左 12本／2cm 13本／2cm	基底部右傾斜 ナデ後右傾斜 ハケ 11本／1.2cm 口縫部右傾斜 ハケ後横ナデ	突帶内面布目 伴う指頭底 粘土板幅4.3 ～5cm 復元実測 残存率40%
87図31	A — E — G 0.7 多量	B — F 9.4 H 0.7 石英	C 8.1 I 0.9 バミス	D19.7 J 0.8	良好堅致	黄橙色	K dタイプ 0.4/2.5 L dタイプ 0.5/2.0 右回り布模ナ テ	胴部に円孔 4.6×6.2 右回り刀子穿 ナデ 7本／1cm 11本／1.5cm	口縫部から基 底部布模ナデ 底部への縫ハ ナデ 左から右 7本／1cm 11本／1.5cm	基底部右傾斜ナ デ ナデ ナデ ナデ 7本／1cm 8本／1.1cm 口縫部右傾斜 ナデ後右傾斜 ハケ後横ナデ 8本／1.1cm	突帶内面布目 伴う指頭底 粘土板幅2.7 ～3.8cm 復元実測 残存率75%
87図32	A — E — G — 多量	B — F 9.2 H 0.8 バミス	C 8.7 I 0.9 石英	D19.0 J 0.8 腐化鉄粒	良好堅致	黄橙色—K 部褐灰色	dタイプ 0.4/1.9 L dタイプ 0.4/1.8 右回り布模ナ テ	胴部に円孔 — 右回り刀子穿 ナデ	基底部から口 縫部への縫ハ ナデ 右から左 15本／2cm	基底部右傾斜ナ デ ナデ ナデ 15本／2cm 15本／2cm	突帶内面布目 伴う指頭底 基部粘土板の 幅3.5cm 粘土板幅3.5 ～4cm 復元実測 残存率60%



第87図 第5号墳出土円筒埴輪(9)

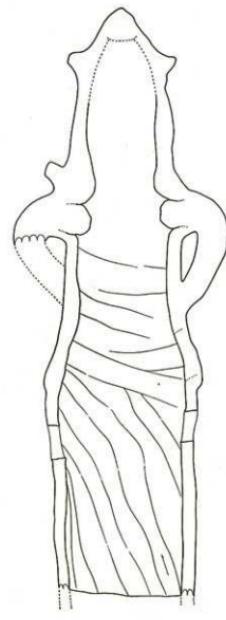
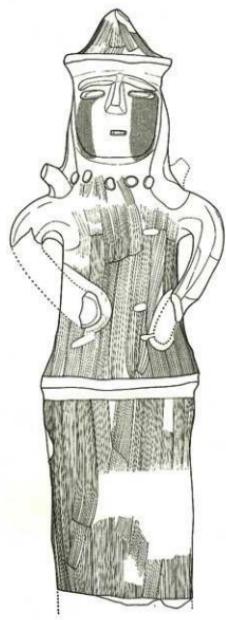
図版 番号	器高	器径	器厚	胎 土	焼 成	色 調	突 带	透 孔	外 面 調 査	内 面 調 査	備 考
87図33	A — E 17.7	G 0.9	少量	良好堅致	明赤褐色	K d タイプ	胸部に円孔 0.7/2.5 —	口縁部から基部右傾斜ナ 底部への縫ハ	突帯内面布目 伴う指頭圧痕	復元実測	
	B 7.4 F — H	0.9	パミス			L d タイプ	右回り刀子穿 0.3/1.8	デ後右傾斜ナ ケ左から右	7本/0.7cm 5本/1cm	残存率40%	
	C 8.0 I —	石英				D — J —	孔後指ナデ	14本/2cm	口縁部右傾斜 ハケ後横ナデ	11本/2cm	
87図34	A — E 18.6	G 0.8	少量	良好堅致	黄橙色	K d タイプ	胸部に円孔 0.6/2.3 —	基底部から口 縫部右傾斜ナ 縫部への縫ハ	突帯内面指頭		
	B 6.2 F — H 0.9	石英				L —	右回り刀子穿 —	デ後一部右傾 斜ハケ	庄底	復元実測	
	C — I —	パミス				D — J —	孔後指ナデ	左から右 右回り布横ナ デ	8本/1.1cm 11本/2cm	残存率20%	
87図35	A — E — G	0.8	少量	やや不良	黄橙色	K d タイプ	胸部に円孔 0.4/2.2 —	基底部から口 縫部右傾斜ナ 縫部への縫ハ	突帯内面指頭		
	B 6.9 F — H 0.9	石英				L —	右回り刀子穿 —	デ後一部右傾 斜ハケ	庄底	復元実測	
	C — I —	パミス				D — J —	孔後指ナデ	左から右 右回り布横ナ デ	10本/1.4cm 12本/2cm	残存率15%	
87図36	A — E — G	— 多量	やや不良	明赤褐色	K —	—	胸部に円孔 —	口縁部から基部右傾斜 縫部への縫ハ	突帯内面指頭		
	B — F 11.0 H —	I 石英				L —	右回り刀子穿 0.3/1.5	ナデ後一部右 傾斜ハケ	庄底	基部粘土板の	
	C — I 0.9	パミス				D 21.6 J 1.3	孔後指ナデ	右から左 14本/2cm	幅4.3cm 粘土紐幅 2.7	~3.2cm	復元実測
87図37	A — E — G	— 多量	やや不良	黄橙色	K —	—	胸部に円孔 —	口縁部より基部右傾斜 縫部への縫ハ	突帯内面指頭		
	B — F 9.4 H —	I 0.9 石英				L d タイプ	右回り刀子穿 0.6/2.3	ナデ後右傾斜ナ ケ	庄底	基部粘土板の	
	C — I 1.3					D 20.4 J 1.3	孔後指ナデ	5本/0.6cm 9本/1.3cm 13本/1.8cm	幅4cm 残存率40%		

人物埴輪（第88図、図版48）

帽子をかぶった男子埴輪である。腕の一部と基部底面を欠く。埴丘埴輪列中から出土し、残存する埴輪列中では最も西寄りに位置する（第78図）。残存高59.2cm、裾部までの長さ37.7cmを測る。

胎土は砂粒、軽石粒子を多く含む。淡橙褐色を呈し焼成は良好である。

帽子をかぶり、髪は下げ美豆良に結い、頬飾りをつけ、右手を腰に左手は腹部にあてている。帽子の形状は、先が尖り鎧の狭い三角形である。顔部は9cm×9cmの丸顔でやや上を向く。目と口は刀子で切り抜かれ、目はやや下り目で目尻の両端が丸味をもつ梢円形を呈する。眉もやはり下がり気味で幅0.6~0.8cmの粘土紐を貼り付けた後、中央を窪ませている。鼻すじは通り先端が尖る。鼻



38

0 10cm

第88圖 第5號填出土人物埴輪(1)

孔の表現はない。両頬には赤彩が施され、目もとから下頬にかけ幅0.7~1.2cmの棒状に認められる。美豆良先端はくの字に折れ曲がり、径1.5cmの丸棒で表わされる。手は扁平なミトン形と思われるが、親指が省略されている可能性もある。頸飾りは径1cmの粘土粒を間隔を開けて10個貼り付けている。上衣の表現はなく、裾は僅かに反る程度である。胸部側面および基部側面には、それぞれ径約2.3cmと径約3cmの孔が各1対づつ穿たれている。

頭部の成形は、粘土紐を巻き上げた後頭頂部で絞り込むが、完全に塞がず径2cmほど開口しておきその上に粘土を貼付し、帽子をかぶせて最終的に塞いでいる。腕は柄をもち肩部の孔に差し込まれている。

外面整形は、縦刷毛14本／2cm単調整が施されるが、頸部付近はその後、撫でを行う。また帽子の鋤下から後頭部にかけても、刷毛調整後撫でを施す。腕部は削り調整後撫で。内面胸部はやや斜位の指頭撫で調整、基部は左下りの斜撫で調整を施す。

人物埴輪（第89図、図版48）

帽子をかぶった男子人物埴輪で、帽子および顔の半分、腕、基部の一部を欠く。西側周溝中より出土した。残存高は71cm、裾部までの残存高44.3cm、基部径15.5cmを測る。

胎土は砂粒、赤色粒子、軽石粒子をやや多く含む。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。

帽子をかぶり、髪は下げ美豆良に結い、頸飾りをつけ、両手を腰にあてている。全体の形状は第88図によく似ている。帽子は三角形と考えられ、鋤は第88図例よりも広く作られている。顔部は10.5cm×9cmのはぼ丸顔である。目と口は刀子で切り抜かれ、目は長さ4cmと細長く、隅の丸い長方形である。眉は幅0.8cmの粘土紐を直線的に貼り付けた後、中央を窪ませている。鼻すじは通り先端は尖る。鼻孔の表現はない。目の下から下頬にかけ幅0.8cmの赤彩が棒状に認められる。耳は幅1cmの粘土輪を美豆良の後に貼付し、外から内にむけて穿孔している。美豆良は先端を欠くが、第88図と同様にくの字状に折れ曲がっていたと考えられる。頸飾りは径1cmの粘土粒を間隔をおいて貼り付けている。上衣の表現はないが、腰部に幅1.5cmの粘土紐を廻らせて腰紐としている。紐中央には長さ22cm、幅1cm、長さ推定7cm、幅1.3cmの粘土紐がへの字に下がり刀子が表現されている。手はミトン形で、親指を腰に添えている。左手の位置が右よりもやや高い。胸部側面には径約2.5cm、基部側面には径約3.5cmの孔がそれぞれ1対づつ穿たれている。

頭部成形は頭部を欠くため詳らかでないが、第88図と同様の絞り込みの痕跡がある。腕は柄をもち、肩部の孔に差し込まれている。

外面整形は、縦刷毛14本／2.2cm単で、胸部部分は撫でにより消されている。帽子の鋤下から後頭部にかけても刷毛目の上を撫で調整している。腕は削り調整の後撫で。また、耳、腰紐、刀子、手を貼り付けた場合、その周囲を撫で調整する。内面頭部は指頭撫でおよび指頭押さえ、胸部は指頭撫で調整を施す。さらに胸部上半には斜刷毛を加える。基部は右下りの指頭撫で調整を施す。

人物埴輪（第90図）

男子人物埴輪の破片である。左腕と頭部から胸部にかけてのものが残る。顔部は鼻と口が僅かに残

るだけのため、図上復元した。西側周溝中より出土した。復元残存高24.6cmを測る。

胎土は砂粒、5mm大赤色粒、軽石粒子を多く含む。赤橙褐色を呈し焼成は非常に良い。

結髪は中央で左右に分け、短い髪の下から下げ美豆良を垂らす。毛髪は刷毛目2cm/8本で表わし、中央の分け目は刷毛目後、指で撫でつけ窪ませている。分け目および額周縁部には赤彩が施される。顔部は鼻と頬が残るのみだが、残存する目尻から復元すると目は長方形に近いと思われる。鼻は鼻すじが通り先端が尖る。鼻孔の表現はない。口は下辺が残っており、目も口も刀子で切り抜かれたと思われる。美豆良後方には、方形を呈する孔が穿たれている。刀子で切り抜かれたようであり、耳の表現であろうか。顎部には、径1cmの粘土粒を間隔をおいて貼り付けている。残存する左腕は手首から先を欠くため状態は不明である。他に右手と思われる腕が出土しているが右肩を欠くために接合状態はつかめない。両腕とも中位と手首に幅0.8~1cmの粘土紐を巻きつけ、赤彩が施されている。胴側面には径約2.5cmの孔が穿たれている。

頭部成形は、粘土紐を巻き上げた後、頭頂部で絞り込み、径2cmほど開口させておく。その上に粘土をかぶせて塞ぎ、結髪を作り出している。腕は柄をもち、肩部の孔に差し込まれている。

外面整形は、継刷毛9本/15cm単を施し、胸部分は撫で調整により消されている。背面は短かい頭髪部以下、後頭部から背中にかけ入念な継刷毛が施されている。内面頭部は指頭撫でおよび指頭押えを施し、胴部は木口状工具による撫でと、指頭による撫でつけ調整を行う。

人物埴輪（第91図、図版49）

上衣裾部から襷の足結付近までのろが残る。西側周溝中より出土した。左右の足もと破片であり図上復元した。残存高24.3cm、裾部復元径38.8cmを測る。

胎土は砂粒、赤色粒子、軽石粒子を含む。茶褐色を呈し焼成はかなり良い。

上衣裾部には、赤彩された扁平な粘土紐が貼付されており、大刀の端部と考えられる。襷は太く股らみ、足結までの長さは14.3cmを測る。足結は刷毛調整の上に粘土を薄く貼り付けて撫でつけ、幅1.5cmの赤彩を施して表わす。結び目は確認出来なかった。襷部には、継刷毛7本/1.5cmを施した後、筆先を用いて格子目状沈線を描いている。施文順序は、まず横方向に3本走らせるが、間隔は上から下へと狭くなる。その上に縦方向の沈線を施して格子を形作る。左足部では継8本が走る。

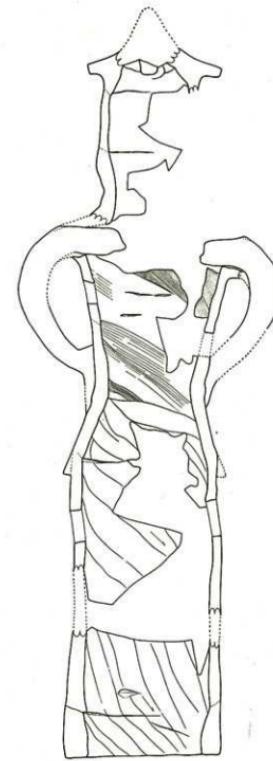
外面整形は、上衣裾部を2種の工具で斜刷毛調整12本/1.7cm単、7本/1.5cm単し、端部は横撫でを施す。内面は、裾部、襷部とも指頭撫で調整を行い、部分的に斜刷毛を施す。

馬形埴輪（第92図、図版49）

胸部と脚部上半の破片であり、胸部と臀部は障泥で僅かにつながっている。西側周溝中より出土した。残存長52.5cm、残存高28cmを測る。

胎土は砂粒、軽石粒子、角岩礫をやや多く含む。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。

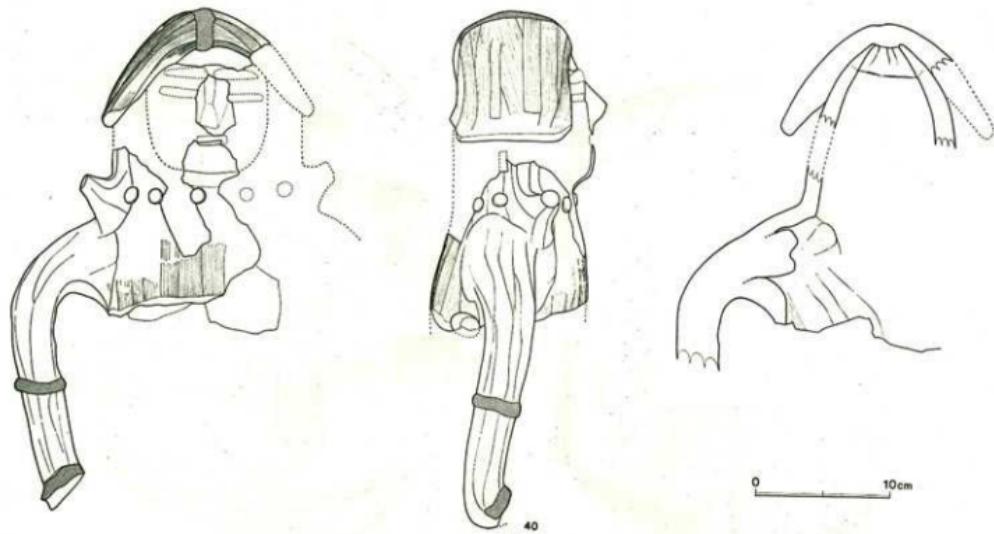
胸部は中央に径約4cmの孔が穿たれ、胸繫と杏葉が残る。胸繫は幅2.3cmの粘土紐を貼り付けて表現し、杏葉は幅1.9~2.2cmの粘土紐を逆V字形に折り曲げて貼り付けている。残存するのは2個



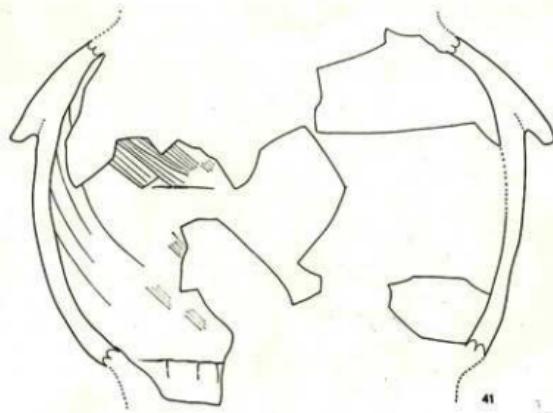
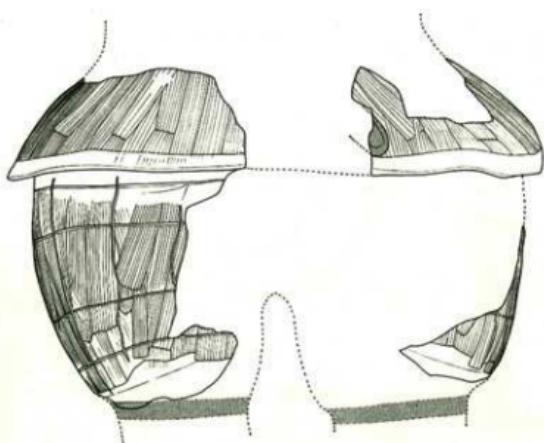
39

0 10cm

第89圖 第5號墳出土人物埴輪(2)

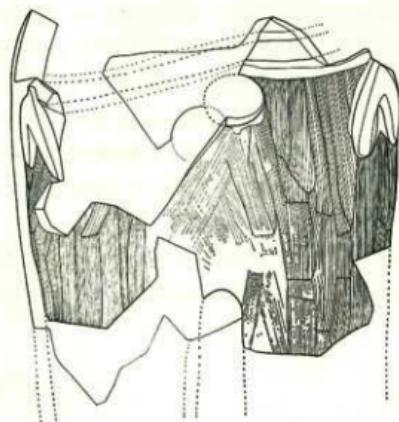
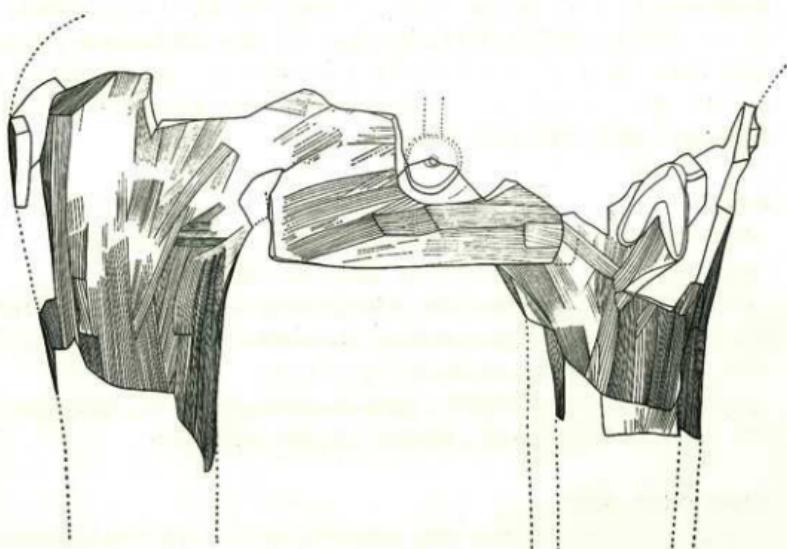


第90圖 第5號墳出土人物埴輪(3)



0 10cm

第91圖 第5號墳出土人物埴輪(4)



0 10cm

第92圖 第5號填出土馬形埴輪

である。鞍部は障泥と鎧の一部が残り、障泥の下辺は残存長20.4cmを測る。鎧は輪鎧と思われ、幅2cmの粘土紐を輪状に貼り付けている。復元外径3.3cm、復元内径0.6cmと極端に内径が小さい。臀部は径約4cmの孔が穿たれ、尻尾は残っていないかった。脚部は別個に製作したものを、胸部に接合している。外面整形は、障泥部分は横刷毛、胸から脚部、尻から脚部は縦刷毛調整を施す。刷毛状工具には粗密の二種があり、8本／1.5cm単と11本／1.5cm単が認められる。障泥部分は粗い目が中心で、脚部は密な目が多く使用されている。内面胸部は指頭撫で調整、脚部接合部分は、不定方向の斜刷毛調整を加える。脚部は指頭撫で調整を施す。

馬形埴輪

胸部から脚部にかけての小破片である。西側周溝中より出土した。残存長約25cmを測る。

胎土は砂粒、赤色粒子、軽石粒子を多く含む。茶褐色を呈し、焼成は良好である。

残存部は左前足部分で、胸繫と杏葉が残る。胸繫は幅2cmの粘土紐を貼り付けて表わし、端部は鞍部に接する。残存する杏葉は2個あり厚さ0.5cm、径4cmの円板に径0.8cmの粘土粒を4個配したもので、胸繫とは長さ2cm、幅0.7cmの粘土紐でつながっている。

外面整形は、9本／2cmの縦刷毛調整で、胸繫部は粘土紐両側を撫で調整する。内面は指頭撫での後、9本／2cmの斜刷毛調整を施し、脚接合部は入念な撫でつけ調整を施す。

家形埴輪（第93図、図版50）

入り母屋造り家形埴輪の切妻屋根部である。西側周溝中より出土した。小破片が多く図上復元した。残存高17.8cmを測る。

胎土は砂粒、軽石粒子の他、3mm大の赤色粒を多く含む。橙褐色を呈し、焼成は良好である。

棟方向の大きさは破風先端まで含め38cmを測る。破風板は幅1cm、長さ8cmの二等辺三角形の粘土板を貼り付け、角度は垂直に近い。棟部には5本の堅魚木を垂せている。堅魚木は長さ平均5cm、径平均1.4cmの丸棒で表わす。堅魚木は棟に嵌まり込んでいるため、中央は棟と同じ高さに撫でられている。流れの面には刷毛目の上に鋸歯文が施される。刀子先端を用いたと思われる細い沈線で施文されており、残存部では2本の横走する沈線と4本の斜走沈線が認められる。順序は横位→斜位である。線の運びが省略されたり、大きさも不揃いで、端部は三角にならない等、文様としては雑である。

外面整形は、12本／1.7cm単と9本／1.8cm単の粗密二種の刷毛調整が施され、斜刷毛を主に行っている。周縁部は撫で調整される。内面は指頭撫でおよび撫でつけ調整を施すが、一部斜刷毛調整も加えている。

家形埴輪（第94図、図版50）

四注造り家形埴輪である。西側周溝中より出土した。側回りは1/2ほど残るが、屋根と接合せず図上復元した。

胎土は砂粒、3mm大赤色粒子を多く含む。淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。

残存高42.5cm、平方向の長さ29.3cm、妻方向の長さ15cm、軒先までの高さ31.6cmを測る。屋根部は平方向で復元長30.5cm、妻方向20cmを測る。

側回りは幅3cmの粘土帯を積み上げて成形され、側回り外面は目の細かい縦刷毛15本／2cmが施されている。四隅には、幅1.5cmの突帯を貼り付け両脚を撫で調整している。屋根部は幅5cmの粘土帯を側回りに貼り付けた後、側回り外面に幅3cmの粘土帯を貼付し軒を作り出し、端部は横撫でする。内面は指頭撫でおよび斜刷毛調整が施される。

盾形埴輪（第95図、図版50）

上辺、基部を欠き、小破片が多いため図上復元した。残存高39.4cmを測る。

胎土は砂粒、赤色粒子、多量の軽石粒子を含む。淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。

円筒をそのまま盾面に使用し、上端を潰して上辺を作り出し、両翼をついている。そのため盾面の正面、背面とも近似の脹らみをもつ。上辺は丸味をもった山形曲線を描き、両端に突起をもつ。盾面復元長36.3cm、上辺復元幅25.3cm、中央括れ部復元幅21.5cm、下辺復元幅22.5cmを測り、括れは極めて弱い。背面には5cm×4cmの楕円形の孔が穿たれている。

外面整形は、両面とも縦刷毛および斜刷毛調整で、8本／1.6cm単を数える。盾面周縁部は撫で調整。内面は指頭撫で調整を施す。

大刀形埴輪（第96図46）

勾金部下端部分の破片である。西側周溝中より出土した。残存長9cm、幅4cm、厚さ1cmを測る。

胎土は砂粒、赤色粒子、軽石粒子を含む。橙褐色を呈し、焼成は良好である。

長さ3.5cmの棒状粘土を縦に貼り付け三輪玉としている。内外面とも撫で調整が施される。

韁形埴輪（第96図）

韁の矢柄と鐵の部分である。西側周溝中より出土した。残存長9.8cm、幅7.8cm、厚さ1cmを測る。

胎土は砂粒、赤色粒子、多量の軽石粒子を含む。赤褐色を呈し焼成は非常に良い。

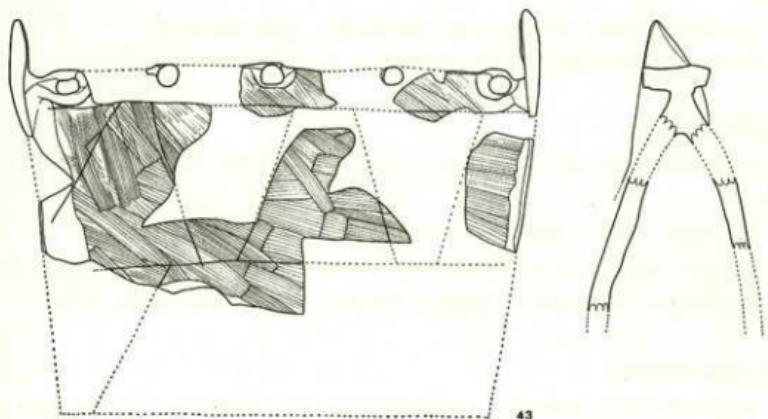
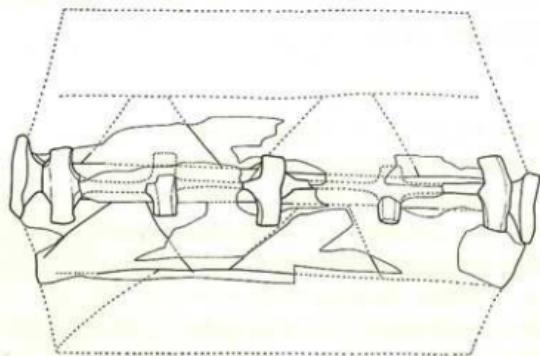
長さ7.5cm、幅0.8～1cmの粘土紐を4本貼り付けて矢柄を表わし、さらに粘土紐先端から2～2.5cmの位置に逆八の字の切れ込みを、紐両脚に入れることによって、鐵の抉りを表現している。

矛形埴輪（第96図48）

矛先部の破片であり、先端を欠く。西側周溝中より出土した。残存長14.5cm、幅7.1cm、厚さ1.5cmを測る。

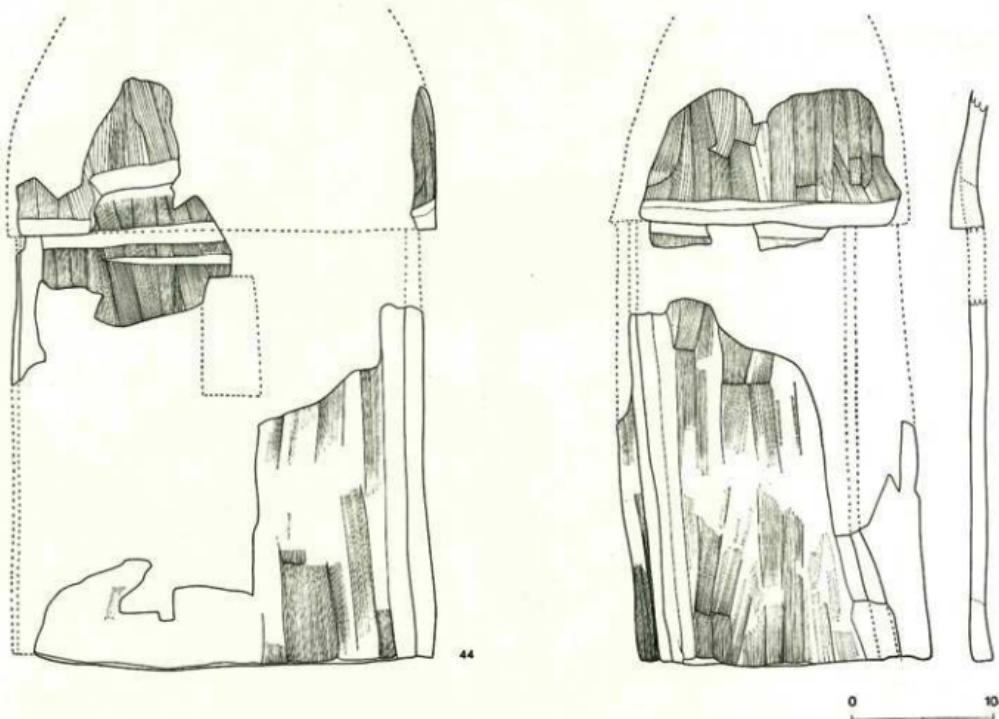
胎土は砂粒、赤色粒子、軽石粒子をやや多く含む。橙褐色を呈し焼成は良好である。

内外面とも縦刷毛8本／2cmが施され、中央に鐵を表現する幅1～1.2cmの粘土紐を貼り付けている。

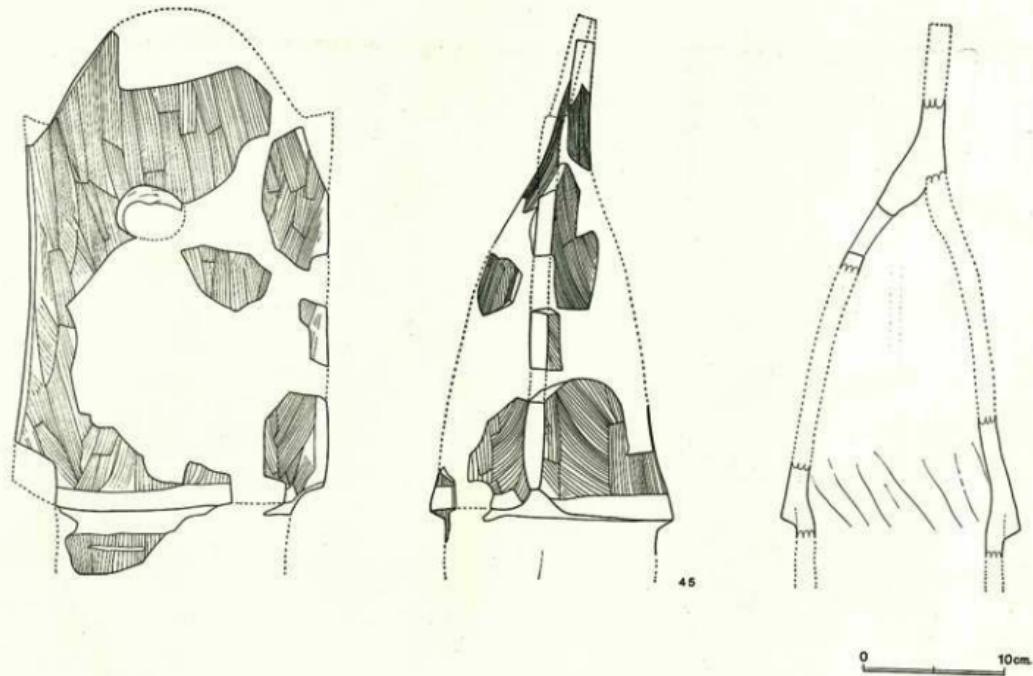


0 10 cm

第93図 第5号墳出土家形埴輪

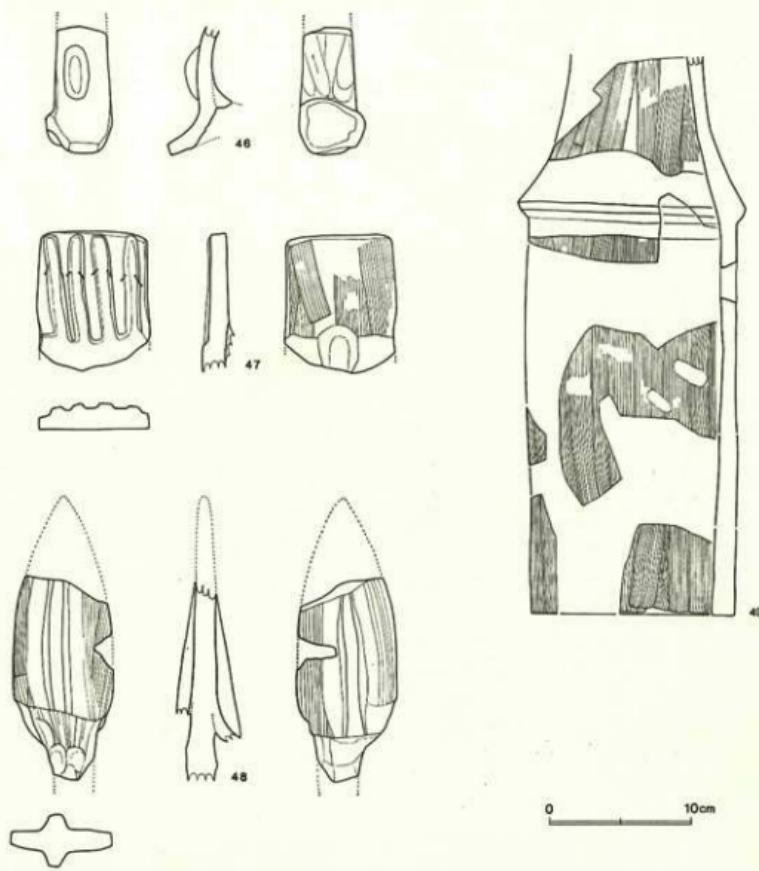


第94圖 第5號墳出土家形埴輪



第95圖 第5號墳出土盾形埴輪

0 10cm.



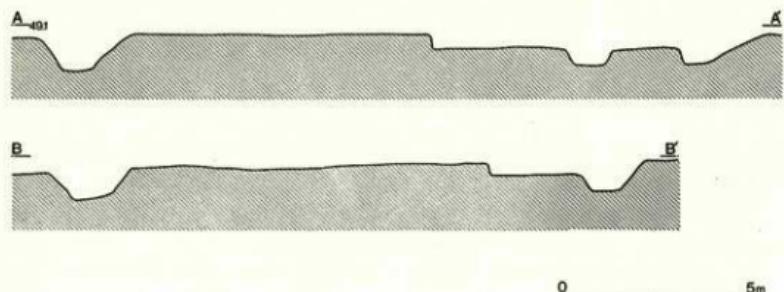
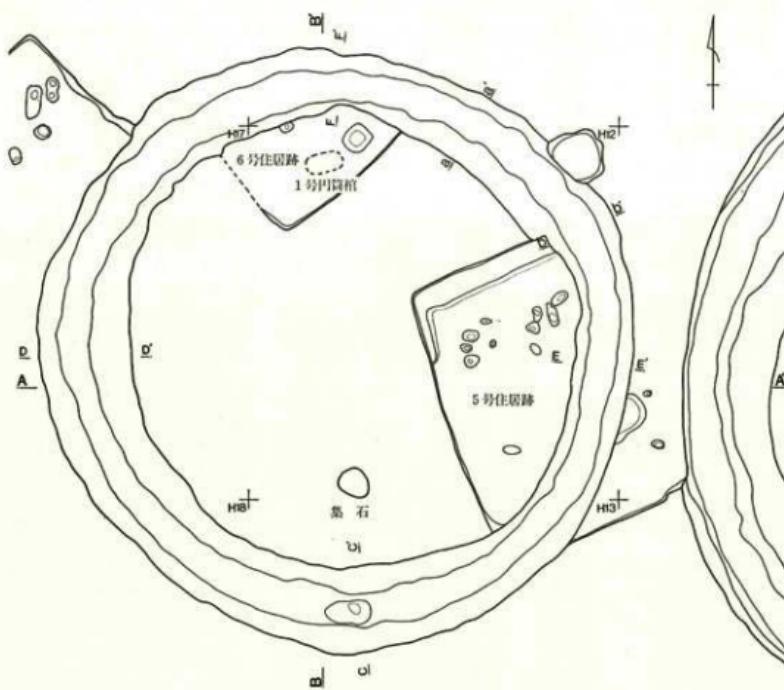
第96図 第5号墳出土大刀・軸・矛形埴輪

形象埴輪基部（第96図49）

人物埴輪基部と考えられ、上衣裾部が残る。小破片が多く図上復元した。西側周溝中より出土した。残存高39.6cm、基部復元高27.9cm、基部復元径13.5cmを測る。

胎土は砂粒、軽石粒子を多く含む。淡橙褐色（一部黄褐色）を呈し、焼成は良好である。

基部側面には径約2.2cmの孔が1対穿たれている。外面整形は縦刷毛12本／2cmを施し、上衣裾部および基部接合部は指頭撫で調整される。内面は斜位の指頭撫で調整を施す。



第97図 第6号墳

第6号墳（第97～99図、図版21）

市の川に形成された沖積地を目前に臨む、調査区北端の台地肩部から斜面部にかけて、築造された第1号墳の南側には、墳丘を完全に消失した3基（第6～8号墳）の古墳が存在している。

第6号墳は、そのうちの西側に位置するもので、H-12・13・18グリッドを中心に検出されている。

隣接する第7号墳とは、僅かに1.4m離れているに過ぎず、五領期の第5・6・7号住居跡を切り、绳文時代早期の集石を内包して築造されている。

確認された周溝は、外径16.1m、内径12.2mを測る。ほぼ円形に廻るが、第7号墳を意識してか、東側が直線的に掘り込まれている。周溝の幅も、第7号墳側が1.6mと幅狭く、他は2.5m前後である。深さは0.75～0.85mを測る。第6号墳が、台地の西側に存在する小支谷側へ、緩く傾斜する地点に存在するために、傾斜に沿って西側が僅かに浅くなっている。覆土には、多量の柔根が入り組んでいたが、黒褐色土・茶褐色土・濃茶褐色土がレンズ状に堆積していた。

周溝外側壁は、中位に肩も覗られず、垂直に近く立ち上がるが、雜に掘り込まれ凹凸も目立つ。内側壁は、西側から南傾にかけて緩く、他は比較的きつく立ち上がる。

周溝底は、凹凸も無く平坦な平底で、幅0.8～0.85mと平均化している。南側の周溝底には、黒褐色土中から底面下まで掘り込まれた、長径1.25m、短径0.6mの梢円形を呈する土壙が存在している。また、北東側の周溝外壁に接して、第6号墳に伴う可能性が認められる、径1.4m、深さが周溝底と同一レベルである隅丸方形の土壙が検出されている。

主体部は、第7号墳同様に、耕作などのため完全に削平され、その痕跡も全く認められず、周溝内からも関連した遺物の出土は無い。

遺物は、周溝覆土中から壺・甕・埴など11点出土しているが、特に北東部の周溝に集中していた。壺（第101図1・第99図a-a'）は、周溝中位の茶褐色土から検出され、底部穿孔の甕（第101図3・第99図b-b'）は、上面の黒褐色土中より潰れた状態で出土している。

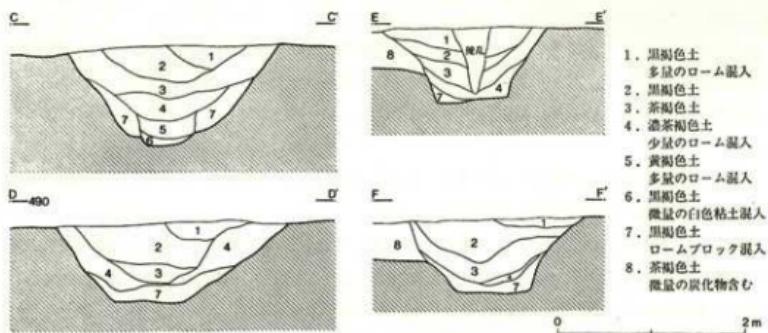
北側の墳麓に存在する第6号住居跡内に、円筒埴輪棺が埋設されていた。

円筒埴輪棺（第100図）

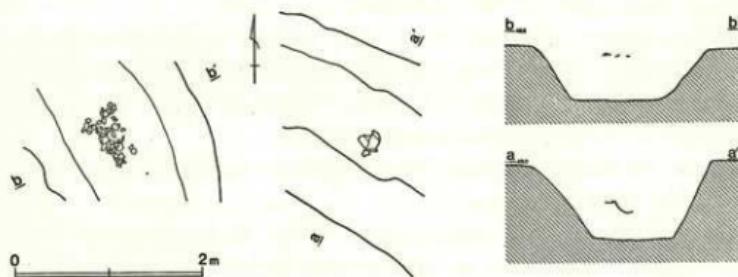
第6号墳の北側墳麓に存在する、五領期の第6号住居跡調査中に検出された。調査開始時には、住居跡覆土と円筒埴輪棺の覆土が、あまりにも良く類似していたため、その存在が確認できず、掘り方の上部を鏟す結果となってしまった。

円筒埴輪棺は、周溝内側の立ち上がりから約1m離れ、第6号住居跡覆土を切って埋設されていた。

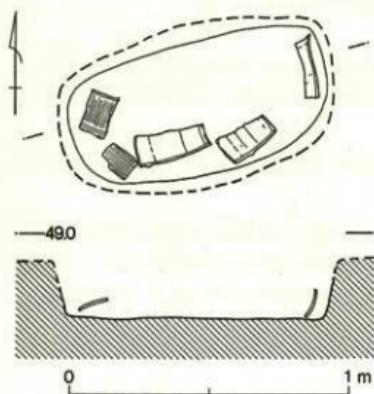
長辺1.06m、短辺0.68m、深さ0.2m、N-75°-Eを主軸とする隅丸長方形の土壙内に、第7号墳円筒埴輪棺3個体の一部を使って設置されていた。調査中に埴輪の一部が盗難に会い、埋設状態が不明瞭になった点もあるが、円筒埴輪口縁部及び底部の大型破片が両側に並び、蓋に利用されたと思われる口縁部の破片が、側面より出土している。他の遺物は出土していない。



第98図 第6号墳周溝土層断面図



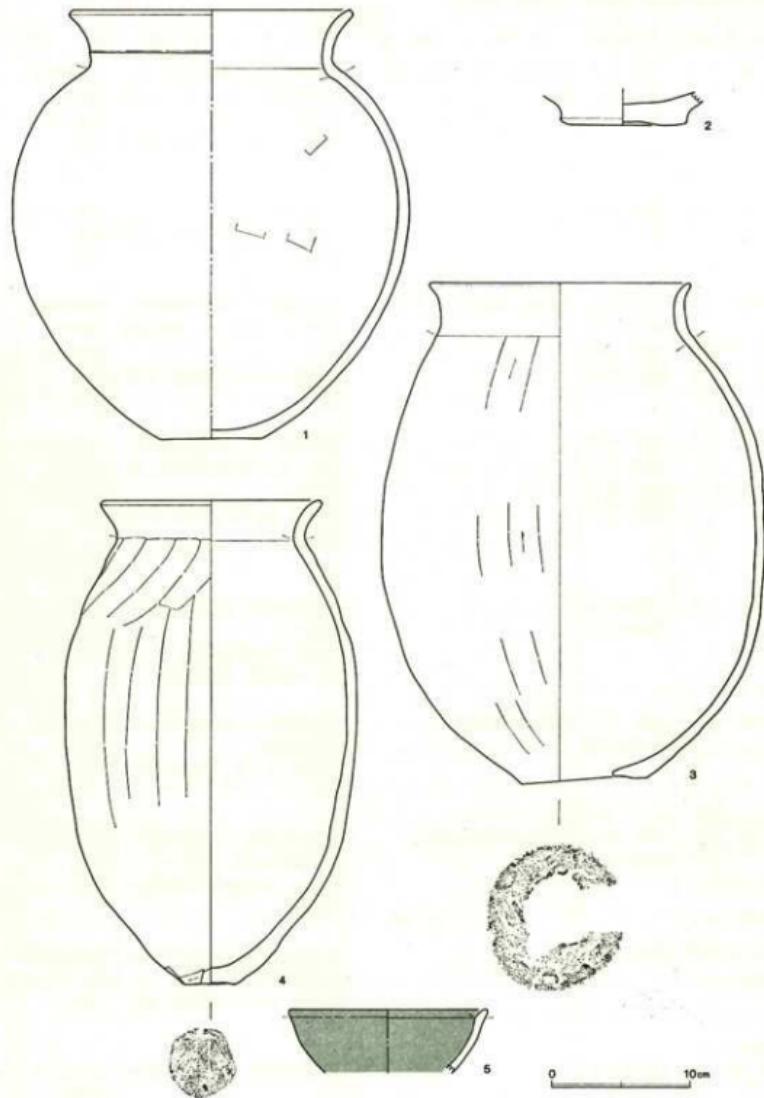
第99図 第6号墳周溝遺物出土状況図



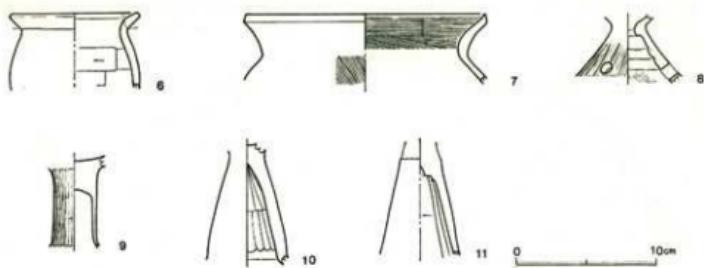
第100図 第6号墳円筒埴壇棺出土状況図

第6号墳出土遺物（第101・102図、図版51）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 20.0 胴径 29.5 底径 7.5	横ナデにより、口縁部に小さい段をもつ。	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ。内面木口状工具によるナデ。底部笠削り。 橙褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部70%、 胴部60%、 底部100%現存。 1区。
壺	2	底径 7.4 現存高 2.4		底部笠削り。 灰褐色。A～F+細砂粒。焼成良好。	底部100%現存。 6区。
甕	3	口径(18.8) 胴径 28.0 底径 9.1 器高 36.1	底部は、焼成後穿孔されている。	口縁部横ナデ。胴部外面笠削りの後ナデ、内面ナデ。底部笠削り。 淡褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部40%、 胴部50%、 底部60%現存。 3区。
甕	4	口径 15.6 胴径 3.7 底径 21.2 器高 35.0		口縁部横ナデ。胴部外面笠削りの後ナデ、下端のみ笠削り、内面ナデ。 黄褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部60%、 胴部70%、 底部100%現存。 1・2区。 底部木葉痕
甕	5	口径(14.4) 現存高 4.7		口縁部横ナデ。体部外面不明、内面ナデ。 赤褐色(内外面赤彩)。A～D+F+細砂粒。焼成良好。	口縁部・体部20%現存。 2区。
鉢	6	口径 9.1 現存高 5.5	複合口縁状を呈す。	口縁部横ナデ。体部外面ナデ、内面笠削り。 橙褐色。A～F+細砂粒、焼成良好。	口縁部20%現存。 6区
甕	7	口径 17.5 現存高 3.5	口縁端部が立ち上がる。	口縁部外面横ナデ、内面刷毛目、胴部外面刷毛目、内面ナデ。 灰褐色。A+D+E+細砂粒。焼成良好。	口縁部70%現存。 10区
器台	8	現存高 4.8		脚部外面刷毛目、内面下半刷毛目の後ナデ。 橙褐色。A～D+細砂粒。焼成良好。	脚部40%現存。 1区。
高杯	9	現存高 6.6		柱状部外面粗い笠磨き、内面ナデ。 褐色。A～D+G+細砂粒。焼成良好。	柱状部100%現存。



第101図 第6号墳出土遺物(1)



第102図 第6号墳出土遺物(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	10	現存高 8.6		柱状部外面ナデ、内面指ナデの後上半を窓削り。 橙褐色。A～F+細砂粒。焼成良好。	柱状部70%現存。 12区。
高杯	11	現存高 8.1		柱状部外面木口状工具によるナデか。内面窓削り。 橙褐色。A～F+細砂粒。焼成良好。	柱状部80%現存。 9区。

第7号墳（第103・104図、図版22～24）

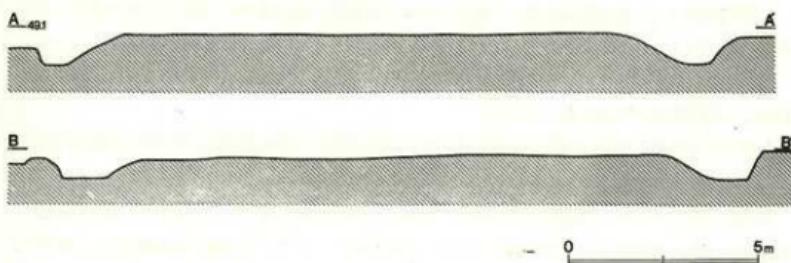
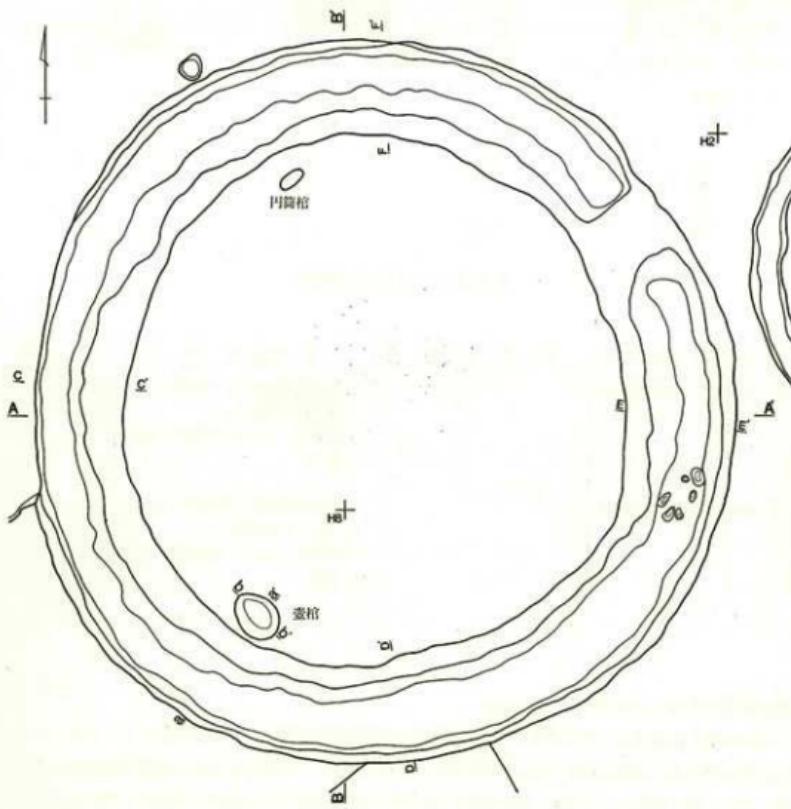
台地肩部に築造された第1号墳の南側、肩部より約30m程度離れた平坦部のH-2・3グリッドに位置している。西側に第6号墳、東側に第8号墳が存在し、中央に挟まれた状態で検出されている。また、第6号墳とは1.4m、第8号墳とは0.8mと周溝を接する状態に、3基が1列に近接した関係にある。

五領期の第4・5号住居跡を切って掘り込まれた周溝は、外径18.6m、内径13.5mを測り、円形に廻る整ったものである。

周溝の幅は2.5～2.9m、第6号墳寄りの西側が僅かに狭い程度である。深さは0.9～1.2m、傾斜に沿って南側に徐々に浅くなっている。

周溝外側の壁は、中間に角をもち立ち上がりの角度が微妙に変化するが、ほぼ垂直に近く立ち上がる。内面の立ち上がりも僅かに肩が存在するが、緩やかである。

周溝底は0.7～1.2m、西側が極端に幅狭になるが、平坦に掘られている。第8号墳側の北東部には、幅1.7m、周溝底より約30cm高まるブリッジが存在し、ブリッジを画する周溝底は、北側方形、南側が弧状を呈している。また、ブリッジの南には、6本の浅いピットが集中して掘り込まれている。覆土は黒色土、暗褐色土、茶褐色土がレンズ状に堆積し、黒色土中より円筒埴輪・縁泥片

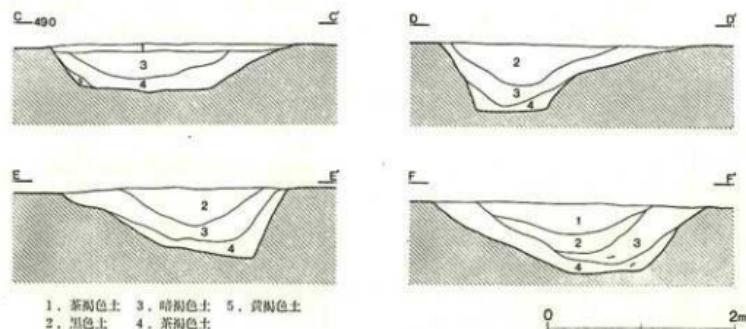


第103図 第7号墳

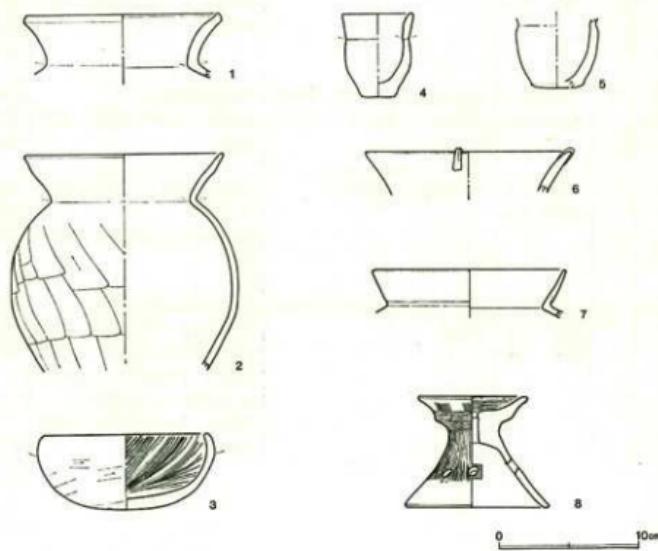
岩破片、茶褐色土中より和泉期の杯が出土している。

墳丘が削平されていたため、主体部は未確認であるが、調査時の所見や出土遺物から、緑泥片岩を使用した箱式石棺などであったと推定される。

西南の墳麓より壺棺、北側の墳麓より円筒埴輪棺が各1基ずつ、良好な状態で検出されている。また、円筒埴輪棺と相対する状態に、周溝外側に覆土を周溝覆土と同じくする円形の土壙が存在する。



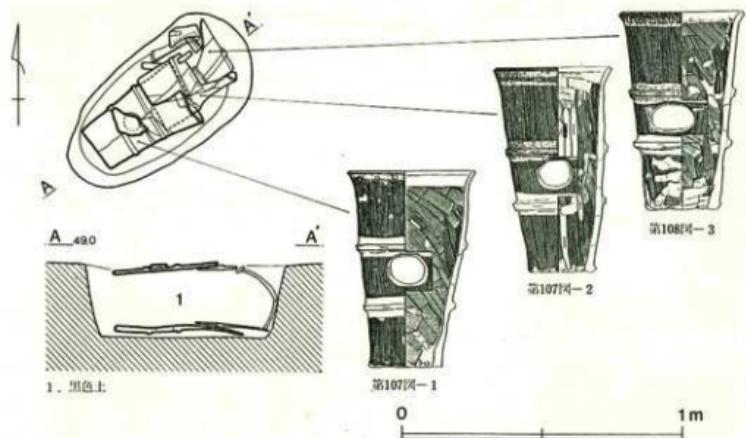
第104図 第7号墳周溝土層断面図



第105図 第7号墳出土遺物

第7号墳出土遺物（第105図、図版51）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径(13.8) 現存高 4.6	口縁端部が僅かに立ち上がる。	口縁部横ナデ。 橙褐色。A～D+細砂粒。焼成良好。	口縁部30%現存。 11区。
小型甕	2	口径 14.1 胴径 16.4 現存高15.5		口縁部横ナデ。胴部外面範削りの後部分的にナデ。内面ナデ。黄褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部90%、 胴部70%現存。
壺	3	口径 11.8	口縁部内凹する。丸底を呈す。	口縁部外面横ナデ。体部外面・底部範削りの後ナデ。体部内面暗文。 橙褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部50%、 体部70%現存。 3区。
手捏ね	4	口径 (4.9) 底径 2.5 器高 6.0		口縁部横ナデ。体部内外面ナデ。底部ナデ。 赤褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10%、 体部50%、 底部100%現存。 7 G。
手捏ね	5	底径 (3.8) 器高 5.0		体部外面ナデ。 灰褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	体部40%、 底部20%現存。 11区。
壺	6	口径(14.8) 現存高 3.3	口縁の内から外にかけ、細い粘土紐を2本1組にして、付着している。	口縁部範磨きか。 橙褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部20%現存。 10区溝。
甕	7	口径(13.7) 現存高 3.4	口縁部僅かに内凹する。	口縁部内外面とも木口状工具によるナデ。 褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10%現存。 11区。
器台	8	受部径 7.7 底径 10.3 器高 8.0	脚部に2孔ずつ組になり計6孔を有す。	受部外面刷毛目の後横ナデし、更に範磨き、内面範磨き。脚台部外面刷毛目の後上位・中位を範磨き、下位を横ナデ。内面上位・中位ナデ、下位横ナデ。 橙褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	器受部・脚部90%現存。 4区。



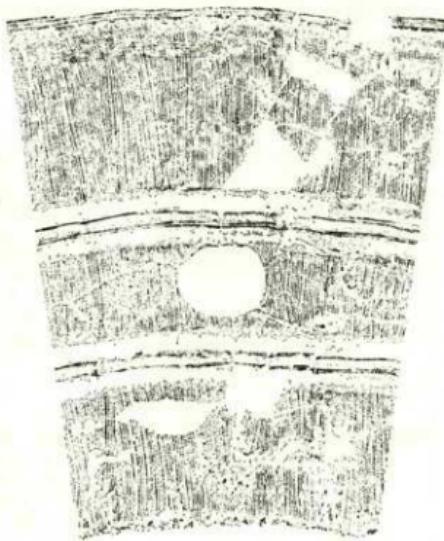
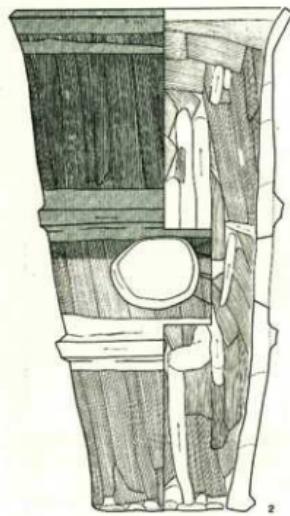
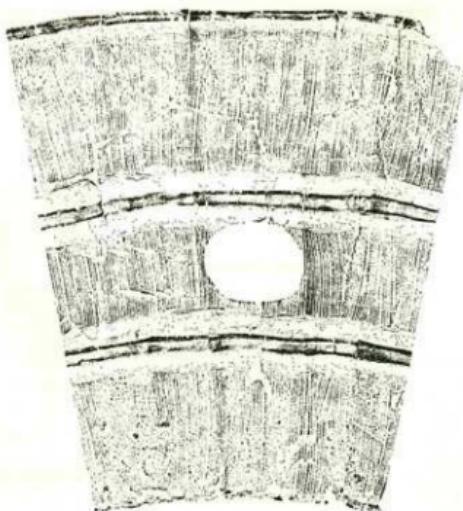
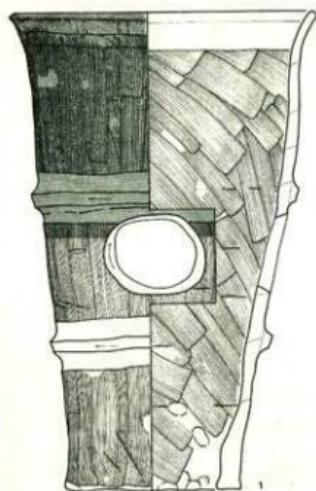
第106図 第7号墳円筒埴輪棺出土状況図

円筒埴輪棺（第106図、図版22・23）

北側の埴籠、周溝内側の立ち上がりから0.7m離れた墳丘内から検出され、遺構確認時に円筒埴輪の一部が顔を出している状態であった。長径77cm、短径40cm、深さ26cm、N-51°-Eを主軸と

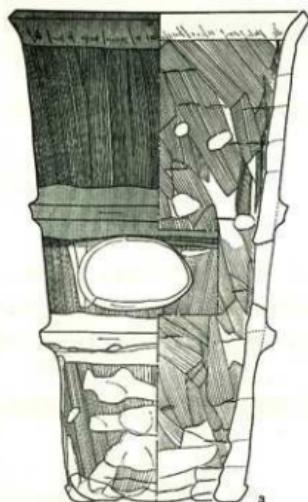
第7号墳出土埴輪（第107・108図、図版52）

図版 番号	器高	器径	器厚	胎 土	焼 成	色 調	突 带	通 孔	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
107図1	A39.8	E25.6	G 0.7	極少量	良好	黄橙色	K 台形	胴部に円孔 0.6/2.4	口縁部から基 底部への縫へ	基部指頭圧痕	基底部指頭圧痕
	B15.4	F14.6	H 1.1	石英			L 台形	6.6×8.5 右回り刀子穿ヶ 0.8/2.4孔後指ナデ	底部への縫へ ハケ	基底部右斜綫 幅7cm	基部粘土板の 幅7cm
	C12.0	I	0.7	パミス				左から右	14本/2.8cm	粘土板の幅3 ~5cm	
	D12.4	J	2.0	きめ細か い			右回りの3本 指横ナデ	9本/1.5cm 11本/1.9cm	18本/3.3cm 胴部右傾斜へ ハケ	口縁部から第 2突帯下赤彩 窓印	粘土板の幅3 ~5cm
								14本/2.8cm	口縁部右斜綫 ハケ後横ナデ	残存率95%	
								14本/2.8cm			
107図2	A46.1	E23.8	G 1.0	極少量	良好	黄橙色	K 台形	胴部に円孔 0.8/2.9	口縁部から基 底部への縫へ	基部指頭圧痕	基底部指頭圧痕
	B17.1	F13.6	H 1.4	石英			L 台形	6.0×7.4 右回り刀子穿ヶ 0.7/2.2孔後指ナデ	基底部・胴部 縫へ	基部粘土板の 幅5cm	基部粘土板の 幅5cm
	C10.9	I	1.4	パミス				左から右	10本/2cm	10本/1.6cm	~5cm
	D13.6	J	1.8	きめ細か い			右回りの3本 指横ナデ	基部指頭圧痕 後右傾斜へ ハケ後横ナデ	口縁部縫へ ハケ	口縁部から第 2突帯下赤彩 窓印	粘土板の幅3 ~5cm
								12本/2.3cm		残存率95%	



0 10cm

第107図 第7号墳円筒埴輪棺(1)



0 10cm

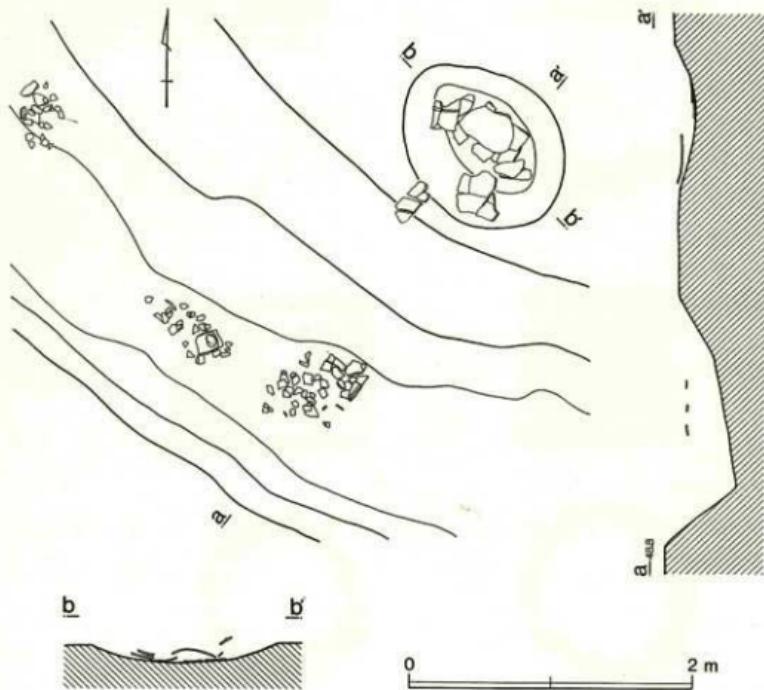


第108図 第7号墳円筒埴輪棺(2)

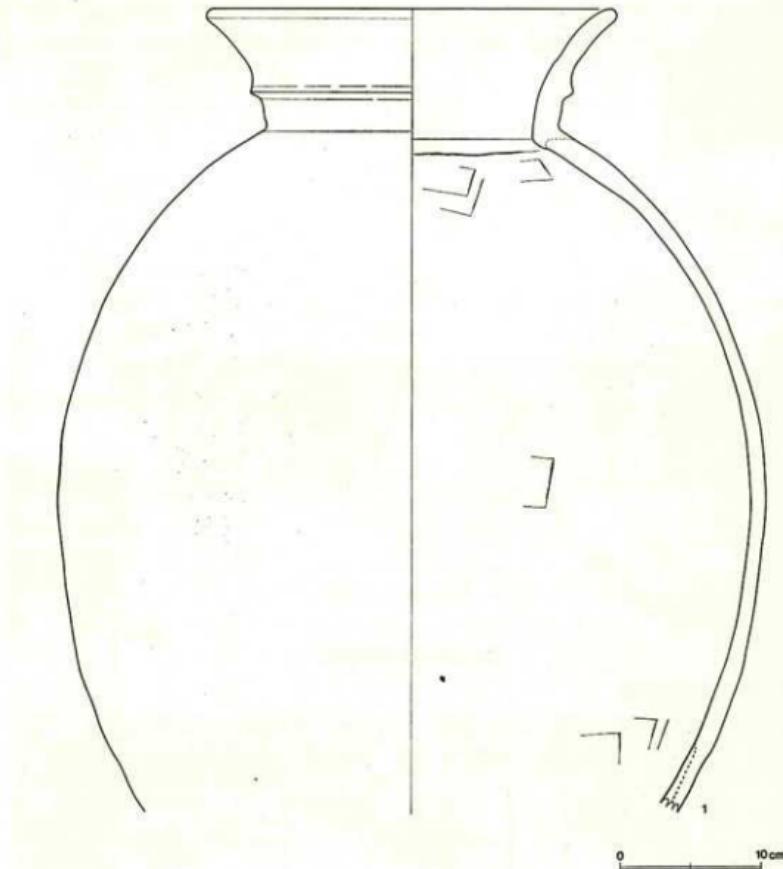
図版 番号	器高	器径	器厚	胎 土	焼 成	色 調	突 带	透 孔	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
108㉓	A 40.2	E 25.0	G 1.4	少量	良好	黄橙色	K 台形 0.7/2.8 右回りの3本 指横ナデ	胴部に円孔 6.1×— 1.0/2.8 孔後指ナデ	口縁部から基 底部への縫へ 基底部指押え 基底部指押え 附着	基部指横ナデ 基部粘土板の 縫ハケ 基部縫ハケ後 のある粘土層 一部ナデ	基底部縫压痕 基部粘土板の 幅3cm 粘土縫の幅2 口縁部から第 2突帯下赤彩 残存率50%
	B 16.5	F 15.0	H 1.3	石英			L 台形 右回り刀子背 ケ				
	C 10.3		I 1.6	バミス							
	D 13.4		J 2.5	きめ細か い							

する椭円形の掘り方に、3個体の円筒埴輪で構成されていた。本体は口縁部を北東に向け、横位に置かれ、別個体が平行に咬み合わされ、また別個体の胴部上半で閉塞された状態であった。本体の透孔は本体の口縁部で閉塞されていたが、底部は閉じられていない。掘り方や本体内は黒色土が堆積していたが、遺物の出土は観られなかった。

なお後章で触れるが、当円筒埴輪棺は、当墳の壇棺に伴う円筒埴輪、周溝内出土の円筒埴輪及び第6号墳円筒埴輪棺と接合関係にある。



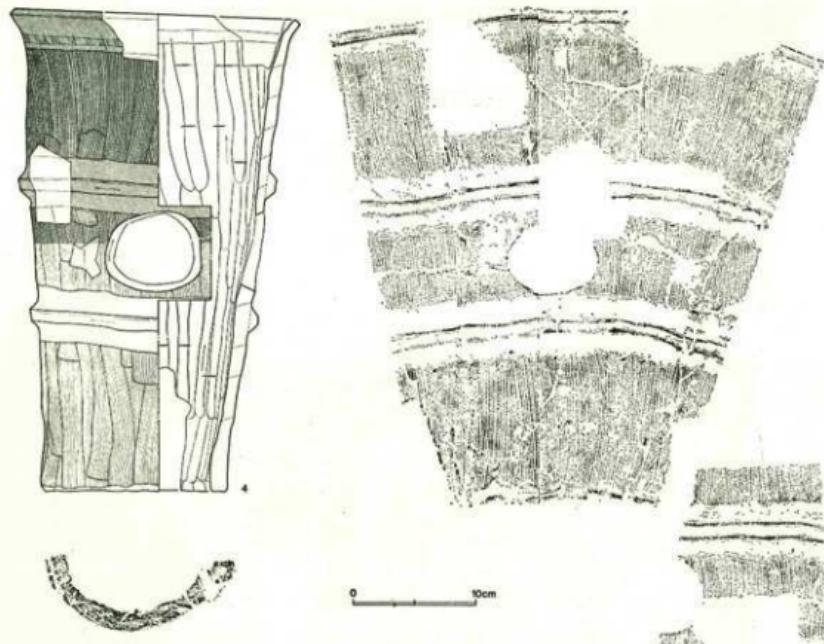
第109図 第7号墳壺棺出土状況図



第110図 第7号墳壺棺(1)

第7号墳壺棺（第110図、図版53）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
大形壺		口径 28.4 胴径 50.8 現存高57.3	口縁部中位に段をもち、緩く開く胴部中位最大径	口縁外表面丁寧な横ナデ、内面頸部まで横ナデ、胴部外表面微細な木口状工具による入念なナデ、内面木口状工具による横ナデ。淡黄褐色、胴部中位吸炭。A～D+細砂粒。作りは非常に丁寧。焼成良好。	口縁部～胴部70% 壺棺本体



第111図 第7号墳壺棺(2)

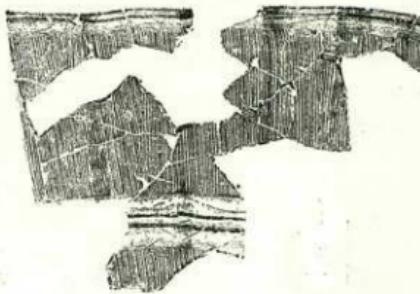
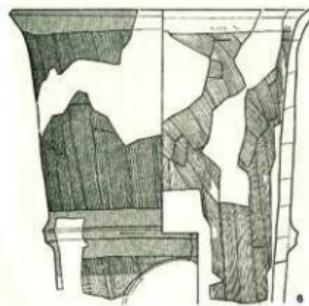
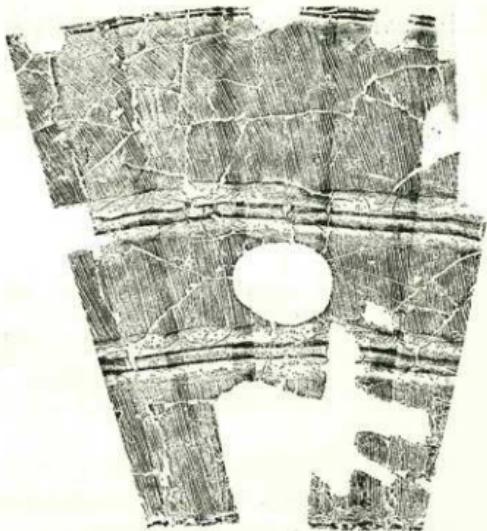
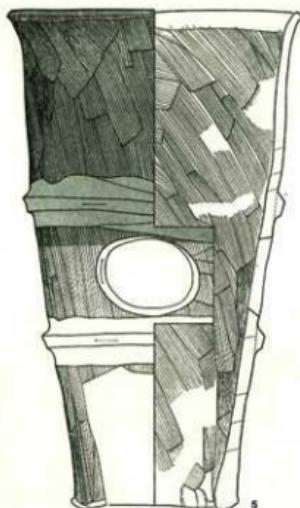
第7号墳壺棺出土埴輪

図版番号	器高	器径	器厚	胎土	焼成	色調	突帯	透孔	外面調整	内面調整	備考
111図4	A39.0	E23.8	G 1.0	極少量	良好	黄橙色	K 台形	胸部に円孔 0.7/2.4	口縁部から基部指頭圧痕	底部圧痕	
	B14.6	F15.3	H 0.9	石英			L 台形	右回り刀子穿ヶ 0.7/2.3	基底部から口縁部への縱指 幅5.5cm	基部粘土板の 幅3	
C11.0	I	1.0	ベニス				J 1.3	孔縦指ナゲ 右回りの3本 指横ナゲ	10本/1.8cm 11本/2.1cm	粘土組の幅3 ~4cm	
D13.4				きめ細かい					口縁部縱指ナ ゲ後横ナゲ	口縁部から第 2突帯下赤彩 窓印 復元実測 残存率70%	

壺棺（第109図、図版23）

周溝内側の立ち上がりから僅かに離れ、南西の墳丘裾から検出されている。円筒埴輪同様に、造構確認時に一部が露出していた。掘り方は不明瞭であったが、長径1.34m、短径1.04m、深さ6cm N-45°-Wを主軸とする梢円形、皿状に検出された。掘り方の底部に密着して、底部を欠失する大形の壺と円筒埴輪の胸部上半が、潰れた状態で出土した。埋設状態は判然としないが、円筒埴輪を蓋としていた可能性が強い。他に遺物は無い。

また、壺棺の外側周溝内より、壺棺出土円筒埴輪等と接合する円筒埴輪2個体が出土している。



0 10cm

第112図 第7号墳周溝8区出土円筒埴輪

第7号墳8区周溝出土埴輪（第112図）

図版番号	器高	器径	器厚	胎土	焼成	色調	突 带	透 孔	外面調整	内面調整	備 考
112図5	A 40.0	E 24.6	G 0.9	極少量	良好	黄橙色	K 台形 0.7/2.7	胴部に円孔 6.5×8.6	口縁部から基部指ナデ 底部へのやや基底部右傾斜	基底部指ナデ 基底部粘土板の幅5cm	基底部指ナデ 基底部粘土板の幅5cm
	B 16.5	F 13.9	H 0.9	石英			L 台形 0.7/2.6	右回り刀子穿 孔後指ナデ	斜めハケ 12本/2cm	ハケ 12本/1.9cm	粘土紐の幅 2.5~5cm
	C 10.8	I	1.0	バミス							口縁部から第2突帯下赤彩
	D 12.7	J	2.0	きめ細かい			右回りの3本 指ナデ			10本/1.5cm 口縁部右傾斜 ハケ後横ナデ 14本/2.3cm	窯印 残存率80%
112図6	A —	E 25.3	G 1.1	極少量	良好	黄橙色	K 台形 0.7/3.0	胴部に円孔 —	口縁部から基部縫ハケ 底部への縫ハケ	口縁部縫ハケ 13本/2cm	口縁部から第2突帯下赤彩
	B 18.3	F —	H 1.0	石英			L —	右回り刀子穿 孔後指ナデ	10本/2cm	口縁部縫ハケ 後右傾斜ハケ 後横ナデ	残存率40%
	C —	I —	1 —	バミス							
	D —	J —	1 —	きめ細かい			右回りの3本 指ナデ			9本/1.3cm	

第8号墳（第114図、図版24）

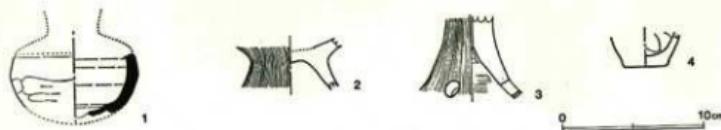
台地肩部から緩傾斜面にかけて、築造された第1号墳の南側平坦面には、西から東へ調査区を横断するように、第6~8号の3基の古墳が検出されている。

第8号墳は、そのうちの東側に存在するもので、G-22グリッドに位置している。周辺には、第2・9・10号などの五頭期住居跡が散在している。また、第7号墳とは、周溝を接するように僅か90cm離れているに過ぎない。

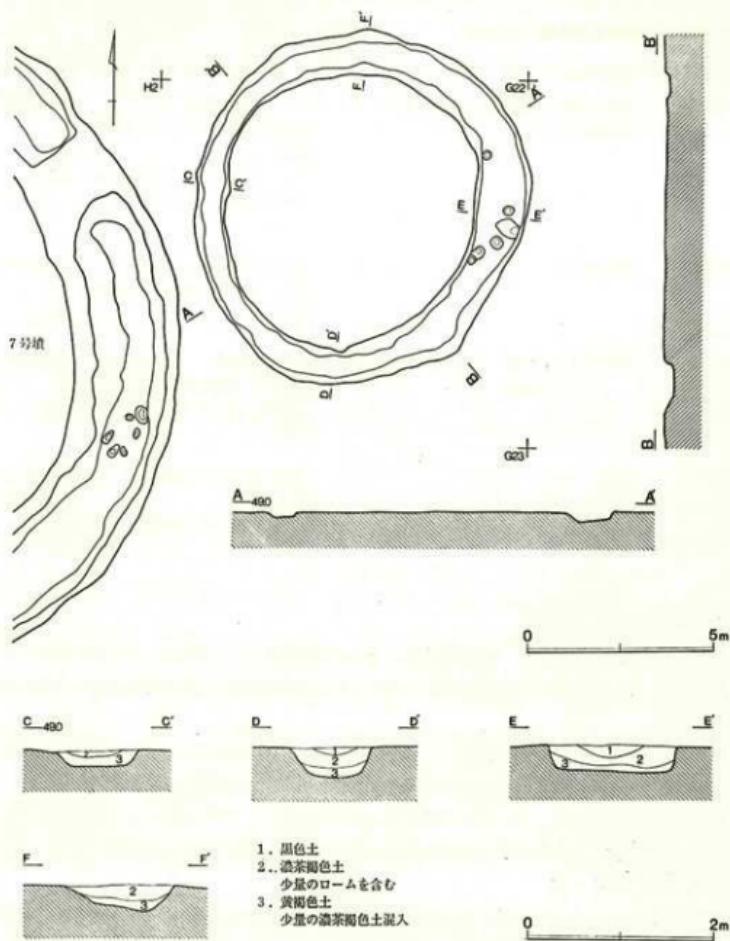
墳丘及び主体部は、完全に削平され、その痕跡も確認不可能であった。

検出された周溝は、外径4.4m、内径7.36mのやや不整な円形を呈し、調査区内では最小の古墳である。周溝の幅は、0.72~1.44mとかなり差があり整ったものではない。第7号墳に近接する西側の周溝は、幅狭になり、東側が幅広く掘り込まれている。また、西側周溝は、第7号墳を意識してかやや直線的である。掘り込みは15~25cmと浅く、底面は平底であるが、凹凸が非常に目立つ。特に東側には、6基のピットが集中して存在する。底面のレベルは、傾斜に沿って南へ低くなっている。

遺物は、周溝内より須恵器甌、台付甌、器台、手捏ねが出土している。



第113図 第8号墳出土遺物



第114図 第8号墳

第8号墳出土遺物（第113図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓶	1	胴径(9.1) 現存高 4.4	肩部に細い沈線をもつ。	ロクロ右回転成形。 体部下半は右から左への手持ち 窓削り。 灰色。胎土は石英、長石等白色 微砂粒を含む。焼成やや甘く多 孔質。	胴部30%現 存。 周溝。 須恵器。
台付甕	2	現存高 3.7		脚台部外面刷毛目、内面ナデ。 褐色。A～E+細砂粒。焼成良 好。	脚台部20% 現存。 1区。
器台	3	現存高 5.9	脚部に3孔を有するものと思わ れる。	脚部外面窓削き、内面刷毛目の 後ナデ。上端のみ窓削り。 橙褐色。A～F+細砂粒。焼成 良好。	脚部40%現 存。 周溝。
手捏ね	4	底径 3.2 現存高 2.4		体部外面ナデ、内面指ナデ。底 部ナデ。 橙褐色。A～F+細砂粒。焼成 良好。	体部30%、 底部100% 現存。 周溝。

第9号墳（第115図、図版25）

調査区内で最大径を誇る第1号墳の東側に、2.5mの距離をおいて存在し、C-21・22グリッドに位置している。台地肩部から緩傾斜面にかけて、吉ヶ谷期の第15・21号住居跡を切って築かれている。

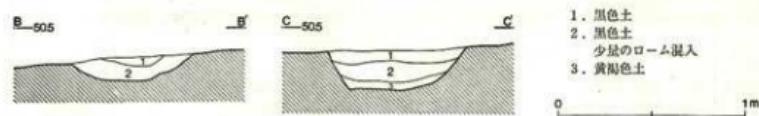
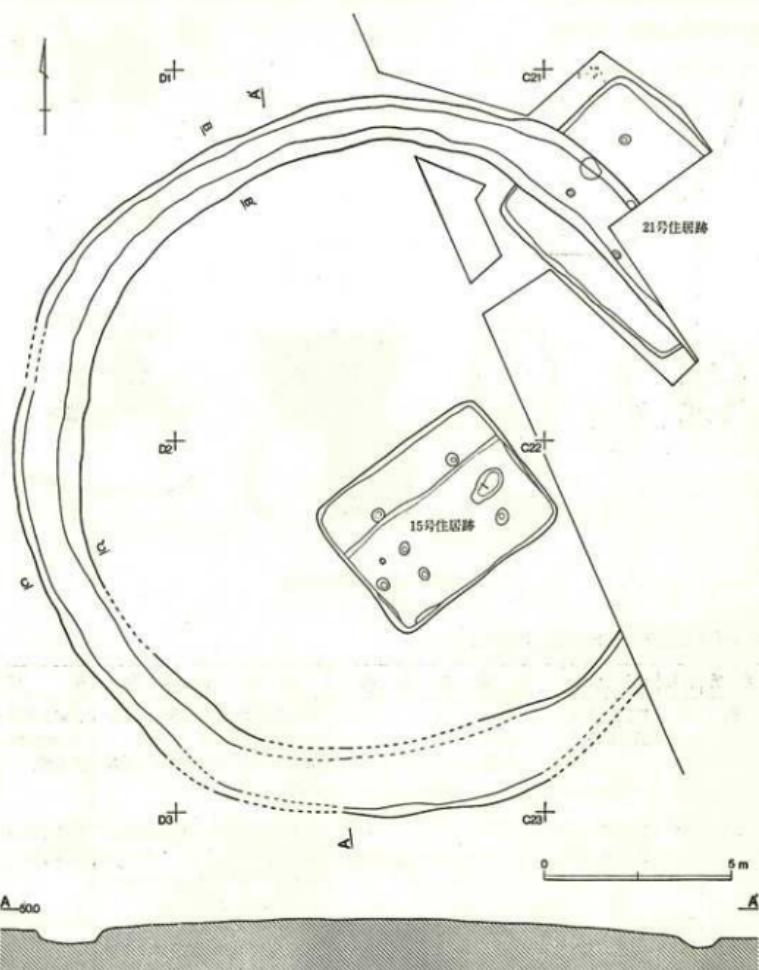
傾斜変更線である標高50mの等高線が、第9号墳上を、やや弧を描きながら東西に走り、墳丘らしき点も覗られるが、肉眼では、墳丘の存在を認めることは不可能であった。

確認面での周溝覆土が、ローム混入の黒色土であったために、プランがはっきりと確認できた。検出された周溝は、外径19.2m、内径16.4m、南側の一部に、根切り溝による搅乱も存在するが、整った円形を呈している。

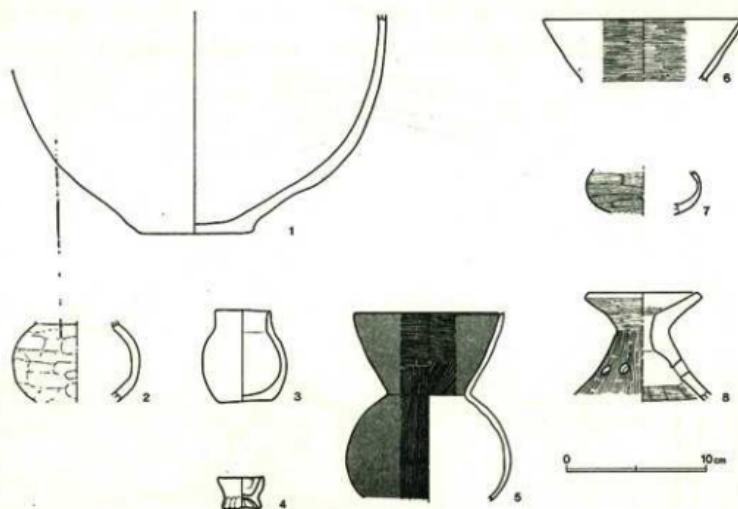
周溝の幅は、1.1～1.5m、第1号墳に接近する西側及び緩傾斜面に相当する北側が、やや幅狭になっている。深さは確認面よりほぼ均一で30～35cm、壁は、内壁に比べ外壁がきつく立ち上がっていいる。周溝底面のレベルは、傾斜に沿って北側へ低くなり、その差約40cmを測る。

東側が調査区外のため未調査であるが、調査区内では、主体部は検出できなかった。

遺物は、北側の周溝底部より手捏ね、小型壺が出土している。



第115図 第9号墳



第116図 第9号墳出土遺物

第9号墳出土遺物（第116図、図版51）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底径 8.3 現存高15.8		胴部外面木口状工具によるナデ。底部範削り。 橙褐色。A～F+細砂粒。焼成良好。	胴部上半70%、底部100%現存。
壺	2	胴径(9.1) 現存高 4.8		胴部外面範削り、内面木口状工具によるナデ。 淡黄褐色(灰褐色)。A～D+G+細砂粒。焼成良好。	胴部のみ40%現存。
手捏ね	3	口径 3.9 胴径 6.1 底径 3.9 器高 6.2		口縁部外面木口状工具によるナデ、内面ナデ。体部内外面ナデ。底部ナデ。 灰褐色。A～F+細砂粒。焼成良好。	完形。 1区周。
手捏ね	4	口径(3.2) 底径 2.7 器高 2.2		口縁部・体部内外面ナデ。脚台部内外面指ナデ。 褐色。A～E+細砂粒。焼成良好。	70%現存。 4区周。

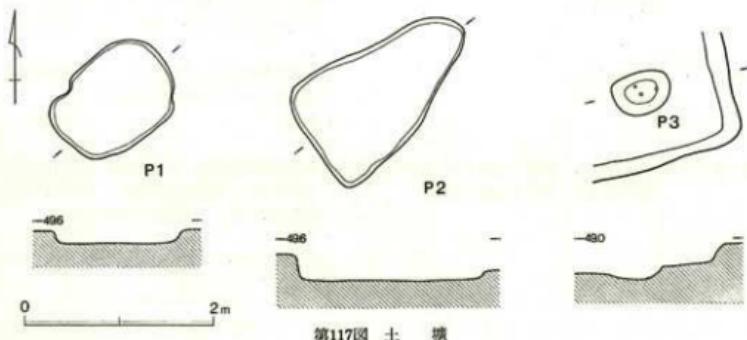
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小型壺	5	口径(10.8) 胴径(12.0) 現存高13.5	口縁端部を内傾させ平坦に仕上げる。	口縁部内外面笠磨き。胴部外面 笠磨き、内面ナデ。 赤褐色(外面口縁～胴部、口縁 内面赤彩)。A～F+細砂粒。 胎土緻密。焼成良好。作り丁寧。	口縁部20%、 胴部30%現存。 3区。
小型壺	6	口径 14.4 現存高 4.5		口縁部内外面笠磨き。 褐色。A～G+細砂粒。胎土 密。焼成良好。作り丁寧。	口縁部20% 現存。 3区周。
壺	7	胴径(8.2) 現存高 3.2		胴部外面刷毛目、内面ナデ。 淡褐色。A～G+細砂粒。焼成 良好。	胴部20%現 存。 4区周。
器台	8	受部径 7.8 現存高 7.7	脚部に2孔1対になり、4孔を 有すると思われる。	器受部外面笠磨き、内面笠磨き と思われる。脚部外面笠磨き、 内面上半ナデ、下半刷毛目の後 ナデ。 橙褐色。A～F+細砂粒。焼成 良好。	器受部20%、 脚部30%現 存。 4区周。

(今井 宏・立石盛詞・酒井和子)

(5) 近世の遺構と出土遺物

近世の遺構としては、土壙3基・溝1本・塚1基・社跡・屋敷跡・埋設遺構11基・炭窯1基が調査されている。塚と炭窯を除き、他はすべて調査区北端の台地縁辺部に存在し、古墳や住居跡と重複し検出されている。

a 土壙（第117図）



第1号土壙

G-24グリッド・第1号住居跡の北側に存在する。1.35×1.05m、隅丸長方形の浅い皿状土壙。ロームを多量に含む黄褐色土が堆積し、遺物は出土していない。

第2号土壙

第1号土壙に並行し、G-19グリッドから検出された。1.95×1.25mの三角形を呈する浅い土壙。遺物は皆無である。

第3号土壙（第123図、図版29）

第9号住居跡を切って掘り込まれていた。長径65cmの梢円形土壙で、底面より寛永通宝が3点出土し、墓壙と思われる。

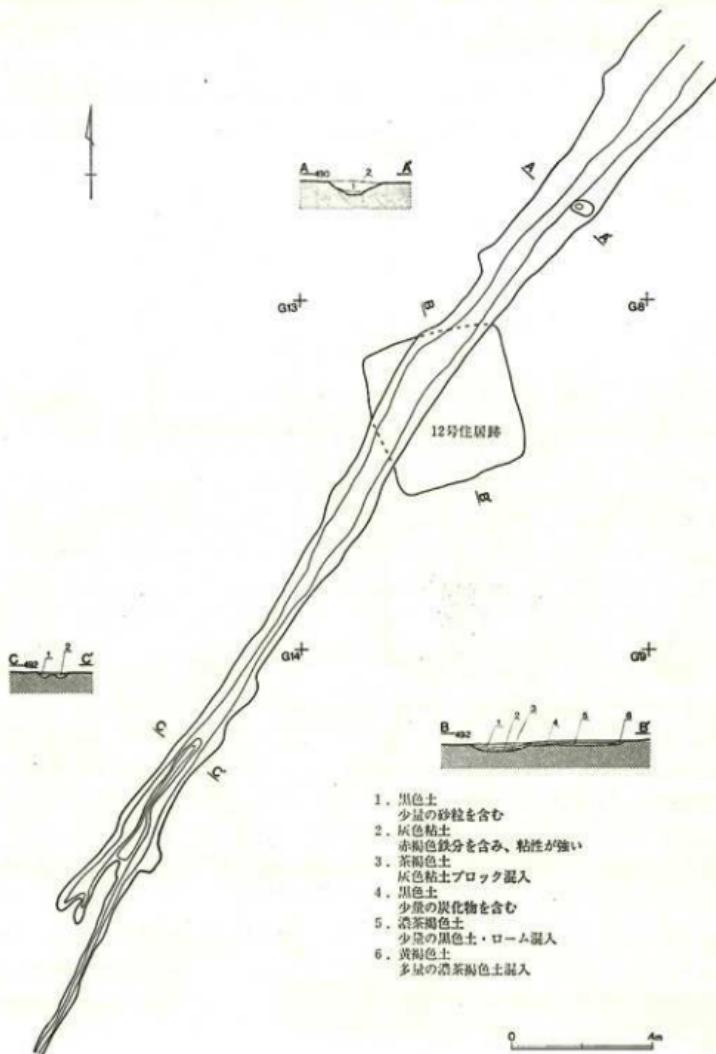
b 溝（第118図）

調査区を東西に横断する状態で、G-2・7・8・14グリッドにかけて位置し、五領期の第12号住居跡を床面下まで掘り込んで検出されている。

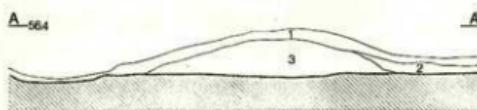
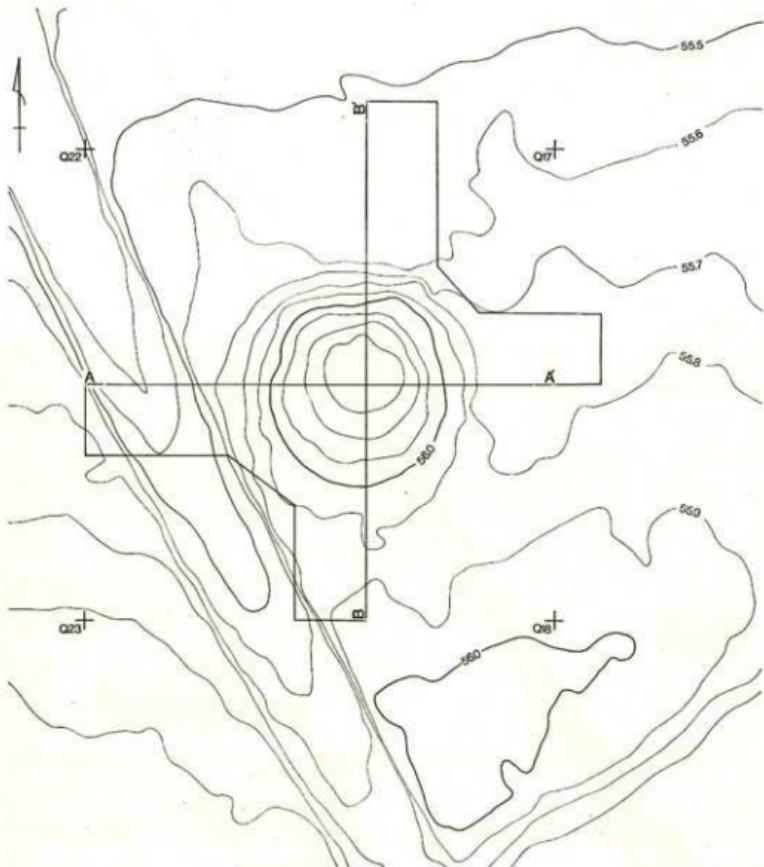
溝の走行は、等高線に対して35°斜行し、直線的である。溝の東西両端は、あまりにも浅いために遺構確認時に消失してしまったものである。

溝の幅は、最も広い東端で2.54m、分岐する西側で0.3m、深さは42~16cmを測り、幅も深さも西側で縮小している。

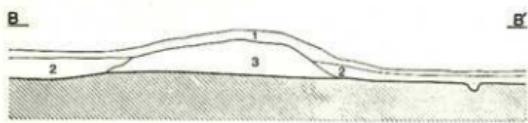
黒色土・灰色粘土・茶褐色土の堆積が認められ、黑色土中より、内耳鍋や江戸時代の陶磁器片が



第118図 溝



1. 茶褐色土
2. 茶褐色土
少量のローム混入、弱い粘性をもつ
3. 黑褐色土
多量のローム混入、弱い粘性をもつ



0 4m

第119図 塚

出土している。

c 塚（第119図、図版26）

狭い平坦な面に立地し、第2号墳と第4号墳を結ぶほぼ中間に位置している。2号墳の南東約13m、4号墳の北東約13mを測り、塚の南西据部分に道路が走る。

規模は長径5.56m、短径5.3m、高さ1mを測り、ほぼ円形を呈する。

盛土は3層に分かれる。第1層は茶褐色土で、多量の腐植土を含む。第2層は茶褐色土だが、少量のロームが混じり弱い粘性をもつ。第3層は黒褐色土で、ロームを多量に含み、粘性は弱い。つき固められた形跡は認められなかった。出土遺物はない。

d 杜跡（第120図、図版27）

市の川の沖積地を眼下に臨む、台地肩部から緩傾斜面にかけて築造された、調査区内で最大規模を誇る第1号墳々頂部から検出された。D-7・8グリッドに位置する。

調査開始当初、墳頂部に設定したグリッドより検出されたために、第1号墳に伴う主体部と思われたが、寛永通宝の破片やカワラケが出土し、近世の所産であることが判名した。

N-67°-Eを主軸方向とする東西に長い石組の基壇で、東西1.5間、南北1間の規模と推定される。石組は状態の良い西側で3段残り、南・北側では1段、東側は崩壊して礫が散在している状態であった。

使用された石材は、凝灰岩の切石が主体であったが、中には破壊された緑泥片岩製の板碑も使われていた。

志野焼の皿・灰釉陶器も出土している。

出土遺物（第121図）

板碑（1～3）

(1) 上半分が残存する。現存高32cm、幅20.5cm、厚さ2.6cmを測る。二条線をもち忤線はない。主尊種子は阿弥陀如来で、蓮弁が僅かに残る。

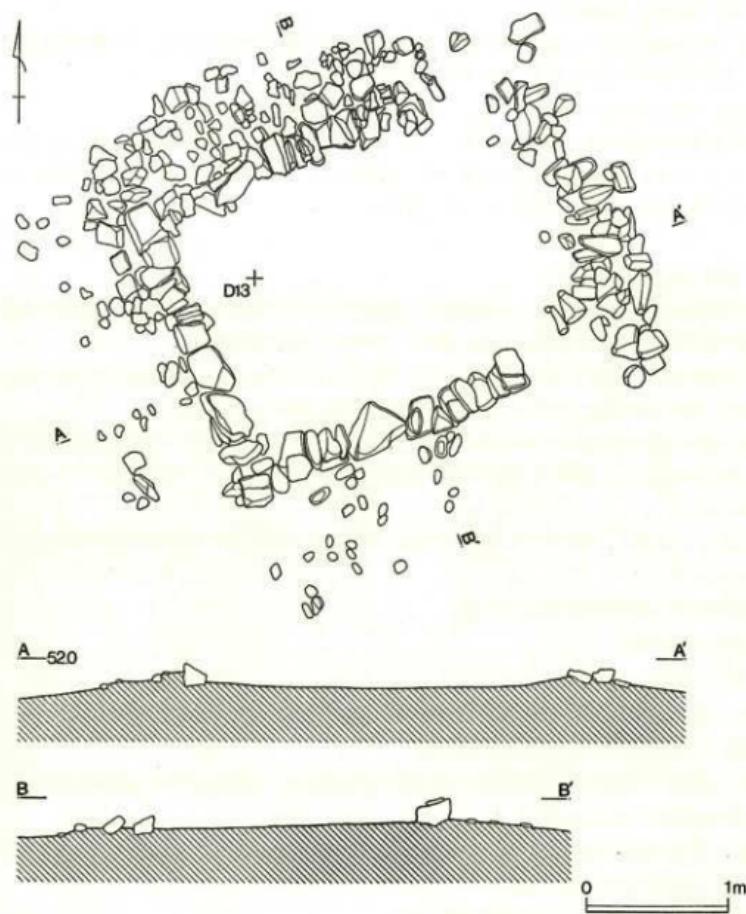
(2) 上半部分が残存する。現存高30.7cm、厚さ2.9cmを測る。二条線をもつ。主尊種子は月輪を伴い阿弥陀如来と考えられる。

(3) 下半分が残存するが基部を欠く。現存高26cm、下幅17.8cm、厚さ3.3cmを測る。忤線をもち銘文は「□年子戊正月三日」である。

以上(1)～(3)の石材は、いずれも緑泥片岩である。

皿(4) カワラケ。口径8.5cm、器高2.1cm、底径6.0cmを測り、口縁を僅かに欠く。ロクロ右回転成形。底面右ロクロ回転糸切り。底部から体部にかけて指頭押え痕が残る。淡橙褐色を呈し、赤色粒子、白色微粒子、砂粒をやや多く含む。焼成は良好である。

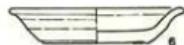
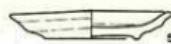
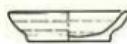
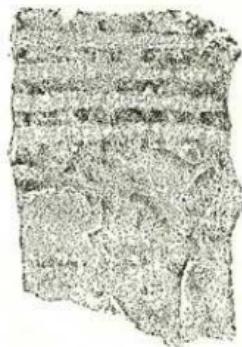
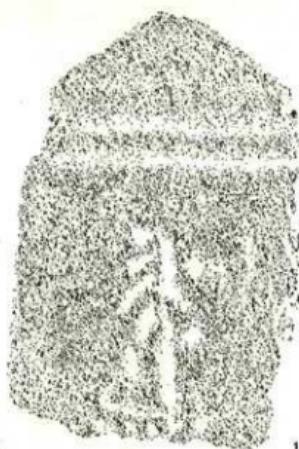
皿(5) 志野焼。口径11.8cm、器高1.9cm、底径5.5cmを測り、口縁の一部を欠く。削り高台で内外面に陶枕跡が残る。白濁色を呈し、長石粒が溶けきれていない。全体に細かな貫入が入る。焼成は良好である。



第120図 社跡

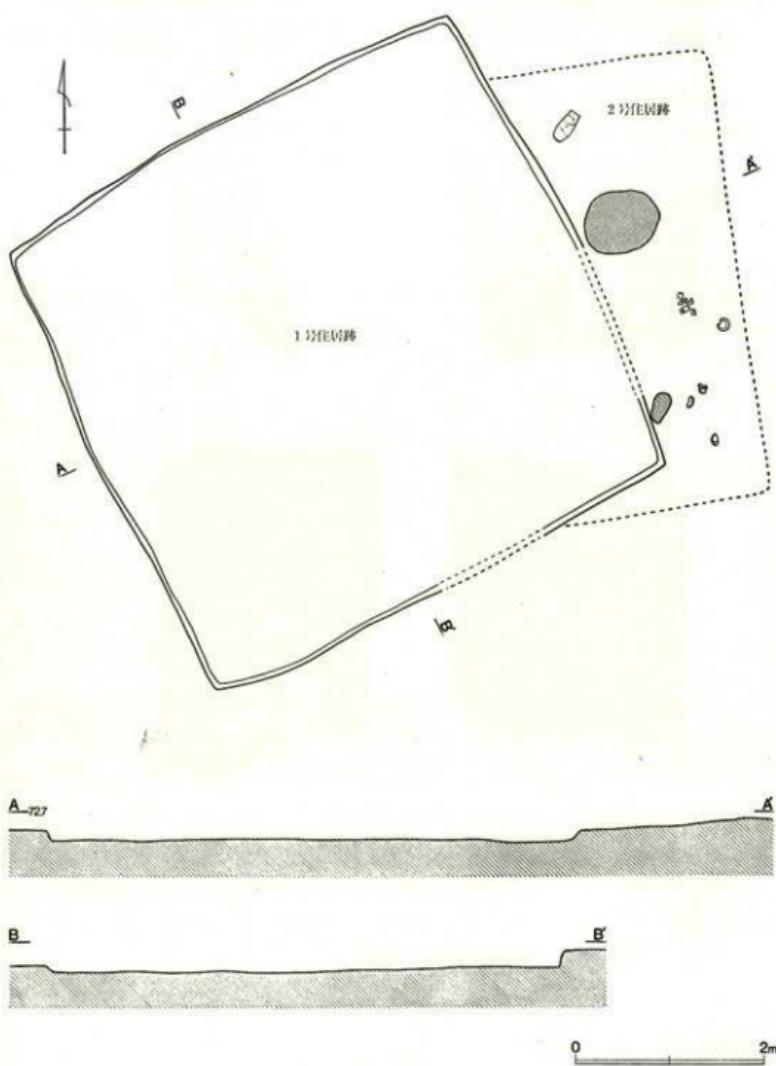
皿(6) 灰釉陶器。口径12.7cm、器高2.1cm、底径7.5cmを測り、全体の $\frac{1}{4}$ を欠く。削り高台で、内外面に陶枕跡が残る。全体に経釉がかかり、焼成は良好である。

皿(7) 推定口径 18.7cm、残存高 3.2cmを測り、全体の $\frac{1}{4}$ を欠く。口縁下に段をもち濃緑色の釉がかかる。外面口縁部分は、窯変により青味がある。焼成は良好である。



0 10 cm

第121図 社跡出土遺物



第122図 屋敷跡

e 屋敷跡（第122図、図版28）

H-16・17グリッドに位置している。第7・8号住居跡を切って建てられた屋敷跡である。屋敷の東側に設置されていた地床の囲炉裏、流し溜もしくは便所と推定される樽埋設遺構が検出されている。囲炉裏は $1.8 \times 2\text{ m}$ の長方形で、四方を1間半の礎石に囲まれている。樽埋設遺構は、東南隅に存在している。2尺程の樽が埋め込まれて、周囲に粘土が貼られ、石で押えてある。カワラケ、泥面子、寛永通宝が囲炉裏より出土している。

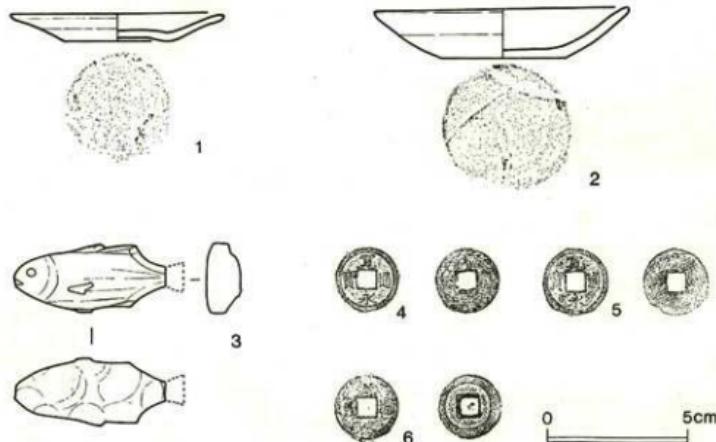
出土遺物（第123図）

皿(1) カワラケ。口径7.2cm、器高1cm、底径4cmを測り $\frac{1}{2}$ を欠く。ロクロ右回転成形。底面右ロクロ回転糸切りで、やや上げ底気味である。淡茶褐色を呈し、砂粒僅少。焼成良好。

皿(2) カワラケ。口径9.3cm、器高1.7cm、底径4.9cmを測り、 $\frac{1}{2}$ を欠く。ロクロ右回転成形、底面右ロクロ回転糸切り。淡茶褐色を呈し、砂粒をやや多く含む。焼成は良好。

泥面子(3) 魚形を呈し、尾部を欠く。長さ5.5cm、幅2.1cm、厚さ1.2cmを測る。片面に魚の形状を型取りし、裏面は指頭押え痕が残る。

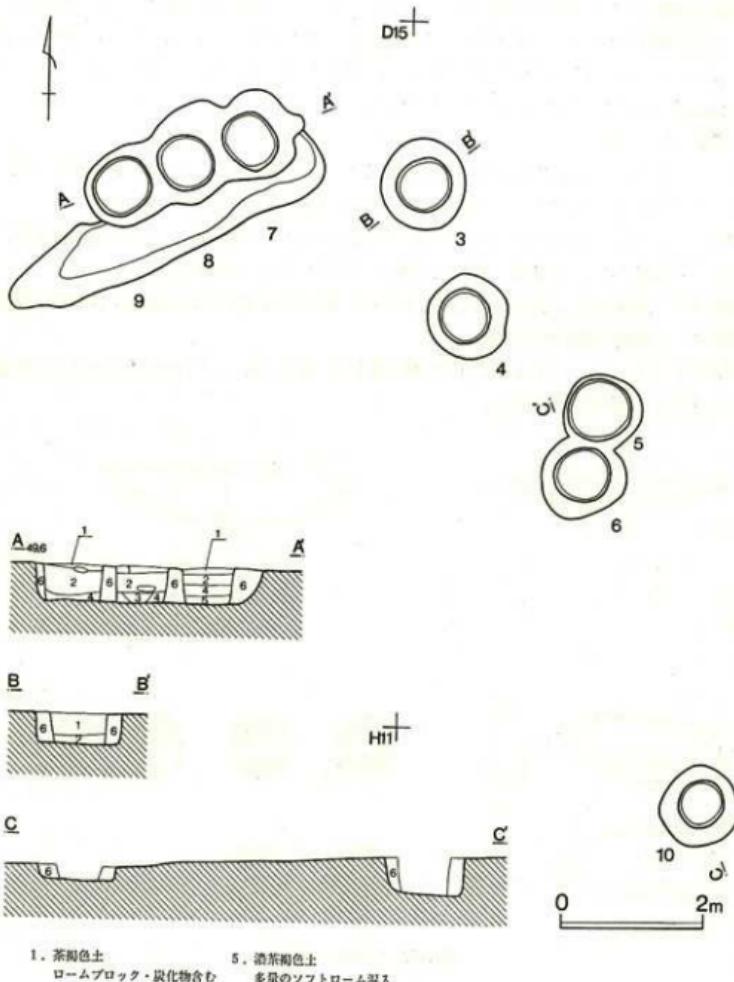
寛永通宝（4～6）いずれも江戸時代の寛永通宝で、背文は無い。6はかなり銹がすみ状態が悪い。4・5は比較的良好である。



第123図 屋敷跡出土遺物

f 樽埋設遺構（第124図、図版29）

第1号墳の南側、D-5・15グリッドにかけて、8基が並んで検出されている。3基1組、2基1組と単独のものがある。



第124図 埋設遺構

いずれも、土壇内に樽を据え置き、周囲を粘土で覆った同一の構造をしている。周囲の堅くつき固めた粘土に、樽の口・胴・底の3本の輪が明瞭に残っていた。樽の大きさは、2尺5寸と3尺のものがある。

どのように使用されたものか判然としないが、貯蔵用施設の可能性が強い。

内耳鍋・石臼が出土している。

出土遺物（第125図）

内耳鍋(1) 推定口径 36.2cm、器高3.7cm、推定底径 36.0cmを測り、全体の $\frac{1}{4}$ が残る。胴中位に窪みをもつ口縁で、やや内湾気味に外傾している。外面口縁は横撫デ、底面周辺は指撫デ調整が施される。内耳は2個残存し、1個・2個1対の計3個であったと考えられ、口唇や下から底面にかかる。橙褐色を呈し、外面には煤が付着している。砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。

内耳鍋(2) 推定口径 38cm、器高 5.6cm、推定底径 34.6cmを測り、全体の $\frac{1}{4}$ が残る。口縁は直線的に外傾する。外面口縁中位まで横撫デ、中位下は削り調整を施す。内耳は1個残存し、口唇直下から底面にかかる。暗茶褐色を呈し、砂粒を少量含む。焼成は良好である。

内耳鍋(3) 推定口径 36.6cm、器高 5.6cm、底径 33.6cmを測り、全体の $\frac{1}{4}$ が残る。口縁中位が膨らみ、内湾気味に外傾する。口唇部は平坦化している。外面口縁中位まで横撫デで調整し一部指頭痕が残る。中位下は削り調整。内耳は1個残存し、口唇部や下から底面にかかる。内耳をつくる粘土紐は、平紐状にした粘土の両端を内側に丸め込んだものである。淡茶褐色を呈するが、内外面口縁は煤により黒褐色を呈している。砂粒を少量含み、焼成は良好である。

内耳鍋(4) 推定口径 33.6cm、器高 4.9cm、推定底径 29.6cmを測り、全体の $\frac{1}{4}$ が残る。口縁中位が膨らみ、内湾気味に外傾する。口唇部は平坦に作られる。外面口縁中位は横撫デ、中位下は削り調整を施す、内耳は1個が残存し、口唇や下から底面に至る。淡茶褐色を呈し、外面口縁部に煤付着。砂粒を含み、焼成は良好である。

内耳鍋(5) 推定口径 36.6cm、器高 5.7cm、推定底径 31.6cmを測り $\frac{1}{4}$ が残存する。口縁は直線的に外傾し、先端部で直角に反り返って口唇部は外側をむく。外面口縁は横撫デ、底面周辺は指頭撫デ調整。底面に補修孔が1個認められる。内耳は隣接して2個残り、1個・2個1対の計3個あったと考えられる。内耳をつくる粘土紐は、口唇部や下から底面にかかるもので、平紐状の粘土紐両端を内側に丸め込み、頂部を指（親指か）で押さえつけている。茶褐色を呈し、口縁部に煤付着。砂粒を多く含み、焼成は良好である。

内耳鍋(6) 推定口径 37.6cm、器高 5.8cm、推定底径 33.4cmを測り、 $\frac{1}{4}$ を欠く。口縁は底部直上に段をもちやや内湾気味に外反し、先端部で反り返る。(5)のように直角まで至らない。外面口縁は横撫デ、底部周辺削り調整。底面に2個の補修孔が残る。内耳は1個残り、(5)と同様、口唇や下から底面に至り頂部を指で押えている。淡茶褐色を呈し、口縁部に煤が付着。砂粒を含み、焼成は良好である。

羽口(7) 土製の小形品であり $\frac{1}{4}$ を欠く。全長17.3cm、外径7.5cmを測る。孔径は、先端2.2cm、末端3cmを測り先端にむけてすぼまる。先端部は火を受け荒れている。第1号墳々丘より出土。

石臼（8・9）いずれも上白で、上面の凹みは角が丸味をもつ。8は5本、9は7本の上に4本